

344
265

毛筆上巻ぶく

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



箱戶城圖



特217
113



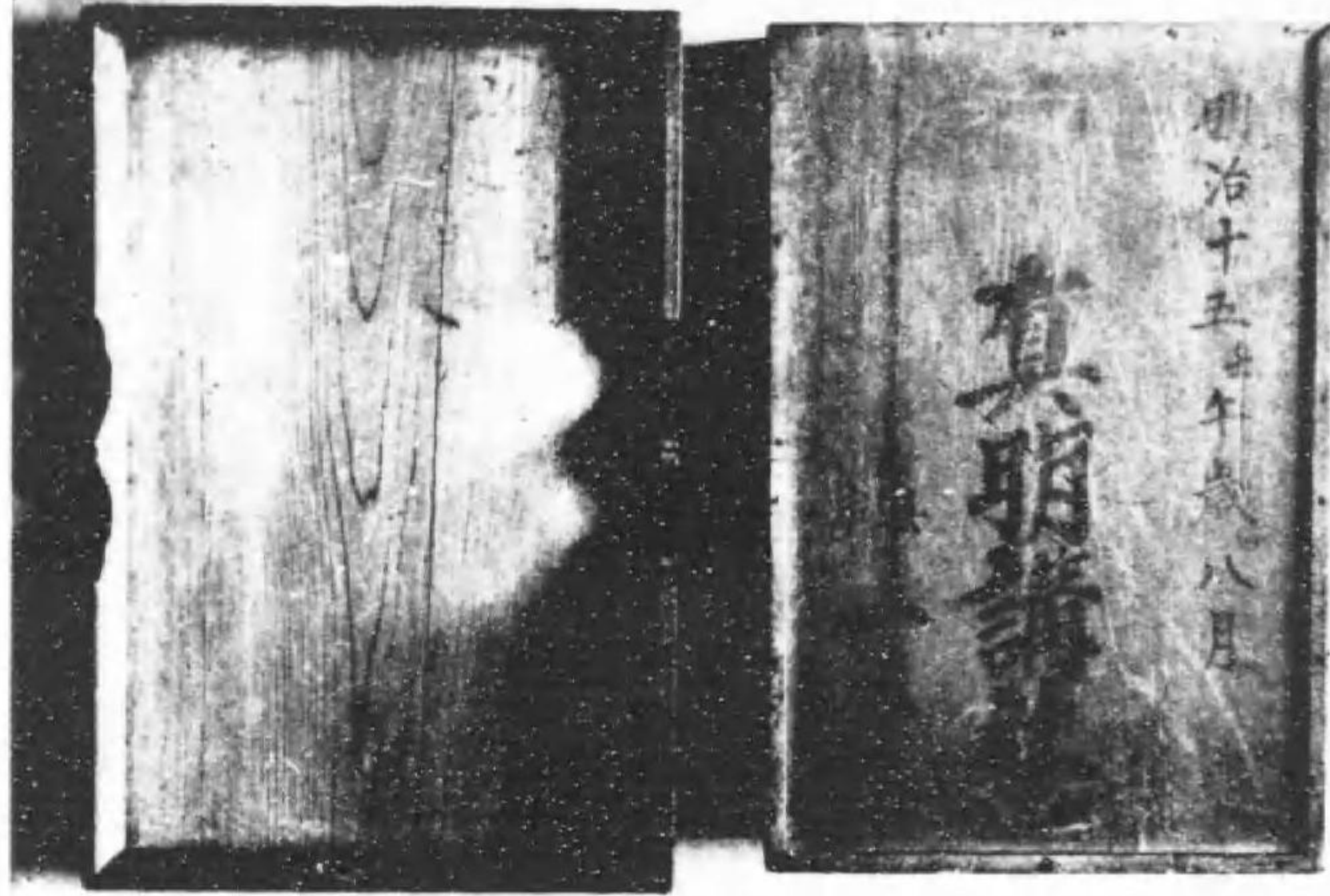
天理教兵神大教會史 第一編

天理教兵神大教會藏版

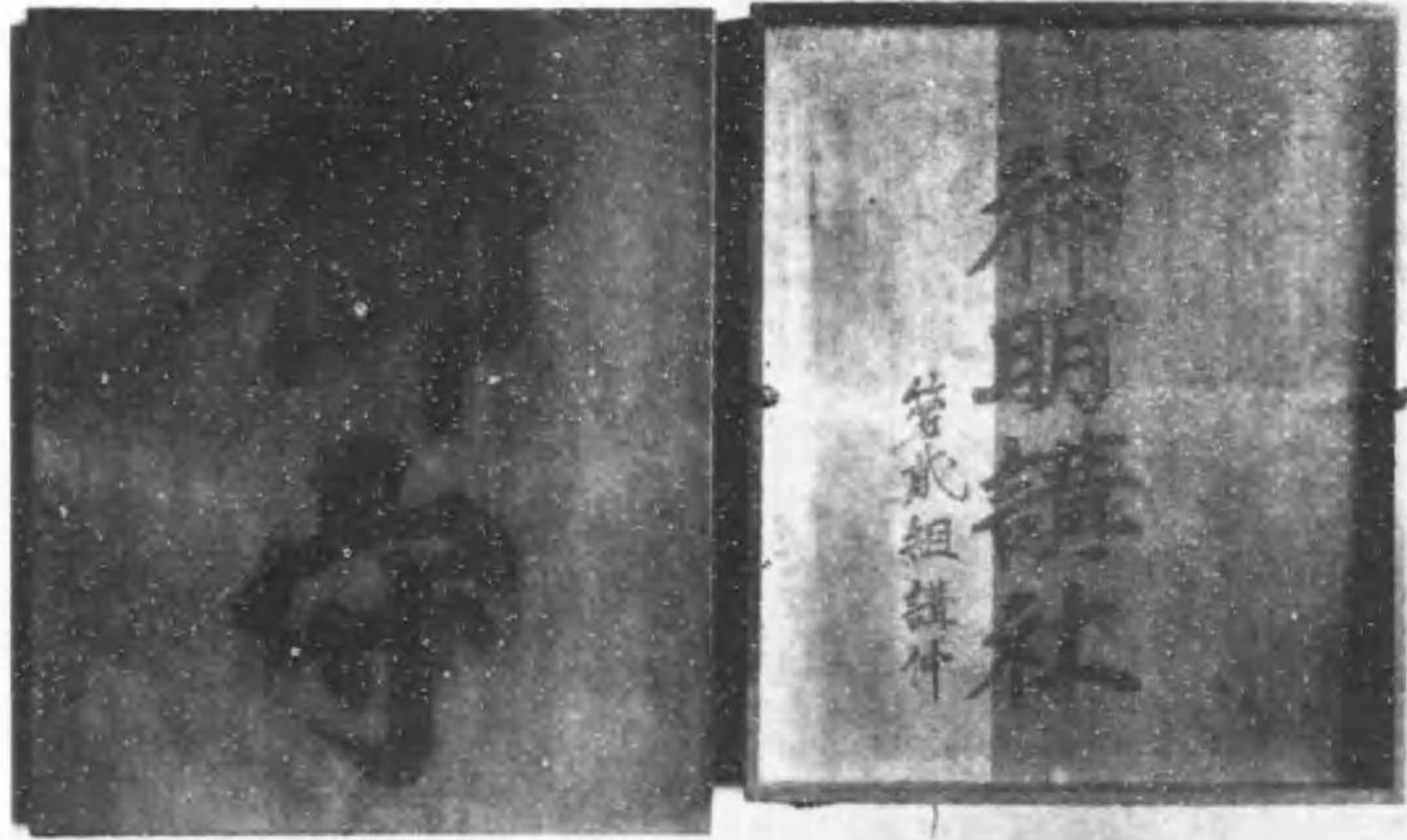




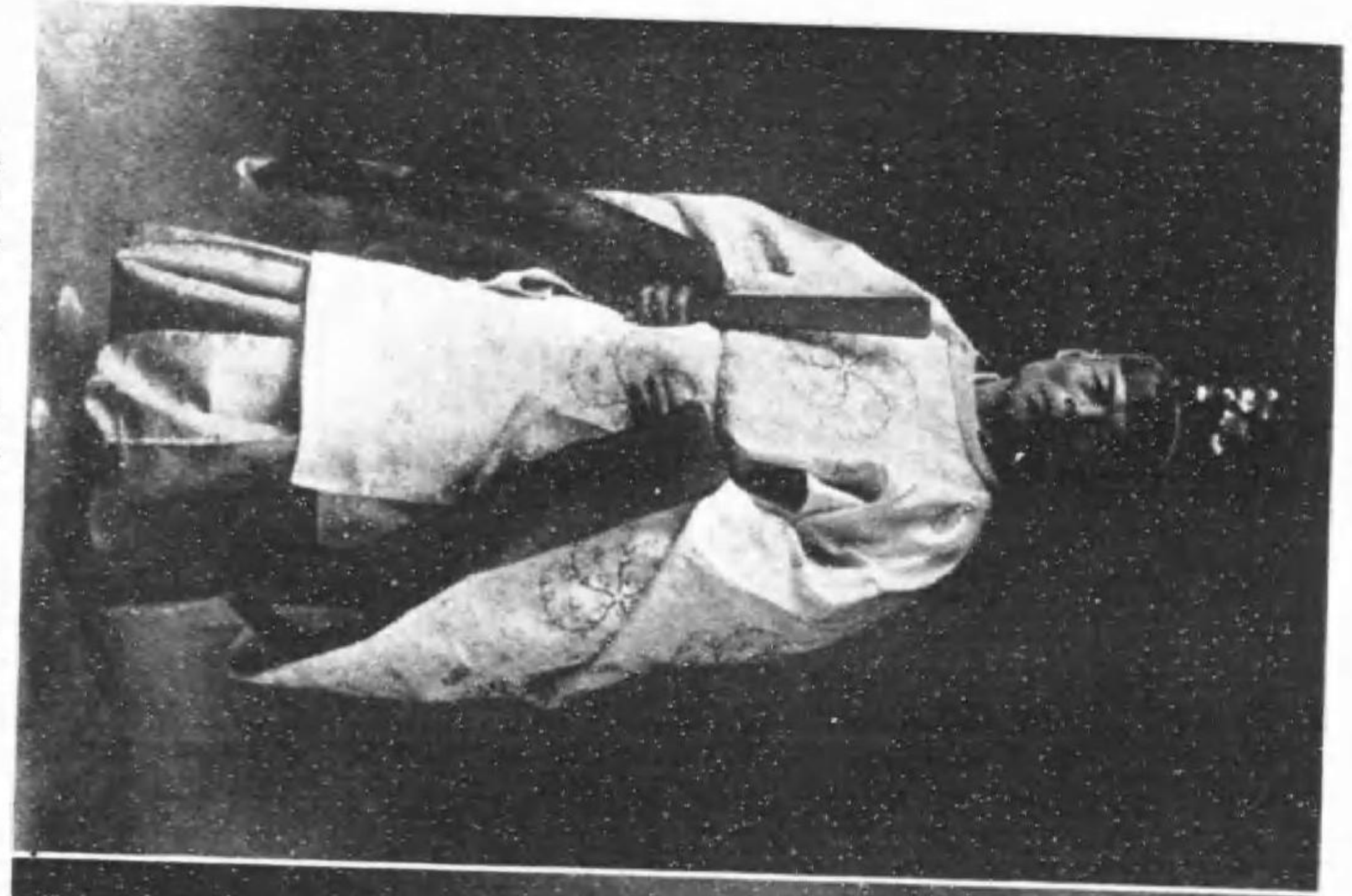
(照參章三、二第) 像肖氏吉久田端元講



(照參節三第章二第) 箱の衣赤御社講方田端の初當講結



(照參節三第章二第) 箱の衣赤御社講方松赤の初當講結

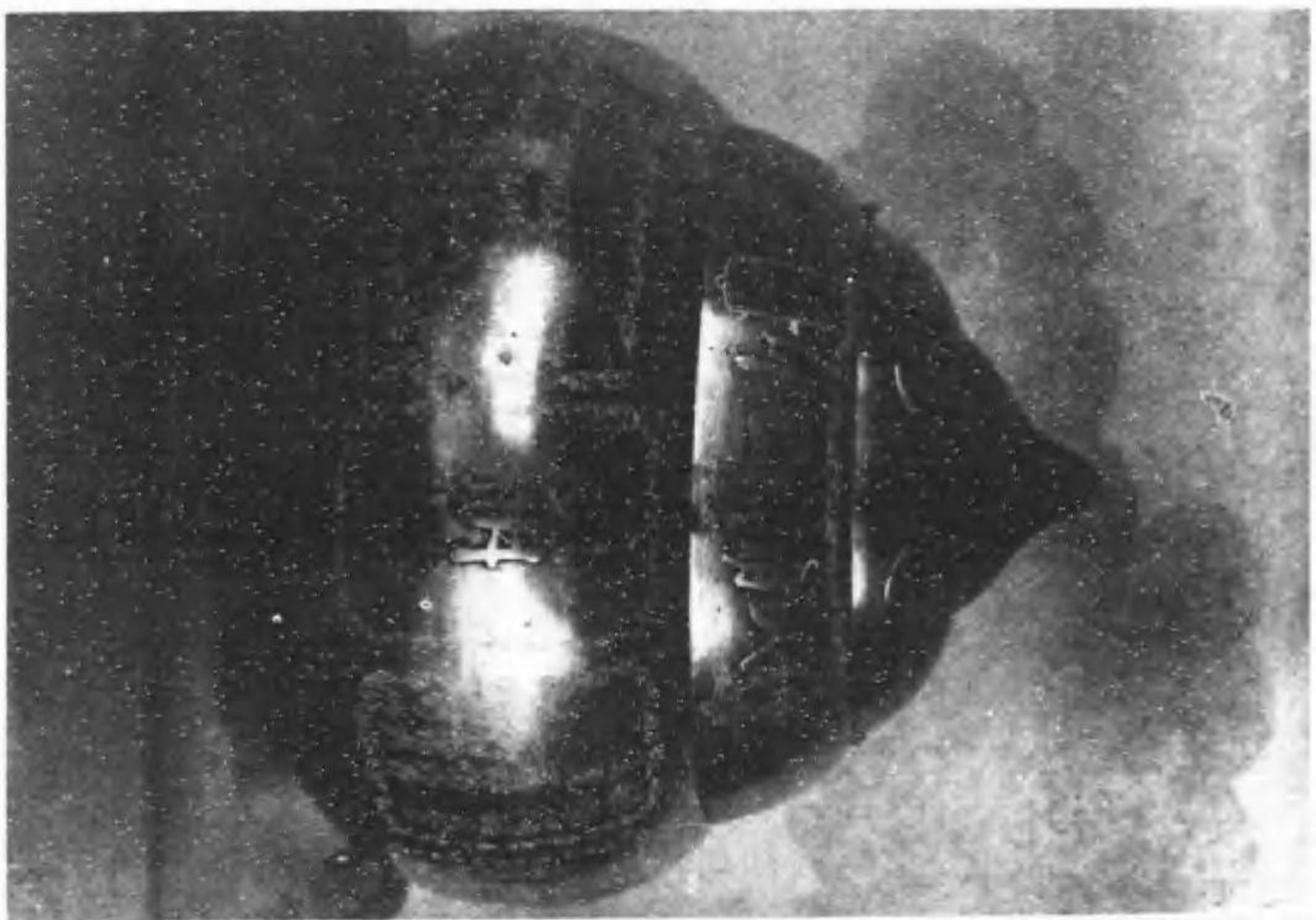


(照參章一第) 隈宵氏吉吉花立



(照參章二第) 隈宵女士富小頭

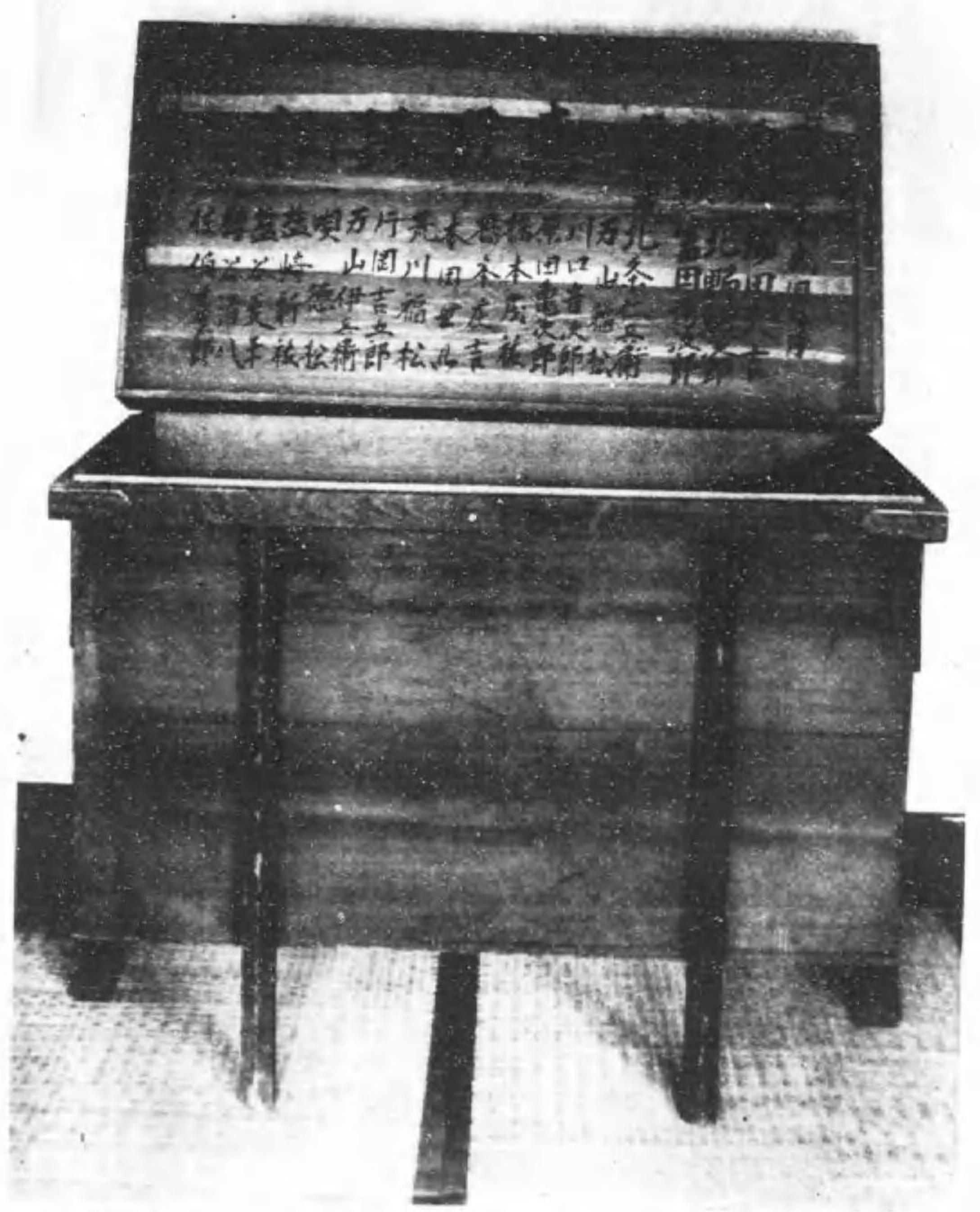
玉水大の念記新制神海方田端



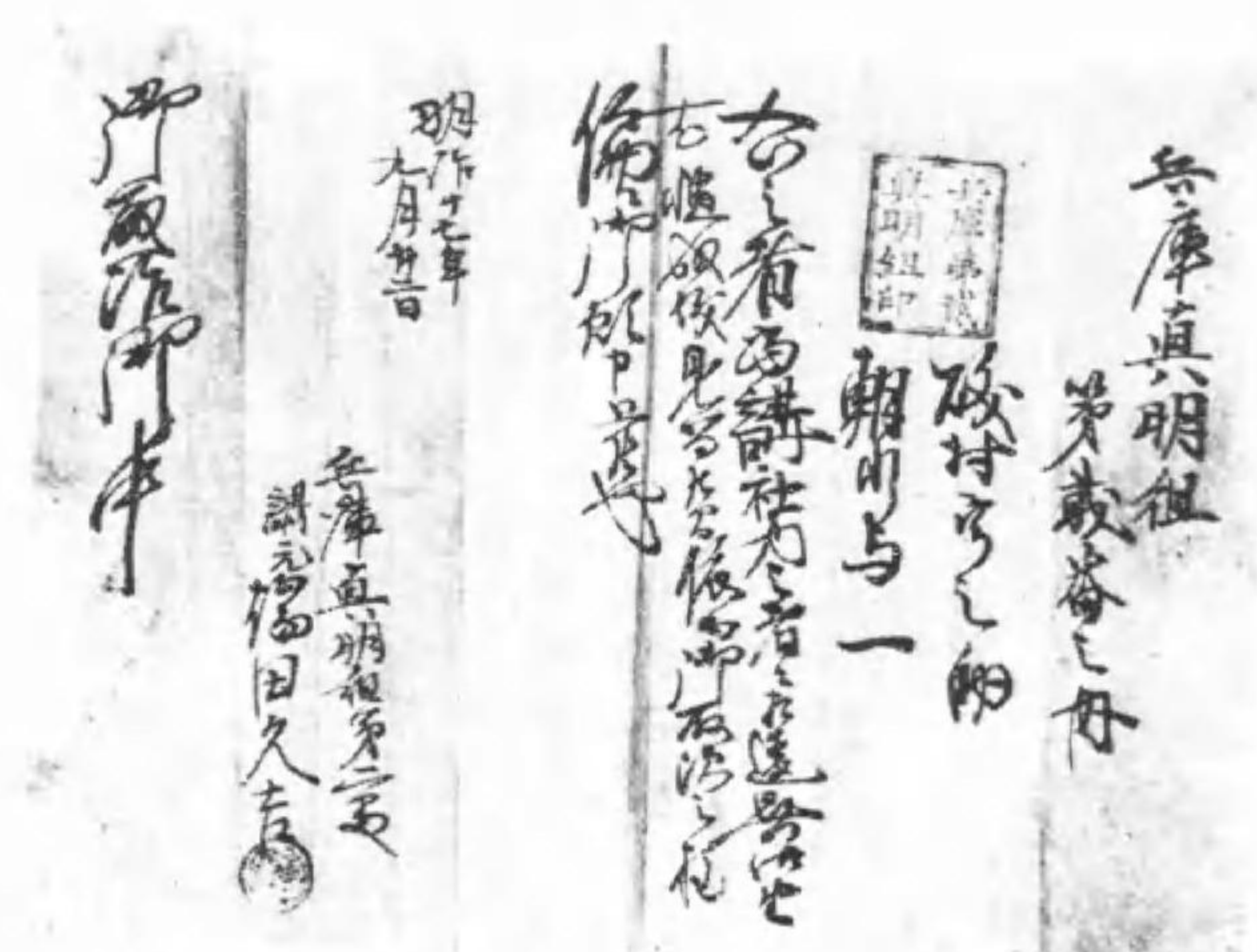
照參節六第章二第 則規社講の初最方田端

一 聖人問世風俗教至階之於慈厚
 此復更之愈勝生春亦能教王是之
 聖人問世風俗教至階之於慈厚
 則後社成浸更之進之故社之教更
 道教事之密中成奇之來觀發
 怨怒和協力之來為正不失其之
 階之極名之依同盟強中帝に
 高情心惜之何致行要之事
 田端

玉水大 真明講 第一條



(照參節三第章二第) 櫃唐の入記名連社講の初最方田端の後直講結



(照參節四第章三第) 書文の後稱改と番二第組明真庫兵



あのりす手に階二の端左) 狀現の邸舊の氏吉久田端元講
一月十年七和昭、中作造今。家るあてめ閉の戸れ破下階、り
(照參項二第節一第章三第及項三第節二第章二第、影撮日)

序

昔の布教はかうであつた。初代会長時代はかうであつた。その頃の御地場と兵神との關係はかうであつた。などと初代の先輩方から、是迄幾度といふ數を知らず、昔の兵神の道に就て聞かして頂いて居た。

然るに最近それらの初代の先輩方の相次いで御出直しをせられ、今や二三の指折り數へる程の方しか残つて居られぬ様になつた。それと共に若い二代目三代目乃至それ以上の方々が部内一般に急に著しく殖えてきて、今や殆んどそれらの人達のみとなつてきた様な氣がする。

今その新舊の方々を對照して見るに、新しい方達は舊い人達に比して、よほど教養の上に於て恵まれてゐられる。然し舊い先輩達の様な感激性と喜んで道の上の苦勞を迎へて行つて、助一條に又神一條につくすといふ純一なる信仰精神に於て、或一部では衰へてゐられる様と思ふが、その點に於て若い方々は、大いに猛省一番して舊い先輩の方々に習はねばならぬと思ふ。

此の道は教理を覺えるのが本意ではない。その教の理を、口に説かずとも、日々に身に體して實行する。言ひ換へれば、教の理に生き出でる。更に短言すれば信仰に生きるものでなければならぬ。舊い先輩は、教養に恵まれ無くても、よく信仰に生き出でられた。そこに本教として何物にも代へ難い尊さと價値とがあつたのである。蓋しそれが本教の生命であり、又當兵神の道の生命でもある。

數年來當教會に於て、それら初代の先輩の尊い信仰經驗を廣く輯めて、當大教會史を編んで居たが、今回遂にその第一編を刊行する運びになつた。尙逐次全編の發行を爲す筈であるが、御一統様方に置かせられては、之れに依つて元一つの理を忘れぬやうにして、先輩達の築かれたる道の上に、更に幾倍する道の上の本當の生き方を爲されて、先輩方の餘徳に答へると共に時將に本教立教百年を記念さるゝ重大なる旬に當り、世界一列ろくちの神意を體して、道の上に十分の御奉公あらん事を切望して止まないであります。

昭和七年九月廿六日

清水由松

凡例

一、將來の大計を誤らず、効果ある成績を收め様とするには、現在を最も力強く生きねばならぬと思ひます。その現在を力強く生きんとするには、眞の自己に目覺めて、模倣でない本當の自らの眞實に生きねばならぬと存じます。

一、然るに元來自分の成人して今日あるといふのは、その今日まで生きて來、その獨特の環境に育てられて來たといふ、他の者ならぬ己れ自らの過去の事實の上にあると存じます。之を我等の教會、我等の兵神の道に於ても同様であります。即ち我等の教會、我等の道の史實歴史の上に今日の我等の兵神の道が生き出でてるのであると存じます。要するに我々は、我が過去の善惡の如何に拘らず、その一切の集積の上に、今日生きてゐる自己である事を考へるのであります。

一、その故に深く正しく自己を正視し自覺するには、必らず他者ならぬ、己れ自らの過去の通つて來た道すがら即ち歴史に顧み、之を正當に認識せねばならぬと思ふのであります。之を本教では各自の因縁への自覺と云はれてゐます。それは取りも直さず、眞實の自己への自覺

といふ事に外ならないと思ふのであります。かうした本當の自分の因縁、自分の歴史を悟らないで、何うして眞似ならぬ本當の自分の眞實から出づる力強い今日及明日への活動が爲されませう。

一、然るに當大教會はその初代の先輩達の相續いて出直され、その兵神の道の成り立つて來た生きた歴史とも云ふべき、それらの先覺の殆んど大半を失つた今日、今にしてそれら先輩達の通られた尊い道すがらと信仰を、如實に録して置かないと、若き今日以後の後輩が、その兵神の道として、最も大切なる自らの自覺を失ふ事になると思ふのであります。兵神の道が、その兵神の道の正しい自覺を失つて、どこに今日及明日への力強い歩みが爲されませうか。

一、かうした要求が、去る昭和五年、清水初代会長様の三十年祭、並に兵神の道の創生五十周年を迎へて漸く具體化し、遂に今日茲に當天理教兵神大教會史の第一編を刊行する運びになつたのであります。之に依つて幾分にも兵神の道自らの自覺を深め、自らの眞實に立脚したる、他の借物ならぬ眞の兵神の道としての力強い今日及將來の活動に皆様が御入り下さるならば、此度の編史の目的の大半を達するものとして、編者の深く満足とする所でありませう。

一、次に編史に當りまして編者の第一に心掛けましたのは、史實の正確といふ事でありませう。

た。之が爲めには随分外の御方から御覽になりますれば、そんなにまで些事に拘泥せいで、恣い加減にして置けば良からうにと、一再ならず御注意になりましたが、そこに編纂上の良心と申しませうか、それが許しませず。而もそこからどんなに正しい發見と力を得ましたこととせう。些少の叙景の如きにまで、十分根據ある史實に基いて、決して單なる想像上の創作でない事を申し上げて置きます。

一、第二には努めて生ける精神を御傳へしようとした事でありませう。元來本教會史の中心を成しますものは、當教會の各先輩方の篤き本教に對する信仰であります。然して信仰は我等の精神生活中の最深最奥の要求で、殆んど生命そのものと同じのものであります。その故に只單なる報告記録の如うでは、その生ける精神を御傳へする事が出来ないと存じました。然るに當教會史にしてその生ける信仰精神の感激を御傳へする事が出来なければ、その編史の大半の効果を失ふものであると存じました。依つて努めて記述の如實的、且批判的ならん事を力を致したのであります。それがために前者の正確の要求と共同して、些細な事にまで十分究めて記しました心算であります。

一、第三には全編の全き統一といふ事にも、餘程に心を勞しました事でありませう。然るに前二

者の要求から、史實を廣般詳密に調べました處から、全體の機構が複雑を極め、採録する範圍や箇條が多雜になりました、一時は輯收に窮りましたが、それだけ一人一事に遍せず、比較的多種多彩なる豪華を持ち乍らの統一を、些か得ました心算であります。

以上正確と如實と統一、これが本史編纂の三指導観念でありました。

一、次ぎに全編は之を數編に分けまして、各編を別々に分冊して出す事に致しました。それは全編が相當大部のものとなりますと、その全部の完稿を待ち居りましては、現時の旬の理に遅れる。既に今日でも一二年その發刊が遅れて居りますのに、尙此上に遅れましては、何とも御一統に對しまして申譯ないと存じまして、かく分冊にして刊行する事になつたのであります。

一、今回出しました第一編、兵神の芽ぶく頃は、明治十四年より明治十八年に至る五ヶ年間に於ける當初の、兵神の道の主流を中心として、その年間に發生致しました現、舞子、三木、眞加、武川、社、加西神崎、明石、美囊、加古、飾東、八部の、各教會の初めての芽生えの姿を記したのであります。そこにはまだ兵神初代會長となられました清水與之助大人の記述は、殆んど現はれて居ないのであります。

一、第二編は「親様を慕ひて」と題しまして、愈々初代會長の入信に筆を起しまして、御教祖の御臨終に至るまでの、兵神の道の動きを叙しましたもので、それは既に原稿が出来て居りました、何日でも印刷が出来る様になつて居ります。多分年内又は昭和八年一月の大祭を期して刊行しようと思つて居ります。第三編以下も殆んどその調査は完了致して居りますから、日ならず皆様の御覽に供し得ると存じます。

一、本編の表紙の題字は飯降政其先生の御麗筆を御願ひしましたもの、又巻頭の寫眞は、岩崎仙太郎氏の御盡力に成つたものである事をも、一言申し添へて置きます。

一、尙終に望みまして、本史編纂に當り、皆様の多大の御指導と御援助に預りました事を篤く茲に御禮申して置きます。別けても終始御寛容の御態度を以て、御秘藏の史料の一切を御提示下され御指導下されました現大教會長様同奥様、困難なる編史の本業の端緒を御開き下され、強き信任を以て御依頼下されながら、不幸南洋パラオ島にて傳道途上客死せられました大教會長御令嗣、清水芳雄様、幾度か挫折せんとする編者を鞭撻なし下されて、その古き數十年に渡る御道の尊き經驗を以て、常に誘掖指導をなし下された現大教會役員、藤原吉次郎殿、その日本全國に亘る當大教會及飾東中教會の史實を親しく出張記述せられた美濃大判約

三千頁に亘る史料を、全部編者の自由に提供なし下された教友、阪倉喜三郎君、以上五公の多大なる御盡力に對して滿腔の感謝を表して止まないのであります。それと共に尙此上の諸公の御指導と御援助とを望んで止まいのであります。

昭和七年九月廿六日御本部教祖殿御上棟式舉行の日、御地場にて

白藤義治郎

天理教兵神大教會史 第一編

兵神の芽ぶく頃 目次

巻頭寫眞

神戸舊園、端田久吉氏肖像、立花善吉氏肖像、唄小富士女肖像、端田方御赤衣の箱、赤松方御赤衣の箱、端田方講社連名記入の唐櫃、端田方大水玉、端田方最初の講社規則、兵庫眞明組第二番の文字記入の文書、端田講元の舊宅の現状

凡 序 例

第一章	初期兵庫眞明組の生滅……………	(一)
第一節	大阪安治川畔……………	(一)
第二節	大阪、立花善吉氏の入信……………	(三)
第三節	兵庫、魚田やす女兒眼病の靈救……………	(七)

第二章 天輪王眞明講社の興起

第四節 上田藤吉氏の入信……………(三)

第五節 初期兵庫眞明組の結成……………(一六)

第六節 異教徒の論難……………(一九)

第七節 御地場への初参詣……………(二六)

第八節 初期兵庫眞明組の潰滅……………(三四)

第一節 唄小富士女の入信……………(四一)

一 道は感激から……………(四二)

二 唄小富士女眼病の靈救……………(四三)

三 おびやゆるしの奇蹟……………(四九)

第二節 唄氏に導かれたる人々……………(五六)

第三節 眞明及神明二講社の結成……………(八一)

一 結講の動機……………(八一)

二 結講の波瀾……………(八五)

三 正閨二講の結成……………(八七)

第四節 正閨兩講の消長その一……………(九一)

一 神明派の赤松講元の奮闘……………(九一)

一 本田せい女の入信……………(一〇五)

二 爾餘の和田崎町の人々……………(一〇六)

三 端田久吉氏の入信……………(一〇七)

四 赤松平四郎氏の入信……………(一〇七)

五 富田傳次郎氏の入信……………(一〇七)

六 明石郡山田眞明組の濫觴……………(一〇七)

一 眞明派の活動……………(一五)
 第五節 正閨兩講の消長その二……………(一九)
 一 神明派赤松講元の失脚……………(一九)
 二 端田方眞明講社の活躍……………(二〇)
 第六節 正閨兩講の刷新……………(二〇)
 一 端田方眞明講社の大刷新……………(二〇)
 二 神明派の追隨刷新……………(二八)
 第三章 兵庫眞明組第二番への伸張……………(三三)
 第一節 伸張の基を築きし人々……………(三三)
 一 其後の本田せい女……………(三三)
 二 其後の講元端田久吉氏……………(三三)

三 その餘の人々……………(三八)
 第二節 花隈、宇治野組講社の入信……………(四〇)
 一 中井のぶ女の入信……………(四一)
 二 松田くに女の入信……………(四七)
 三 磯村卯之助氏の入信……………(四七)
 四 岩崎新兵衛氏の入信……………(四五)
 五 其餘の重なる人々……………(四九)
 第三節 地方講社の其後の興起……………(四九)
 一 三木系山田眞明講社の濫觴……………(五〇)
 二 三木系喜多村眞明講社の濫觴……………(五四)
 三 鳴尾眞明講社の再興……………(五二)
 四 明石眞明講社の濫觴……………(五四)

	五	下村眞明講社の濫觴……………	(一九)
第四節		兵庫眞明組第一番と改稱……………	(一〇三)
	一	阪倉方神明講社第二組の合流……………	(一〇三)
	二	兵庫眞明組第二番と改稱……………	(一〇五)
	三	大日本天輪教會創立運動の波及……………	(一〇六)
	四	佐比江町講社寄所の設置……………	(一一四)
第五節		改稱後の新發展……………	(一一七)
	一	蛸草眞明講社の濫觴……………	(一一七)
	二	飾磨眞明講社の濫觴……………	(一二〇)
	三	小部眞明講社の再興……………	(一二七)
	四	當時地方講社の大勢……………	(一五八)
	五	大日本天輪教會創立運動の挫折と其後の兵庫眞明組第一番……………	(一五〇)

兵庫眞明組第一番と改稱

いかほどにみえたることをいふたとて
もとをしらねばわかるめはなし (御筆先第四號)

いかほどにはなしをといてきかしても
もとをしらしてをかんことには
もとさいがしいかりいふてをいたなら
なにをいふてもみなきゝわかる (御筆先第十號)

天理教兵神大教會史

第一章 初期兵庫眞明組の生滅

第一節 大阪安治川畔

大阪の西區と此花區をつなぐ船津橋の西側橋上に立つて、下に流る、大安治川を見る。右岸は新設の大阪中央卸賣市場の大規模の建物を初として、安治川通乃至下福島等の各街々の葺果てを知らず。左岸は大阪川口税關の高層洋館を始めとして、富島、本田、九條の街々眼も遙かである。その中を流る、安治川の此處川口と呼ばれるところ、大小幾多の船舶の來往續るが如く、荷船を曳航する發動機船、小蒸汽船の横付、荷揚げ荷積みの船車の軋み、人の呼ばふ聲、

又背後橋上を小止む間もなく通り過ぐる荷車や自動車、電車などの騒音と共に、將に耳を聳するばかりである。誠に大大阪の百貨の集散場として、壯大なる偉觀を呈してゐる。然もこの大阪川口の安治川畔こそ、實に我が天理教兵神大教會を産み出す父の働きを爲したのである。

顧みればその右岸には、明治初年以來同九年に至る間、入信前の兵神初代會長清水與之助大人が、その壯年時代を、今も尙見る此處貨物の集散に伴ふ力役の巷に、或は仲仕として、或は船夫として、或は外人のコックとして、どん底生活を爲された處で、當時下福島邑二百三十番屋敷が其頃の大人の居住地であつた。また後大人の夫人となられたおはる殿も所謂新堀の大又樓事、現安治川上通一丁目二百廿六番地の先代山田伊兵衛氏方に、元治慶應の頃から明治十二年迄久しく居住して居られたのであつた。

その又左岸に就て、回顧すれば、富島町より國津橋を渡つた現本田通の電車道の左方最初の横町が、初めて兵神に道を傳へた大坂眞明組の講員立花善吉氏の、其頃居住してゐた鍋屋組であり、その横町に入らず、電車路に面して左方數軒目の現、牧商會と稱する油問屋が、元の大坂

眞明組講元井筒梅次郎氏の宅のあつた處、その濱側に今は取拂はれて無いが、由緒深き同眞明組の講社寄所があつたのである。更にその左三軒目が當時の同講脇中川文吉氏の居室で、今も尙舊形の儘に残されてある。

かく川口の安治川畔は我が兵神を生むの深き機縁を孕んで明治十年代を迎へたが、大和の御地場に發した本教は、此頃より信貴、生駒の連山を越えて、麓の河内地方に傳播の渦を巻き、更に西進して大阪地方に第二の傳播の渦を卷いた。その激潮の靈氣が、こゝ川口九條の雜踏の中から、一躍海路兵庫の港、今出在家町へと道附け、茲に兵神の初期兵庫眞明組の興起となるのである。

第二節 大阪、立花善吉氏の入信

大阪が明治八年その町制より區制を布いて程遠からぬ同十三年の頃、この安治川、川口の南岸は、一體に九條村と稱して、現在の本田通三丁目邊は、現電車路に添ふて細長い只一筋の本

田通があつたのみで、その裏は河口の天保山までも見晴らす様な田圃であつた。それが又桶を履かねば腰までも入るといふ老田もあつたといふ、眞に今から思へば隔世の感ある頃、現鍋屋組の筋は、中央に用水溝が掘り割られてあつたので、家並の前の通は誠に細い畔道であつた。その又鍋屋組の更に横町といふのであるから、その状況は想像も附かうが、そこに立花善吉といふ青年(當時二十四歳、安政四年八月二十日生れ、但し戸籍面では安政五年となつてゐる。)の一家が住んで居た。

父は清兵衛と云ひ、兄を宗吉と云つて、元播州明石の人で、善吉氏の幼少の頃一家を擧げて此處に移住して來たのであつた。何がさて貧しい世帯であるので、善吉氏は數年前から對岸の新堀遊廓前の土堤へ上畑賣りに出たり、又箆を擔ふて魚賣りに出たりなどして、家計を助けて居た。

然るにその頃善吉氏の父清兵衛氏は、毎年舊三月になると疝氣が起つて腰が痛む。殊に同年は特に嚴しくて足腰が立たなくなり、後には身動きさへも出来なくなつた。それに加へて善吉氏までが膿底醫で漸次視力を失ひ、遂には何も見えぬやうにさへなつてゆくので、只さへ貧し

い一家は、暗い運命に泣くにも泣けぬ有様であつた。

時に同じ鍋屋組に小野市兵衛といふ夜鳴きうどん屋があつた。彼も亦疝癩で毎年苦しんでゐたのが、其頃表の本田通三丁目の井筒梅次郎氏方で、どんな難病でも助けて下さる天理王命様といふ珍らしい神様がお祭りしてあると聞き、一日お助けを願ひ出た處、即座に治つたといふ驚異すべき靈驗を、同氏から立花一家に匂ひがけた、それが同十三年の三月であつた。

その有りがたいお話に、善吉氏も亦同月十五日から井筒氏宅にお参りして、お助けを受ける身となつたが、その不思議なお助けに訝りなく、僅か三日三夜のお願で、氏の眼病は忽ち膿漏は止まり、次第に輕快になるので、更に助けぬ父清兵衛氏をも肩にかけて、井筒氏宅にお助けを乞ひに出かけた。然るに父親の頑固な疝氣も亦三日と經たぬ中に腰が立ち、善吉氏の眼も次第に快くなつて、約一ヶ月後には判然と物を見得るやうにお蔭を受けたのであつた。

父子の喜びは此の上もなかつた。そこで其年の秋、善吉氏は初めて御禮のために御地場に参詣した。其後も屢々御地場に参詣して、その度毎に更に御教祖の偉大なる人格の御靈徳に感激

したのであつた。その一例として次の話を掲げて置かう。

或日氏は其頃の誰でもが爲さねばならぬ様に、徒歩で大阪から御地場へ歸つて行つた。かくて十里の山あり坂ある野路を大方に、其の日の晝さがりに、漸やくにして山邊郡二階堂村まで達した。そこでもう一寸抱だと思ふと自づと元氣が出て、歩きながら得意の淨瑠璃の一節を、如何にも得心のゆくやうに上手に歌つたが、暫くにしてそれも止めて、やがて幾何もなくお屋敷へ到着した。

すると御教祖がお出ましになつて、氏の姿を見るなり、

「善吉さん、良い聲やつたな。お前さんが歸つて来るので、ちやんとお茶が湧かしてあるで。」と仰しやつた。その言葉を聞いて暫し善吉氏は、肌えに粟する驚異と、有がたい嬉しい感激に言葉も出ないのであつた。氏が淨瑠璃を歌つたのは一里も手前の二階堂村で、聞える由もないのに、御教祖様はどうして御承知であつたのか。さうしてお茶まで湧かして氏の歸り来るをお待ち下さつてゐたとはと、その時處を絶した神人の靈能に思ひ至つたが爲であつた。

氏はその後同じ鍋屋組に一家を借りうけ、父兄から獨立して魚賣をしたり、又小形の猪牙船を求め、それに壽司や駄菓子や蜜柑類を積み込んで、川口九條のあたりから下流の天保山邊まで、出入する船から船へと安治川を上下して行商したりして居たが、難病な人を見ると、商賣を放つて置いてまで、匂ひがけにお助けに奔走したのであつた。

それは氏のならん處を助けて頂いた喜びと、御教祖の偉大なる御人格への感激から、止むに止まれぬ氏の至誠の發露で、その何日であつたか、御教祖様も亦氏に向つて、

「おまはんは世界の事は何にも知るのやないで。おたすけ一條に勤めるのやで。」とお諭しの言葉を下されて、お勵まし下されたといふ。

第三節 兵庫、魚田やす女兒眼病の靈救

往古神功皇后の三韓を征し給ひ、その御凱旋後、この武庫の地に廣田、生田、長田の三神社を創設し給ひしに端を發して、古代大陸との交通、文化の輸入の要津たりしより、中古平清盛

此の處を永く王城の地たらしめんとして、大いに港泊の修築をなし、福原京を企畫し、畏くも半歳の間帝都たりし神戸は、其後源平の攻争、南北朝の争覇に又昔日の面影はなかつたが、幕末王政維新の大機運動くや、幾多の大波瀾を経て遂に慶應三年十二月七日、近代日本の最初の開國五市場として復活した。爾來六十有年、未曾有の大澎張發展をなして、今や我國第四の大都會となり、人口は八十萬を越え、東洋無双の要港、世界の大神戸となつたのであつた。

さりながら明治十二年兵庫神戸の兩町を合して神戸區と稱し、今日の神戸市の基を爲した時分には、人口も尙八萬を出でず、その地域も甚だ狭少であつた。當時何人か果して今日の大神戸を豫見し得たであらうか。(見返しの神戸舊圖参照)

然しながら、明治十年西南事變後の神戸の第一次發展には、既に今日あるを豫想せしむるものがあつたのである。一切智者にて坐はず神様には、總てを御了知であらせられてか、次の如き事情の許に、當時洋々たる未來を持つ神戸に於て、早くも本教の太い芽が用意されたのであつた。

明治七年に着手せられた兵庫新川の開鑿が同九年に竣成して間もない明治十四年頃、同新川の西岸、今出在家町といふ漁士町に魚田やすといふ婦人があつた。彼女は元遊女であつたとかで、仲々の粹者であつたといふ。素人女髪結を爲しながら、遊野郎の引き子をしたりして、まだ十分に泥水から足が抜け切らないで居た。その何人目とかいふ内縁の夫某漁夫との間に、今年三歳になるおすゑと呼ぶ女の子があつた。さうした彼女の濁つた生活の應報であらうか。その愛する女兒おすゑは、その前年頃から底翳に罹り、色々と醫療や加持祈禱に手を盡したが、悪くなる一方で、今年梅の花咲く頃から桃や櫻の花盛りへと、百花燎亂の春に向ふのに、哀れや殆んど失明して居た。どんなに淪落の底を通つたとて、子を持つ親の心に變りはない。やがて女夫妻の歎きは何に譬へ様もなかつた。

時に其頃前節に述べた大阪九條村の本田通鍋屋組に大西嘉助といふ人が住んで居た。彼は當時ユオンと稱するツケ木製造を業としてゐたが、前記の魚田やす女とは親戚であつた。

そこで兼々やす女が我子の底翳を治し得ずして、困惑してゐる事を聞き知つて居たので、常

に何とか助かる術もないものかと、片心に掛けて居た。

然るに前節述べた様に同鍋屋組に於て、相續いて難病者が、天理王と稱する神様に不思議に助けられてゆく。殊に日頃からよく知り合つて居る前記立花父子の珍らしい靈救、並に其後の善吉氏の熱心なる信仰振りに、心から感心して居た大西氏は、今や魚田やす女の女兒の眼病が始んど絶望と聞いて、一度天理王命に願ふて助けて貰ふてはと、仔細を書き記して兵庫今出在家町の同やす女の許に申し送つたのであつた。

右の勧めに接した魚田やす女は、誠盲龜に浮木の譬の如く、早速おするゑを連れて、其頃神戸と大阪をつなぐハヤ船に乗つて、海路大阪鍋屋組大西嘉助氏方に訪ねて來たのであつた。そこで大西氏は右母子を連れて、同組の立花善吉氏を訪づれ、該子供の底醫を助けて貰いたいと頼み込んだのであつた。時に同年舊三月上旬の某日であつた。

そこで立花氏は

「私等親子の病氣が、こんなに助かつたのやから、この娘さんの眼病やとて、助からん事はな

い。

と慰めて、色々と自分の信心するに至つた話をして、神様にお願ひ下さつた。

然しどうした事か、三日三夜のお願を二度重ねたが、依然としてお蔭が見えなかつた。そこで折角の想ひで出掛けてきたやす女も、案外の思ひで一週間目に諦めて立花方を辭し歸らむものをと、國津橋を渡りかけて居た。

時に午後下がりの太陽は、堂々と安治川の水面を反映して居た。

「お母ちゃん、あれは！」

指さし尋ねる盲兒おする女の眼には、赤々とその反映が見え初めたのであつた。

母親やす女の喜びは此上もなかつた。再び立花氏方へと引き返して、不思議な御利益を受けてゐる事を物語り、尙此上のお助けを願つた。又夫の許へも此旨申送つたのであつた。

翌日その夫なる人も訪ね來り、共にその子の御利益の顯著なるに驚喜して、一泊後兵庫へ歸つて行つたが、母子は更に一週間滞在して十三日目には全く快癒して、その廣大なる神恩に感

泣しつゝ、兵庫今出在家町の自宅へと歸つて行つたのであつた。

根が漁士町の線の荒い粹と俠とに出来てゐた彼女は、歸宅後その赤裸々なる感謝のほとばしりから、それからそれへと「天理王命は大した神様や。」と吹聴して歩いた。それが何よりの大きな匂ひがけとなつて、日頃この母子をよく知悉してゐる今出在家町一帯の人々は、俄に「天理王命は偉いあらたかな神様である。」と、大いにその神名を風聞する様になつた。これぞ我が兵神の生れ出づる孤々の聲であつたのである。

かくてはからずも大阪九條の陋港鍋屋組から、一路海を渡つて神戸區兵庫今出在家町の同じいぶせき漁士町へと、正に神様の仰せの如く、道は谷底から……やがて四海に溢れ出づる大きい道——兵神の道の種子は、初めて下されたのであつた。

第四節 上田藤吉氏の入信

立花善吉氏の兵庫出張布教

かく天理王命の風聞が今出在家町一帯に喧傳されて居た頃、同町に上田藤吉といふ人があつた。質屋をして居て、生活に不如意は無かつたが、今年十八歳になる長女のまつが、八年前からきついリョウマチで起つ事の出来ない躰となつて居た。不具の子程親は可愛い。殊に今娘盛り器量盛りなるに於て、親の心として見るに忍びなかつた。

かゝる處に魚田やす女の女兒の盲目が不思議に助けられたのを目のあたり見たので、藤吉氏の胸は高鳴つた。「盲目が助けられるなら、我娘の躰の助けられぬ筈もなからう。」と、早速やす女に教へられて、ハヤ船を驅つて大阪西區本田通三丁目鍋屋組に立花善吉氏を訪ねて行つたのであつた。

かくて段々と結構なる神様の御話を聞くにつけ、上田氏は、

「それでは是非兵庫へ出張して、自分の娘まつを助けて頂きたい。」と懇々依頼して歸つたのであつた。

かゝる事情の許に、同年舊三月下旬頃、立花善吉氏は初めて兵庫に出張し、上田方に滞在して布教する事となつたが、それが又下されたる兵神の種子に一大飛躍を與へたのであつた。立花氏の兵庫出張は、彼の盲兒を助けられたやす女の匂掛けによりて、今出在家町一帯の難病者に恰も救世主の如くにもてはやされた。それが又不思議にも多くの難病者を救うて行つたのであつた。今その二三を次に記して見る。

同町の某は背中に大きな悪性の瘍が出て困難して居たが、立花氏のお助けで一夜の間潰れて行つた。又同町の某沖仲仕は船から荷を降ろしてゐて、どうした間違ひか、石と石との間に、片方の足をさまれ、肉は破れ骨は砕かれ血にまみれて倒れてしまつた。急を聞いた立花氏は早速駆けつけて、砕かれた足全體にお息の紙を貼つて一生懸命に平癒を祈つた處、その怪我人はそれから戸板に乗せられて自宅に送られながらも、少しも苦痛を訴へなかつた。其の晩その大傷にも拘らず風呂に入つたが、不思議にも貼られたお息の紙がめくれず、一夜の間に御守護を頂いて、早くも翌日から歩けたと云ふ奇蹟。時に同町に俠客某があつた。どういふ事情から

か詳でないが、足が反つてしまつて自由がきかないのであつたが、立花氏の素晴らしい風聞を聞いて、

「わしのこの足を助けてくれるなら、神戸から大阪まで白木綿を布きつめて見せる。」と言ふて居た。然しさうした大形な云ひ方をする心に高慢が強かつたか、此の人は遂に助からなかつたと云ふ。

彼様に数々の靈救のあつた中に、同町で角力の取締をして居た三好茂八氏の妻かね女(當年四)も亦不思議なお助けを蒙つた一人であつたが、この婦人殊の外熱心眞實の人で、大いに立花氏のために匂掛けをするのみならず、尙夫茂八氏に勸めて、「立花氏に是非自分方に滞在して布教してくれ。」と頼むのであつた。然し元々上田氏の懇請によつて同家に出張して来たものであるから、爾來上田方と三好方と交互に一泊して布教する事となり、其間大阪へ歸る事もあつたが、又直に來つて、同年四五月頃に至るまで、専念兵庫出張布教に従事したのであつた。そのために僅かの間ではあつたが、難病者の十七八人もお助けしたのであつた。

かくて兵庫今出在家町に於ける氏の布教は、相當のゆるぎなき効果を收めたが、その出張當初の動機をなした上田藤吉氏の娘まつ女の躰は、神意の故か、はたあまりの難病であるの故かはかくしくお助けが頂けなかつた。

第五節 初期兵庫眞明組の結成

魚田やす女がその女兒を助けられて、兵庫今出在家町に初めて本教の存在を傳へ、續いて上田藤吉氏の入信となつて、立花善吉氏の兵庫出張となつた頃は、まだ大阪に於ても眞明講社は組まれてゐなかつた。

然しその後だん／＼と大阪本田通に於ても、多数の入信者を見る様になつたので、明治十四年四月十七日井筒梅次郎氏始め、同信者多数打ち揃つて御地場に參詣し、井筒梅次郎氏を講元とし、中川文吉氏を講脇として、初めて大阪眞明組なる講名を頂かれた。

この講社結成の事實は、只々助け一條のために兵庫に出張、布教せられて居た立花善吉氏の

心を刺戟する處尠くはなかつたらしい。そこで上記の如く兵庫布教も稍効果を收めて來たので、立花氏は兵庫にも亦眞明講の名に於て講を結ぼうと決心して、先づ此旨上田藤吉氏に談示されたのであつた。

然るに上田藤吉氏は、講を結ぶに異論はないが、その當初の目的である我娘の躰が、まだ依然として十分のお助けを享けてないのが、物足りなかつた。そこで、

「娘はまだ十分のお助けを享けてゐません。なれども結構なる神様の事故、講社を結ぶ事には賛成致します。然しながら私としては一日も早く娘の助けて頂きたいのが、胸一ぱいでありますから、どうか當分の間、大阪に預つて頂きたい。」

と、娘の助けて頂く事を先決として申し出たのであつた。

これに對して貧しい茅屋住居の立花氏には、井筒講元に相談旁々大阪に歸つたのであるが、協議の結果その申出も尤もであるといふので、遂に上田氏の娘を預る事とし、立花氏の宅や、大西嘉助氏の宅や、又は井筒講元宅に居らしめる事にして預り歸つた。

然るに其後娘の躰は、日々に御利益を頂いて、まつ女の喜び一方でない。此由兵庫の上田方へ報知に及んだ處、上田氏も亦大層喜んで大阪に來り、その時初めて立花氏の紹介で、講元井筒梅次郎氏に面會せしめたのであつた。

其席上、上田氏は喜びにあまりて、講社結成に盡力する事を誓ひ、尙井筒講元にも講社結成上又お助け一條の上から、是非兵庫に出張せられむ事を依頼したのであつた。

斯様にして上田藤吉氏が講社結成上の臺となる事を快く承諾する事によりて、同年舊六月上旬の某日その理を定めんとして、井筒講元、立花善吉兩氏を始め、その他講員六七名が、講脇中川文吉氏の持船三十石船に乗込み、大阪眞明組の旗を押立て提灯を掲げて賑々しく兵庫今出在家町の濱に到着したのであつた。

そこで上田氏は間狭であるので、同町の通稱槍屋(本姓)といふ宅に一同落ちつき、講社結成の議をはかり、大阪眞明組に屬する支講を兵庫にも組み、上田藤吉氏を講元とする事に議決して、その實證として上田方に神様を奉遷し、かくて茲に初めて初期兵庫眞明組が結成されたのであつた。

であつた。

それでその結成を機會として、暫時大阪井筒講元以下、大阪講員滞在して、協力一致して日々お助けに奔走されたので、新生の兵庫眞明組にも講社加入者追々に層加し、その生ひ立ちの見込みもついたので、愈々その後事を新上田講元に托して、一同は一先づ大阪に引き返されたのであつた。

第六節 異教徒の論難

今出在家町に直ぐに引續いてその南に、和田崎町といふ同じ濱添ひの漁士町がある。その又南は往昔、

「夕づく日、輪田の御崎をこぐ船の、片帆にひくや武庫の浦風」(平清盛)

「夕波の大輪田めぐる時雨かな」(句の一)

などと、幾多歌人の吟詠に入つた畿内無双の名勝、輪田の御崎であつた。

明治三十四年此處に三菱造船所の開設せらるゝまでは、この和田の御崎に入らんとする町はづれに、和田宮と稱して天御中主命を奉祀し、海上鎮護の神として漁人の信仰淺からざる神社があつた。(現在は和田宮に遷移す)

又其頃「大神宮さん」と俗稱されて、ある意味に於て此の地方の本教の先驅をなした、天照皇大神を奉教主神とした黒住教が、當時新興の民間信仰として兵庫神戸間に於ても、尤も勢力があり、その教會が兵庫永澤町其他市内各所に建てられてあるもの、二三に止まらなかつた。然るに突如兵庫の一角、今出在家町に侵入し來つた本教の、水際だつた靈教と、その十二下りお勤めと稱する、何人にもわかり易き豐醇なる宗教的眞理を包藏した新らしき信仰形式は、彼等に強き驚きと關心を與へずには置かなかつた。

其頃講元上田藤吉氏の向ひ宅に、三好萬吉といふ按摩があつた。十八年前からの盲目ではあつたが、その何者をも助けずに置かない本教と、上田方とは向ひ合せであるといふ處から、早くから立花善吉氏の御世話になり、其頃はお蔭で眼の隅の方だけ見えるといふ大利益を頂いて

居た。

講社結成後の間のない舊六月下旬頃の或日であつた。立花氏が引續いて、その萬吉方へお助けに運んで居た際、突然和田宮の神主と、大神宮(黒住教)の教會主と、同教會の信者の三人が出向いて來て、立花氏に質問に及んで來たのであつた。

時に立花氏は堺安龍町の種市といふ、最初大阪講元井筒氏に匂ひがけしたといふ人を伴ふて來て居たが、彼種市氏は和田宮の神主等の凄まじい質問者の氣魄に、早くも恐れをなして何時の間にか其席から遁け出して居た。

その他は上田講元を始め、めづらしい御利益を蒙つた信者は數あつたとて、異教間の論戰としては、物の役に立つもの、無いのは勿論である。

そこで立花氏一人彼等の矢面に立つて質問に應じたが、立花氏とて異教徒との問答など曾て爲したる經驗なく、只有難い一念から助一條に勤めて居たので、論辯の用意なぞあらう筈がない。

さういふ譯であるので、彼等が步調を合して奇襲して來る數々の質問に對しては、立花氏には始んど何一つ返答が出来なかつた。それがために立花氏は、今までの先生の威嚴もどこへやら散々に悪口づかれて、その座に居たたまらん様にさへなつたのであつた。そこで小用にかこづけて、密かに裏口から氏も亦抜けて出て、ハヤ船で大阪へ逃げ歸つたのであつた。

然しながらそれは我ながらに、餘りにも不覺であつた。かくの如き様子では、折角の數月の苦心も、根底から覆がへされはしないかと思はれるのであつた。それが又残念至極で、神様に對しても何とも申譯なき次第と、思はれてならないのであつた。その想ひが自づと氏の風貌に現はれて、憂色に満ちて居た。それを見た井筒講元は、

「今日は立花はん、ゑらう顔色が悪いな。」

と尋ねられたが、あまりの不覺に話されもせず。

「とにかくお地場へ歸つて來ますは。」

と、答へたのみで、すぐにお地場へと歸つて行つたのであつた。

「立花はん、昨日は兵庫で工合わるかつたな。」

いきなり立ち迎へられた仲田佐衛門先生から云はれて、立花氏は度膽を抜かれてしまつた。

「エッ誰がそんな事を云ひましたか。」

と、どぎまぎしながらお尋ねすると、

「今朝親さんが云はしやつたがな。」

とお答へ下されて、すぐ御教祖様にお取次ぎ下さつた。

そこで立花氏は御教祖に、逐一兵庫にありし事情を申上げた處、御教祖様は、

「立花はん、こん度は手帖に控へて去ぬのやない。心に控へてゆきなはれ。」

と仰せ下さつて、御親ら懇ろに質問の角目くをお教へ下された。そこで立花氏は御教祖のお言葉どほり、その角目々々をよく心に止めて大阪に歸り、それより直に兵庫に出向いて行つたのであつた。

然るに兵庫に來てみれば、さきの日の杞憂は、事實としてあらはれて居た。即ち、

「天理王命は論判に負けた。駄目だ。」

といふ風評が立つて、單純な濱の住民共は、大々的に反對に立ち、講社といふも名計りで、殆んど叩きつぶされ、只僅に上田藤吉氏と三好茂八氏の妻かね女の二人のみが、變らぬ信仰を保持して居て呉れたに過ぎなかつた。

そこで立花氏は再びその信仰の復活をはからうとして、まづお講勤めを次々と進めてゆかむものをと、丁度彼の事件のあつた一週間目に、再び彼の按摩の萬吉氏宅で、その御講勤めを始めたのであつた。然るに其事を何處から聞いてきたものか、前質問者の一人和田宮の神主が、又やつてきて、

「どうもあんたは失禮やないか。前に質問に應じられず、逃げて歸つたあんたが、どうして又天理王命のお勤なぞをするのか。」

と、又も鄂々の辯を振つて詰問して來たのであつた。

然しながら此度は、立花氏は少しもたぢろがなかつた。わざと白ばくれて、

「そんな事がありましたかな。もう一へん言ふて見て下され。」

と、彼の質問を繰返へさうとした。彼は前回處女の如き無力の立花氏に、今龍攘の撃力あるを知らない。稍憤懣に堪えぬといふ態度を示しつゝも、得意になつて前回の質問を繰返しかけたのであつた。立花氏の策戦は甘く圖に當つたのであつた。氏は、

「そんな事位何でもない、それはかういふ事やで。」

と先日御教祖に教へて頂いた通り、前回とは打つて變つて、すらくと明答を與へて行つた。

かくて一間は一間と見事に釋明されてゆく。其度毎に神主は、その豹變したる立花氏の叡智振りに、すつかり感服してしまつて、遂に、

「神主自ら天理王命を敬拜し、信者の世話をする。」

と兜を脱ぎ、論戦は立花氏の見事なる勝利に歸したのであつた。而も不思議な事には、御教祖の御教へ下さつた以外に、彼は何事も質問して來なかつたといふ。これ遍へに立花氏の純一なる信仰の賜物であつたのである。

熱血性の濱の住民は、この見事なる立花氏の勝利に、再びその信仰の熱を、反動的に高めてきた。別けても彼の篤信なる三好かね女の夫である角力の取締三好茂八氏は、最大の熱心家となつて布教傳道に助力して呉れたので、講社は益々多大に増加し來り、此處兵庫今出在家町地方は、見るもの聞くもの、
「天理王命は、ありがたい神様である。」との風説を以て、満たされた。

第七節 御地場への初參詣

上田家内紛の暴露

前節に述べたる如く、和田宮の神主等の論難、それは誠に小さい事件であつた。さりながら二葉の芽生えにも等しい當時の兵庫眞明組に於ては、相當に恐ろしい外難であつた。然し立花氏の措置宜しきを得て、反つて好結果を得て、今や今出在家町を本據とする兵庫眞明組は、麗

らかなる春光に伸びてゆく若苗の如き暢達さがあつた。

然しながらまだ誰一人として、根元である大和のお地場を知る者が無かつた。そこで彼等は寄々協議して、お地場への初參詣の目論んで居た。かくて同年舊七月の十四日、十數人の講員達がハヤ船で、まづ大阪へと旅立つた。

今その人達を數へ擧げて見ると、上田講元夫妻とその妹娘、三好茂八氏夫妻、三好熊吉氏夫妻、三好萬吉氏、魚田やす女母子、槍尾の母子等、其他大勢で、其大部分は、今出在家町の人々であつたが、中に一人唄こふじといふ婦人のみが、和田崎町の住人であつた。

彼女は三好熊吉氏の妻おひさ女の従姉妹である所から、同女に誘はれて、同行したものであつたが、計らずも此の唄こふじ女から、後兵神の道は一大飛躍をなすのであるが、次章に詳述する機会があるので、以下暫らくその記述は差控へて置く。

かくて兵庫眞明組の講員一同が、出發するに當つて、講元上田藤吉氏は、兵庫講社の目當として、御教祖の御赤衣を頂かんがため、その御更着料として、赤い唐地の反物一反を、求めて

のく事を忘れなかつた。

やがて大阪に到着したる一同は、立花善吉氏や井筒大隈講元諸氏の、多大の御世話になりつゝ、其夜は前々から關係ある鍋屋組の大西嘉助氏宅に一泊した。

明くれば舊七月の十五日、此日更に大阪講元井筒梅次郎氏始め、同講員多數も參加して、同勢實に數拾人、早朝から御地場へと出立した。其時尙、井筒氏方等に御世話になつてゐた上田藤吉氏の姉嬢まつ女も、亦同行の人となつたのであつた。

一行は婦女子等足弱を車に乗せて、天王寺から大阪を離れ、國分を経て龍田に出で、二階堂を通つて御地場へ歸つて行つた。其途中どうしたはずみか、上田藤吉氏の娘まつ女の乗つてゐた車が引つくり返つた。まつ女は幸に怪我は無かつたが、その拍子に持つて居た赤衣の更着料の反物が、龍田の川の中へ落ち込んだ。早速拾ひ上げて、別に汚れもしてゐなかつたが、理は恐ろしいもので、同反物は上田氏が幾分でも入費を越くしうとして、やんつ(高引した様な不正)したものを安く買つてきたものであつたといふ。

それはともかくとして、御教祖には眞明組の大勢の參詣を、殊の外お悦び下されて、兵庫の講社には思惑通りの御赤衣を御下け賜はり、上田講元以下講員一同満悦したのであつた。

それより一行は中四日御地場に滞在して、その間次の如き出來事の數々に會はせて頂いたのであつた。

まづ其翌舊七月十六日には、御地場の東方布留川の上流瀧本から、神命によつて甘露臺の石材が、引き出された事であつた。それは前々から打合せてあつたものか、その石を山の麓まで取出すのを、眞明組の講元井筒梅次郎氏に御命じになり、立花善吉氏の兄宗吉氏が、その棟領となつて盡力したと云はれて居る。又その石材を麓からお屋敷迄取運ぶのを、明心組の講元梅谷四郎兵衛氏に御命じになつたといふ事である。

やがて其石材は九ツの車に乗せられて引き出されて來た。兵庫眞明組の婦人達も亦、元布留の兵神詰所のあつた邊迄行つて、共に引かせて貰ふた。その石は御屋敷の門迄來て、容易に動かなかつたが、御教祖が御居間から御出坐しになつて、「ヨイシヨ」と御聲をかけて下さると共

に、一遍に押しつけてツウと入ってしまったといふ。その勇ましい有様を御覧になつてゐる御教祖を、一同は初めて拜まして貰つたのであつた。

其夜御屋敷に於て、本勤めがあつた。それも亦一同は有難く拜觀さして頂いたが、その時お地場の先生方から、

「あんた方は仕合せな人や。二十年も前から信心してゐる人でも、本勤めに會ふのは、これが初めやで。」

と祝福して下さつたといふ。

斯の如き有りがたき数々に接し、兵庫の講員は満足此上も無かつたが、別けても半ばお蔭を頂いて居た薄幸の若き上田藤吉氏の姉妹まつ女には、殊の外嬉しさに胸は高鳴るのであつた。其の明るる日であつた。まつ女は同行の人達と共に甘露臺にぬかつて、温い親神様の御救ひを篤く心に念じつゝ、朝の祈をさへけて居た。時にふと我が身體の自由への嬉しい幻想が浮んできて、まだ治ほり切らぬ曲がつた不自由な身體を、甘露臺の前なる勤場所の柱に覺り寄つた。

さうして持つて居た新しい晒木綿をその柱に結びつけて、自らその晒木綿にすがつて、

「南無天理王命様、たすけたまへ。」

と念じつゝ、自分の足腰を伸ばして見た。處が不思議な事には、その曲がつた足腰が、何の障礙もなしにすらくと伸びて行つた。娘は夢ではないかと打ち喜んだ。

然るにもう一寸伸びたら、完全に伸びて、足が下の地に着くと思ほしき時、これは又意外、我子の此の不思議なお助けを前に見て、甘露臺の前で上田藤吉氏夫妻は、俄に夫婦喧嘩をおつ始めたのであつた。するとその娘は、

痛い〜。」

と云つたかと思ふと、その一瞬に今迄伸びてゐた足腰は、再び縮まつて、元の覺りに立ち返つてしまつたのであつた。

この奇蹟を見た一同はゾーツとする様なあやしい驚きを感じて、深く各自の信心への自省を爲さしめられたのであるが、下可解なのは、この我娘の靈救を前にして、俄に上田夫妻が夫婦

喧嘩を始めた事であつた。然しそれには次のやうな事情があつたのである。

元來上田藤吉氏には、二人の娘があつた。姉をおまつと云ひ、妹をおとよといふた。然るにその妹娘おとよの生れて間もなく、その母親即上田氏の先妻は死んで行つたのであつた。そこで現在ののおきと呼ぶ後妻を貰つたのであるが、おきには子が出来なかつたが、生後間もない妹娘を、手鹽に掛けて育て上げたので、おとよは實子同然此上なく可愛かつた。然るに不幸な姉娘おまつは、ふとしたかりそめの病から、生れもつかぬ躰となり、八年この方癩疾同然の身となつて、全快の見込みもない。そこでつい此間まで、可愛い妹娘おとよに養子を貰つて、此家を相続させやうとおきのは楽しんで居た。

然るに夫藤吉氏は不具な子程不憫がかゝり、何とかして早く助けてやりたいとあせつて居た。然るにおきのに於ては、それは何程あせつても、所詮叶はぬ仕儀と思つて居たのに、夫藤吉氏が天理王命を信心し出してから、さしもの難病も、その撓まぬ信力に依つて、遂次輕快となり、遂には今眼の當り姉娘おまつの全快にも近き御利益をも、見るに至つたので、かくては長女であ

るおまつに婿を貰つて家を相続させ、可愛い妹おとよを他家へやらねばならぬかと、おきのは急に思ひ出して俄に夫の信仰が憎らしくなつて、此場の狂氣じみた所業となつたのであつた。然し其場はともかくも一同になだめられて治まつたものゝ、今度は折角かくまでに不思議な御利益を頂いて居たのに、おきのが要らざる噴嚏を熾やしたるがため、助かり損ねたおまつの嘆き、藤吉氏の憤り、諦められるべくも無かつた。

その後更に二日間滞在して、仲田佐衛門先生や、山澤良助先生から、段々の御仕込みを頂いて、一同恐悦したが、上田藤吉氏夫妻の胸底には、一抹釋然たらざる或暗影が、しるされざるを得なかつた。

かくて深き理を藏する御地場は、一面鏡屋敷として、此等多くの人々に悲喜善惡様々の裁きを與へられつゝ、彼の兵庫眞明組の人々は、翌二十日御地場を立ち、途中再び大阪に一泊してその翌二十一日又も海路ハヤ船に送られて、兵庫今出在家の濱へと歸つて來たのであつた。

第八節 初期兵庫眞明組の潰滅

御地場への参詣、それは更に各々の信仰を深め、より大なるお助けを受けんがためである。然るに初期兵庫眞明組に於ける初めての御地場への参詣は、はからずも反つてその反對の結果を來たしたのであつた。

元來此の初期兵庫眞明組が組立てられたのは、立花善吉氏の努力によるとは云へ、一面上田藤吉氏が、長女おまつの躰を助けんとする一貫したる信力が、基ひするのである。立花氏が兵庫へ出張布教する様になつたのも、その爲めであり、兵庫眞明組を組んだのも、それからである。實に此の二人の力は、初期兵庫眞明組を結成した二大礎石であつたのである。

かくて此二者の協力に依つて、迫り来る外難も見事に突破して、全講員の勇み立つ中に、賑々しく御地場歸り迄したのに、測らずも豫期せぬ禍根が、突然御地場に於て暴露したのであつた。その豫期せぬ禍根とは何ぞ。それは上田藤吉氏妻おきのの偏愛である。かくて今や上田一家

は夫婦姉妹でありながら、その利害は全く相反するかの觀を呈したのであつた。

即ち藤吉氏にしてみれば、不具な姉嬢おまつがいぢらしい。何とかして助けてやりたかつた。然し醫者の手放れであるかれおまつは、信心特に本教を信じて、その神の助けを俟つ外はなかつた。それ故にあくまでも本教の信仰を續け、益々熱心にならねばならないのであつた。

然るに妻おきのに於ては、その偏愛の目的を達するためには、その夫の信力が、此の場合一番の脅威であつた。それ故に自らの不信心であるばかりでなく、つとめて夫の信仰を妨げようとした。それが又講元である上田家としては、講員全體に邪魔をする事にもなつたのである。それがどうして講員全體の不滿とならずして置かうや。殊に御地場歸りしてからは、上田家は講元たる以上に、講社の信仰のめどうたる有難い御教祖直々の御赤衣を、御祭りしてあるに於てをや。かくて上田藤吉氏の夫婦中は睦まじからず。それを又講員は困つたものだ、誠に勇まぬ状態になつたのであつた。

かゝる處へ程經て立花善吉氏は出張して來た。來て見れば上田の夫婦間が睦まじくない。の

みならず講員の誰彼からも、

「かくの如き不信心の妻のあるに於ては、講元の妻としては誠に困る。又御教祖から賜はつた御赤衣を、彼様な講元上田方にお祭りして置く事は、上田方の日々の事情のために、誠に神様に済まぬ。そのため講社の者は心配で勇めない。」と口々に訴へて来るのであつた。

かうした陳情に出會つた立花氏は、事の意外に驚くと共に、上田夫妻に一應は家庭内の事情治めに就て、話をされたやうでもあるが、當時十四歳の獨身青年布教師には、遺般の夫婦乃至家庭内の機微が十分に察せられなかつたやうでもあり、反つて講社全體のいづんでゐる事が、強く氏の心を打つたのであつた。さういふ處から、氏はより多く講社を勇ませる方策に、心を勞せられたのであつた。そこで次の如く講の内容の改造といふ事に努められた。

即ち氏は一先づ大阪へ立ち歸り、井筒大阪講元とも談合して、同年舊八月十六日、再び中川文吉氏の持船に乗つて、井筒講元、中川講脇、其他數氏の大阪講員と共に、兵庫に出張し來つ

て、又々今出在家町の槍屋に、講員の大集會を開いたのであつた。さうして其席上、兵庫側の講員に向つて。

「今迄は講社といふても單なる信者の變名に過ぎなかつた。それで此度正式に講社となり、講社の名簿を作り、講社中には講元、講脇、周旋方及平講社などを定めねばならぬ。」

と談示をして、それより色々と手別けして、その準備に掛り、約二週間後の翌舊九月三日に愈講の改造を行つたのであつた。

それによると、講元は上田藤吉氏、講脇は三好茂八氏、周旋には唄徳松（唄こふじ女の夫）鹽崎新助外四五人、其他平講社十六軒といふ事になつてゐる。これによると當時の講員全數は、廿四、五軒あつた事がわかる。

かく改造を終るや、井筒、立花の二氏以外は、大阪に歸られたが、右兩氏は更に居残つて、お助けに盡力されたのであつた。

其頃鹿さんといふ人があつた。重い眼病を助けて頂き、彼地是地と大に匂掛けに廻り、明石

方面までも匂ひがけして道附けたと、立花氏の憶起録に記されてゐる。然し我が兵神の古史實には、それに該當する人物と場所とか今だに不明である。稍その鹿さんといふのが谷勝鹿藏氏(編田久吉氏三男吉吉氏の養父、編田氏は、此の谷勝氏事情より本當に信仰す。次章編田久吉氏項参照)であるらしく、又その明石方面といふのが、明石郡垂水村ノ内山田村講社らしく思はれるが、その双方に就て調べても、判然たる確證が今につかないのである。

それは兎も角として、次にその改造後の初期兵庫眞明組は、果して立花氏等の思惑通りの講勢の復活が出来たであらうか。彼の和田宮の神主の再質問の勝利後の様な復活が出来たであらうか。不幸にしてそれは何等の効果を齎らさなかつた。兵庫眞明組は依然として沈滞の道を迎るのみであつた。

何となればその改造は、何等禍根の剪除に觸れて居なかつたからである。即その禍根は上田氏の妻の不信仰、引いては上田夫妻の意見の不一致、同家庭内の不和にあつたのだ。どんなに講社全體がいづんで居ても、それは講社側には無かつたのである。

然るに上記の如く徹底して、その禍根である上田家内紛を治め切らず。徒に講社を勇ませやうとする枝葉の治めに走られたため、遂に根枝共に生ひ立たぬ様になつて行つたのであつた。其後も依然として上田家の事情は、治まらなかつた。そのために講員は、講元上田藤吉氏方へ集まる事を心良しとせなかつた。かくて要はゆるみ、龍頭は腐つて行つた。どうして講員が離散せずに居らうや。幸にして兵神の道は神様の思惑によつて、次から次へと不思議な御守護により伸びて行つたが、然しそれは最早今出在家町の本據の講元上田藤吉氏によつて統制付ける事は出来なかつた。

時は巡つて明治十五年の春となり、兵庫今出在家町に初めて本教の種子が下された思ひ出深き舊三月が再び來たが、熱し易く且つ冷め易い濱の漁民共、殊に感激の料に遠ざかり、氣まづいものゝみ、日頃見せつけられた上田講元膝下の今出在家町では、その大多數の講員は殆んどいづんでしまつて居た。

本據既にかくの如くであるから、恰も要を失つた様な其他の町々に、それからそれへと擴ま

つた講社達は、歸一する處を知らず。全く無統制の地に置かれて居た。

いづれは新たな感激、新たな統制裡に、統合せられねばならぬものとして、それはやがて次に來るべき明治十五年舊八月に結講されむとする、天輪王眞明講社の興起を豫想せしむるものである。

第二章 天輪王眞明講社の興起

第一節 唄小富士女の入信

一、道は感激から

道は感激から生れる。より大なるより深き感激は、より大なるより深き道を生む。彼の兵神の最初期の道、初期兵庫眞明組が、成立後久しからずして、その生々の氣を失ひ、漸次潰滅して行つたのは、それだけに、その感激に深みと熱が足りなかつたのだ。即ちその中心人物の一人であつた立花善吉氏は、所詮我が兵神の道に於ては、種蒔く人であるに過ぎなかつた。更に一步を進めて、あくまでも兵神の道の眞柱となつて修理肥しを爲し、最後の實の理をも見るまでの徹底味を缺いて居た。又その一人上田藤吉氏に至つては、我長女の覺を助けんとするに殆

んど終始して、それより一步出でたる叻一條の、大きな感激の道への目覺めが足りなかつた。道は心通りである。初期の兵庫眞明組が、餘りにも果加なく潰れて行つたのも、その心の上から考へてみれば、又當然の道すがらであつたと言はねばならぬ。

それに代つて生れ出でたる眞明講社（後の兵庫眞明組第二番）が、逐次發展興起の道を辿つて、後遂に今日の大きな兵神の道となつたのも、そこにはより大なる深い感激があり、且それが絶えず重ねられてあつたからである。然してその最初の第一歩を爲したのが、今茲に述べんとする唄小富士女の入信への感激である。

さりながら當時の唄小富士女は、いと小さきものとして、殆んど其頃の道の先輩から注意されなかつた人である。彼の當時の兵神の道の大立物である大阪の立花善吉氏が、後明治四十三年七月八日に録された我が兵神大教會の起原に關する憶起録に、一言唄小富士女に説き及ぼされてない事が、之を如實に證するのである。然し二人の間柄は、知らぬ仲でもなかつた。否唄小富士女にしてみれば、當時多大の指導を立花氏に受けて、深く銘記して居られたのであるが

立花氏の記憶に於てそれが薄くなつて居たのであつた。

二、唄小富士女眼病の靈教

明治十四年舊七月、此處兵庫今出在家町の南に續く和田崎町百四十五番屋敷に、屋號が三徳と通稱された、魚の擔ひ賣りをする唄徳松と云ふ人の一家があつた。貧しい暮しをして居るのに、その妻小富士女（嘉永二年十月五日生、今年三十三）は、五年前に次男の彌三郎（明治十一年二月九日生）を生んでから、それ迄いつもお産が軽かつたと云ふので、産後間もなく縫物をしたり、その他立ち働いた事がわざわざいして、餓に血の道で、眼をすつかり悪くしてしまつた。殊に右の眼には、三つの星がつき、今ではもう何も見えない。のみならず、晝夜にうづいて、頭全體が痛みつめ、戸の明け閉めの音を聞いても、その響きで堪えられないと言ふ程になり、誠に困りぬいて居た。

それで貧しい中からも、醫療に盡す傍ら、其頃盛んであつた大神宮さん（黒住教）を熱心に信心して居た。然し一向に御利益がなかつた。仕様がなないので、もう四國参りでもしようかと、思ひ迷ふて居た、それは同年舊七月十一日の事である。

前章に記した今出在家町の三好熊吉氏の妻おひさ女(唄小富士女)がやつて来て、

「小富士さん、大阪の本田に、どんな病氣でも助ける人がある。そのことは大和や。天輪王様と云ふのや。そのこともとへ近い内に大勢参詣するのやが、あんたも一緒に参らんか。さうして天輪さんに助けて貰はんか。」

と、暗に大阪本田の立花善吉氏等の事を噂しつゝ、大和参りを勧めて呉れた。それは尠なからず小富士女の心を牽いたのであるが、折柄夫徳松氏が、商ひに出て不在であつたので、

「主人が歸つたら相談して、その上の事にします。」

と返事をした。やがて其日の夕方、夫徳松氏が歸つて来たので、今日おひさ女から勧められた大和参りに就て相談した。すると徳松氏は、

「お前は犬の子でも猫の子でも、有難いといふたら、すぐ信仰するといふのやな。日天月天の天照皇大神宮様があるぢやないか。神様と言へば、此の上の神様は無いから、迷ふな。」と、その輕卒をたしなめられた。それでその儘にして居た。

然るにそれから二日経つて、同月十三日に再び三好おひさ女が来て、

「明日参るのやから、今一遍相談しなはれ。」

と勧めた。それで小富士女は、再び夫に相談したら、夫も遂に同女の大和参りを承認してくれた。

かくて大多數が、今出在家町の講社の人達の中に、まだ信者でもない小富士女が只一人、他町の和田崎町から、この参拜團に加はる事となつたのであつた。

唄小富士女にも、これが奇しき運命の分岐となつた、意味深き初期兵庫眞明組の最初の御地場参拜團は(第一章第七節参照)、其翌早朝兵庫今出在家町の濱から船出した。

「涼しさや、つい大阪へ一走り。」頃(新暦八月七日)は舊七月十四日(新暦八月七日)眞夏の海は涼しかった。

一行を乗せた早船は、紺碧の波を衝いて、飛ぶが様に一走り、其の日の午後まだ日は高いのに、早くも船は大阪の川口へと乗入れて居た。

まづ一行は本田通の裏の鍋屋組に、立花善吉氏を尋ねた。然るに折柄魚賣りに出掛けて居た

立花氏は留守であつたので、隣家の大西嘉助氏方で待つて居ると、暫くして立花氏は歸つて来た。一同は氏と挨拶を交してから、或は表の大坂眞明組井筒講元の宅へお参りしたり、或は前記大西方で打寛ろいだりして居たが、眼病を助けて頂きたいと言ふ熱望から、特に此の行に加はつた唄小富士女には、只今紹介された立花氏から、助かる道に就て、只管お話を聞いて居た。まづ大阪へ行つたらお籠り所もあるさうなと、聞いて居た小富士女には、来て見ると、その餘りにせゝこましい、むさくろしい裏長屋にあきれ、且一向お籠り所も無ささうなので、第一にそれから聞いて見た。すると立花氏は、

「お籠り所は、大和にあるのや。」と云つて、それから、

「私の父は疝氣の腰痛で、毎年三月になると起る。私も亦眼が悪かつた處を、表の井筒さんにお話を聞き、又大和へもお参りして、かうして助けて頂いた。あなたの眼病やとて、助からん事はない。」

と、氏は自らの體驗から、ほつ／＼話をされるのであつた。

それに對して小富士女も、是迄の病氣の起りから、種々手を盡した事、又大神宮さん(黒住歌)をも信心して居るが、一向治らず困つて居るなどの話をした。

すると立花氏は、自分の兩手の指十本を示して、その一々に依つて、やつとその十柱の神様の御名前だけを言ひながら、

「あなたは小指に助けて貰はうと思ひなさるか。親指に助けて貰はうと思ひなさるか。小指は伊勢の内宮様外宮様や。親指は天の月日様や。此道はその天の月日様に助けて貰う道や。」とお話あつて、眞實の月日親神様に助けて頂くべきを、切に奨められたのであつた。

そのお諭しは何のこだはりもなく、小富士女の心に得心が出来て行つた。最後に、

「かくの如く参詣して下さいといふは、神様のお引き寄せであるから、私は今夜外に寝ても、あなたは内でもやすんでもろて、三日三夜のお願をする。」

と言つて、立花氏は小富士女のために、熱誠こめたる三日の願ひをして下された。

お願ひの済んだ頃は、一行の其日の宿とされた大西嘉助方は、夏の事とて蚊帳を吊るので、室は餘計に狭くなつて、もう小富士女の寝る場所もない位に詰つて居た。然し當時まだ獨身で一人住居の立花氏方では憚るので、狭いのを我慢して、小富士女は一同と共に大西方に泊つた。然るに其夜小富士女は、いつもなら眼がうづいて容易に寝られんのに、いつの間にか、いと安らかに睡られて行つた。ふと眼を覺ますと、短い夏の夜は、早や白らくくと明け初めて、午前四時頃と思えたが、さても不思議や、眼の痛みは跡方もなく止めて下されて居て、それは誠に五年越に、絶えて無かつた爽やかな快よさであつた。神様は同女の思ひあまつて素直にすがる心を受けとつて、珍らしくも一夜の間に奇しき御利益の一端をお示し下されて居るのであつた。小富士女の喜びは非常であつた。行程第二日、愈々御地場への旅には、身も心も雀躍して一行に従つたのであつた。

やがて一行は御地場に到着し、同月舊二十日迄滞在したが、その間中にも小富士女の眼は、日毎に救はれて行つた。三日のお願ひ切りになる同十七日頃からは、兩眼共に殆んど拭ふが如

く助けられて居た。

それと共に彼女の心も、日毎々々に洗はれて居た。即ちその滞在中、一行に對して夜毎夜毎に仲田佐衛門先生や、山澤良助先生から、段々の結構な神様の御話を聞かされた。その中で彼女のみは、どんなに夜が更けやうとも、歡喜に燃ゆる心には、眠いなど、はつゆ思はれず、その尊いお話に聞き入るのであつた。それは人間身の内神様の借物なるお話や、御教祖神憑以後の御苦勞のお話であつた。彼女はその肉體の救はれたると共に、其心も誠に僅少の日數ではあつたが、目覺ましく更生されて居た。即ち、

「御老母様に、月日様が入り込み、お助け下さるとは、何として結構な有難い事か。」と微塵も疑ふ所なき一隨の信仰が、彼女の心に築かれてゆくのであつた。

三、おびやゆるしの奇蹟

附 鹽崎新助氏の入信

かく小富士女が急速に本教への堅き信仰へと導かれてゐるの際、その數々の聞かして頂いた

お話の中に、お地場には、珍らしいおびやゆるしの不思議なお助けのある事を知つた。時に同女は四人目の子供を懐妊中で、既に七ヶ月になつて居た。ありがたい感激に燃えてゐる小富士女には、その事を知つては、おびやゆるしを頂かすには居られなかつた。早速願ひ出ると、先生方は、

「このおびやゆるしと云ふのは、中々大もうな理であるから、今初めて参つて来て、三四日の逗留では渡す事出来ぬ。一度歸つて夫婦揃ふて参詣し、とくと神の話を聞いた上でないと渡す事は出来ぬ。」

と仰せになつた。それは信仰の日誠に淺き小富士女には、返す言葉もないのであるが、同女はどうでも今頂かすには居られなかつた。そこで次の如き堅き決意を述べて、再び願ひした。

「私の夫は働き人でありませぬ。又子供も多う御座ります故、夫婦連れで、お参りする事は出来ませぬ。私はこれ迄でもお産は輕かつたので御座いますから、神様のおびやゆるしを頂きま

すれば、尙更輕う産まして頂けると思ひます。それで神様の御許しを頂きますれば、親や夫が何と申して反對しませうとも、必らず神様の仰せ通り守らせて頂きます。萬一間違ひが出来まして、神様をどうとは決して申しませぬ。皆自分の因縁が悪いのであります。若しもおびやゆるしを頂いて死ぬ程なら、何所でどうして居ましても、因縁で死なねばなりません。私は神様の結構が眞身に入つて居ります。どうぞお許し下さりませ。」

其熱誠は、その言葉に、その面にあらはれてゐたか、先生方も、

「そこまで堅い精神なら、許してもよからう。」と、遂にお許し下されたのであつた。

お産は女の大役である。幾度産んでも、其度毎に決して油断のならぬ覺悟を要するものなるに、その數千年來のお産の習俗を破る、毒忌みいらす、凭れものいらす、腹帯いらす等のおびやゆるしの信條を持つ事は、當時先例のない我が神戸地方に於て、信仰の日尙淺い小富士女が、進んで右様の決意の許に頂いたといふ事は、餘程の深い感激がなければ出来るものではな

い。然るに彼女は之を敢てしたのである。

同月舊二十一日、一行は、その御地場への旅から歸つて来た。小富士女も亦兵庫和田崎町の自宅へと歸つて来た。町の人々は、旬日の間に、小富士女の眼の全快してゐるのに驚いた。

それから約一ヶ月程して、小富士女は八月目で女の子(おひきこ)を産んだ。それはまだ殘暑のきびしい舊曆七月の中旬、新曆の九月初旬の頃であつた。

何時も来て貰ふ取上げ婆さんが来て、色々世話して呉れたが、最後に腹帯をする段になつて、小富士女は断じてせなかつた。お婆さんはあきれてしまつた。それがやがて怒りとなつて、「若しも失策があつたとて、婆さんの失策とは云ふて呉れるな。」と云ひ置いて、歸つてしまつた。そうして近所隣の誰彼に、

「三徳の嫁はんが、こないくや。」

と吹聴して廻つた。それを聞いた人達もあきれて、

「どないぞ、なつとるでく。」

と云ふて、交るく見に来たが、當の小富士女は、髪を兩輪に結ふて、當の通りテンく何の異常もなく立ち働いてゐた。人々は反つて驚きの眼を見張つたのであつた。

それから三日目突然大阪の井筒講元が訪ねて來られた。さうして此の小富士女のおびやゆるしの安産を聞いて喜ばれ、拍子木とチャンボンとで、神様へ御勤めをせられた。すると又近くの人々が、

「お産をして騒いで、どうするのか。」

と見に来た。然しそれも杞憂に終り、小富士女の身上には些かの異状もなかつた。それで又人々の驚異を重ねしめた。

その同じ日である。井筒氏が歸られた後で、眞向ひ(和田崎町百十五番)の小富士女には、従兄弟に當る鹽崎新助氏(三好勝吉其お)が尋ねて來た。さうして中の間で、小富士女と話をして居たら、突然鹽崎氏が、

「奥から煙が出よるで。」

と注意した。小富士女が驚いて奥の間へ行つて見ると、竿に振りかけた帷子の半袖の上に、更に掛けて置いた腹帯が、六つに燃え切れて落ちて居た。

早速揉み消したが、どうも不思議でならなかつた。この室には少しも火の氣の無かつた筈である。若しあつたとすれば、夏の事であるから、コヨリに火を付けた蚊くすべ位のものであるが、それからは火のつきそうでもない。

尙不思議な事には、その腹帯が六つに焼け切れて落ちて居るのに、すぐその下の麻の帷子には、火色もかゝつて居ない事であつた。尙其他の建具にも何等の異状がなかつた。只腹帯が六つに焼け切れて、落ちて居るのみであつた。

之を見た小富士女は、

「なんほ腹帯致しませんと、神様にお誓ひ申して居ても、どんな事から腹帯爲まいとも限らない。かうして六つに焼き切つて置いたなら、仕様にも仕様がなない。これも腹帯要らんものやから、神様が焼き切つて下さつたのやなあ。」

と、更に新なる感激を、面に浮べて物語つた。之を見聞きした鹽崎氏も亦、

「兼々濱(今出在家)の妹のお久から、かうかう云ふ神様があるから信心せんかと、よくすゝめて呉れたが、あの講社の人達が、お勤めして居る手つきを見てみると、狐つきの様に思はれて、信する氣にもなれなんだが、今この不思議を見ては、本當に神さんが焼いたんやなあ。これこそ誠の神に相違ない。私も今日から信心する。」

と云つて、此の前大和参りから歸つて來た小富士女の拭ふが様な眼病の不思議なお助け、又此度小富士女の不思議なおびやゆるしの安産の経過等に、十分心動いて居た鹽崎氏は、今此の腹帯の不思議な焼け方に、遂に翻然として洞ヶ峠を下り、小富士女と同じ天理王の信仰の門にと、勇ましく入つたのであつた。

然もこれ唄小富士女の信仰が生んだ最初の教弟で、和田崎町では、この小富士女の身を以て實證した天理王の命の奇蹟に、その追隨者は一鹽崎氏に止まらなかつたのである。

然し當時はまだ、初期兵庫眞明組に所屬してゐるが、この唄小富士女の眞實と奇蹟から生れ

る感激の力は、同十四年舊九月三日、同眞明組が更生への改造に於ても亦認められ、同女の夫
唄徳松氏は、鹽崎新助氏と共に新に周旋方の筆頭に擧げられたのであつた。
然しながら悲しくも初期兵庫眞明組の更生は、上田講元家庭の結ほれた惱みから、遂に成ら
なかつた。かくてその本據の今出在家町の教運は、日に萎微して、遂に潰滅してしまつた。
さりながら、此の唄小富士女よりする、新たなるより深き感激の炎は消えなかつた。否益々
その光を増し、感激は感激を呼んで、逐次大なる發展へと導かれて行つたのであつた。

第二節 唄氏に導かれたる人々

一、本田せい女の入信

附 北野熊次郎氏の入信

唄こふじ女の宅から四軒目に本田せい(天保九年十月三日 生當時十四歳)といふ婦人が住んでゐた。彼女は妹の
灘谷する女と同居して居た。

明治十四年舊七月、本田せい女は、唄こふじ女が、おびやお産をした頃、とりあけ婆さんの
吹聴を聞いて、「どないやろか。」と好奇に驅られ、二度も三度も三徳の家を覗きに來たが、何
の異状もなく、常の如く立働いて居るこふじ女を見て、「何と不思議やなあ。」と天理王の命様の
御守護に驚いた一人であつた。

それから約二ヶ月経つた舊九月、本田せい女は又腹の水を取らねばならぬ様になつた。同女
には恐ろしい眼滿の持病があつたのである。

然るにせい女には、是迄三度縣立病院で腹の水を取つて居た。然しその三度目に同病院掛り
の醫師河本某氏から、

「今度腹の水を取つたら、命が危いから、何神様でもよい。信心しなさい。薬を飲んで別
効かないし、醫者に掛るにも及ばない。けれども萬一死ぬ様な事があつても、私が死亡診断
書は、何時でも書いてあけるから、御安心なさい。」

それは親切な言葉ではあつたが、又恐ろしい宣告でもあつた。その恐ろしい日が、遂に迫つ

てきたのである。何とかせなければならぬ日が、迫つてきたのである。

そこでせい女は、妙見さんを信心した。その妙見さんの云ふのに、

「死霊と生霊とが付いて居る。それを退散させてやるから、此の御幣を持って。」

その言はれる儘に、御幣を持って御祈禱をして貰つたが、少しも効験がなかつた。

さうかうして居る内に、彼の唄こふじ女の眼病や御産の不思議な御利益を見聞して、その方に多分に心が向いて居た。

かゝる日に、前述した様に、もうどうでも腹の水を取らねば堪えられぬといふ處まで、せい女の身上は迫つたのであつた。然しその水は取る事は出来なかつた。取れば今度は命がないと親切な河本醫師が言つて居る。時にせい女は四十四歳であつた。まだ死にたうないとは云へ、人間以上の神佛の力を借らざる以上、せい女は到底助かる術なき危地に立つて居たのであつた。

そこで絶體絶命の境に立つて、彼女に思ひ出されるのは、隣の唄こふじ女を助けた神様の事

である。今はあの神様より外に、私を助けて呉れる神様はない、と深く思はれてくると、もうじつとして居れなかつた。早速妹のおすゑ女をして、こふじ女を頼みにやつた。

せい女の病床を見舞つたこふじ女は、彼女が御地場に滞在中、聞かして頂いた神様の御話、殊に身上十柱の神様の借物なる御話を取次いで、自分に爲されたると同様、今度は人のために熱誠をこめて三日三夜の御願ひをかけたのであつた。

然るに、何うした事が喜ばしげに御話を聞いて居たせい女は、俄に齒を喰ひしぼつて、人事不省になつてしまつた。それから三日の間と云ふものは、何も喰へさす事も出来ず。只僅かに喰ひしぼつた齒の間から、神様に御願ひしてお供へしたお水を、チヨイ／＼入れてやる外に何うする事も出来なかつた。案に相違した容體に、こふじ女は只神様に御願ひする外、その術を知らなかつた。

それから三日目に、ふとせい女は、氣が付いた。さうして

「おすゑ！」

と妹を呼び、

「おいど(尻)むさいから、見ていな。」

と初めて物を言ふた。そこでおする女が、何気なしに布圍をめぐつて見たら、出たは／＼、むさいものが一遍に出てしまつたか。誠に夥しく、溢れ出て居たのであつた。その反對にあれほど張り切つて居た太鼓腹が、けつそりと減つて、せい女の腹の皮はチリ／＼と皺だらけになつて居た。

神様はこふじ女の眞實と、せい女の、この神様より外に私を助けて下さる神様はないと、一途に思ひすがつたその眞實をお受けとり下さつて、三日の間に腹の中を一度にお掃除して下されて居たのであつた。

かくて物の見事に三日の願ひで、本田せい女の生命のない處を助けられたと云ふ奇蹟は、大の聳動を又も和田崎町の住民達に及ぼした。せい女の實弟、當時和田崎町百四十六番邸に居住して居た北野熊次郎氏(天保十二年二月十五日生、當時四十二歳)は、眞先きに感激して本教に入信した。

今や和田崎町は、さきに唄こふじ女の不思議なお助け、今又本田せい女のふしぎなお助けに天理王命様の評判は、あらゆる教を歴してひとり宏鐘の如くに響き渡つたのであつた。

やがてその年の秋(舊九月初期兵庫眞明組改造後)唄こふじ女は、おびや安産の御禮のため、本田せい女は脹満のお助の御禮のため、當時の初期兵庫眞明組の上田講元夫妻に連れられて、同講第 回目の御地場歸りをしたのであつた。

やがてその御地場から歸つてからの此の二人の女性は、その身上の靈救が共に大きな匂ひ掛けとなつて、當時草創の和田崎町を根據とする道の基となつたのみならず、又更に積極的に難澁な人の助け一條にも、大いに努められたのであつた。

かくて兵神の道は、その最初の基礎を此二女性の眞實と奇蹟によりて築かれたのであつた。

二、爾餘の和田崎町の人々

橋本茂助、吉原庄吉、片岡吉五郎氏等の入信

以上兩女性によりて開かれた兵庫和田崎町の道は、昨の今出在家町の道の榮えを、此處に移

したかの觀があつた。

即ち先きに記した鹽崎新助、北野熊次郎兩氏の入信に引き續いて、更に同町の橋本茂助(和
田町
百七十四番、天保九年九
月十日生、當時四十四歳)、吉原庄吉(和
田町百十五番、安政元
年正月十日生、當時二十八歳)、片岡吉五郎(和
田町、天保五年正月
十五日生、當時四十八歳)の三氏が
入信して居られる。是等五氏は、唄、本田兩女と共に、和田崎町の道の大先輩であつて、何れ
も後の兵神の道を築くに當つて、忘るべからざる大きい足跡を残した人々である。

其外萬山伊兵衛、同福松の父子其他續々として入信し、當時の和田崎町が只一筋町の淋しい
通りに過ぎなかつたが、その兵神の道に残されたる重要性に於ては、實に後の兵神眞明講の中
心勢力となつた神戸花隈町組と相並んで、他に其比を見ざる衆團的な道の榮えを見せた處で、
殊に此の和田崎町は、後の兵神の道の最初の重大なる温床となつたものである。

然して是等の諸氏は、大低明治十四年舊九月の初期兵庫眞明組の改造前後より、同年末に至
つて入信されたものであつた。

三、端田久吉氏の入信

附 北條仁兵衛氏の入信

物の力が内に張り切れば、自づと外に溢れ出すには居ない。その反對に、外に溢れ出づる事
は、内に力が張り切つてゐるからである。和田崎町の道は、やがて明治十五年を迎へると共に
外に溢れ出すには居なかつた。その外に溢れゆく道の第一の魁を爲したのが、後の天輪王眞
明講社(兵庫眞明組第二番乃至兵神眞明講)の講元となつた端田久吉氏である。

端田氏は弘化元年十一月十五日の生れで、父を甚七と云ひ、(母未調査)姉すき、妹ゑいの三
人兄弟であつた。氏の家は初め和田崎町の南の端にあつて、同町はづれにある和田宮神社のす
ぐ隣にあつた。而もそれが兵庫の南の端であると云ふので、其頃「端屋」と呼ばれて居た。明治
維新後名字を定めるにつき、氏は此の謂れを取つて、端田と名乗つたのである。だから元から
言へば、氏も亦和田崎町の人であつたのである。

其後端田氏は、妻やく女を娶つてから、兵庫北逆瀬川町三番邸、即ち柳原通りと交叉する西

宮内町通りの角を、能福寺の方へ入る六軒目の二階建山側の家を買収し、其處へ移つて、屋號を「端久」と號し、階下で穴子屋をなし、階上で料理屋を兼業した。今（昭和七年九月）も尙その家は二階に手すりが付いた儘、菓子屋と時計屋になつて残つてゐる。（巻頭の寫眞参照）

其頃から此の場所は、兵庫方面に於ける要地に當つて居たので、一時は能福寺（其頃また大佛さん）前の穴子屋と云つて、相當に知られたものであつた。その故に所々方々に華客が抜け、交際も廣く、心安い人も澤山に出来たのであつた。

家庭は其頃妻やく女との間に、長男熊吉、次男棟吉、長女やゑ、三男音吉の諸子が出来て居た。又家屋は四間に六間位の總二階建てで、相當に廣く、まづ不自由なき生活をして居られた。然して當の端田氏は、正直で親切で、骨身を惜しまぬ勤勉家であつた。神様はやがて、此の良材を兵神の道の棟領としてお引き寄せになるのである。

明治十五年の舊正月の月であつた。端田久吉氏の頸に、ふと小さい腫物が出来た。初めは氣にも留めなかつたが、數日を過ぎると、それが段々大きくなつて、熱と痛みを持つた恐ろしい

瘍となつたのである。端田氏は日夜にその烈しい熱と痛みに苦しめられた。

然し商賣の方も、自分が穴子の仕入れに行かねばならぬので、痛さと熱とを堪えながら、毎朝南の魚市場へ出かけて居た。南の魚市場とは彼の今出在家町の濱の魚市場を云ふのである。

然るに其魚市場の市振役が、先きに記した本田せい女の實弟北野熊次郎氏であつた。而も北野氏とは端田氏がまだ和田崎町に居た時分からの昔馴染で、且つ商賣友達でもあるので、自然兄弟のやうに心安くして居た。

さういふ處から、北野氏は端田氏の頸の腫物を見て、初めて氏に天理王命の匂ひ掛けをなし、御息きの紙の靈顯を述べ、天のお日様とお月様とを拜む信仰なる事を説いて氏の入信を勧め、且御息きの紙の小片を頂かせて呉れたのであつた。

端田氏は、その御息きの紙を頸の腫物に貼つた。腫物は忽ちに潰えて、不思議な御利益を頂いた。これが氏の天理王命様を知つた初めであり、又神様のお引き寄せの第一歩でもあつた。然し氏は、まだ有難い神様だと思ふ單なる感謝以上に、進んで篤く信仰しようと言ふ迄には至

らなかつた。

然るに同月端田氏は、當時五歳になつて居た三男晋吉氏を、兵庫三川口町の百姓の傍ら土木請負業をして居た谷勝鹿藏と言ふ人の許へ養子にやつた。處がその谷勝氏は、前年頃より眼を病んで、それが同年三月頃には、最も悪性の底翳となり、殆んど失明せんばかりになつたのである。

それを知つた端田氏は、人事ならず驚いて、先般自分の頸の腫物が、不思議にも助けられた天理王命様の事を思ひ出し、右神様に御願ひするやう、谷勝氏に匂ひ掛けした。氏も亦早速頼むと言ふので、此旨端田氏から和田崎町の北野熊次郎氏にお頼みした。そこで北野氏は姉の本田せい女や、唄こふじ女等に話をしたので、右兩女等の運ぶ處となつて、さしもの谷勝氏の眼病も速かなる御利益を頂き、氏はその御禮のために、同月御講勤めを同氏宅で行ふ迄になつたのである。そこで端田氏も、さしもの谷勝氏の悪性の底翳も、かうして著るしい御利益を蒙られたのを見て、いたく驚嘆して、それから本當に信仰する氣になつたのであつた。

然るに其後更に數月の後(同年六月頃か)今度は端田氏自身が、急性の眼病に罹り、暫時の間に殆んど何も見えなくなつたのであつた。

其の時の端田氏は、初めて心からの懺悔と祈願のため、大阪眞明組の講元、井筒梅次郎氏に連れられて、大和の御地場へ参詣した。彼の暗がり峠を、井筒氏に手を引いて貰つて越した時など、一縷の助けて頂く望みは持つて居るもの、果して助かるものであらうかと、淋しい不安な情けない思ひをしたのであつたが、御地場に参詣して頂き、種々と結構なるお話を聞かして頂いてゐる内に、不思議に御利益を頂いて、歸りには判然と物が見える様にして頂いた。その嬉しさは氏の終生忘れられぬものであつたといふ。かくて三度その感激を重ねて、氏の信仰は牢固として定まつたのであつた。

「日々によ木にては手入する。どこが悪しきとさらにおもふな。」(御筆先第三號)

と神様は仰せられてゐる。端田氏はその確固たる信仰に入る迄には、以上の三段の経過と試練とを経たのであつた。それはやがて來らんとする兵神の道の統帥たらしめんとする、神様の深

く有難きお仕返しであつたのである。時に氏は三十九歳の分別盛りであつた。

尙此頃、端田氏に續いて信仰に入つた後、兵神の元勳、北條仁兵衛氏(天保十一年九月十五日生)の入信に付ても記して置かう。

北條氏は其頃今出在家町や和田崎町の直ぐ北に接する。南逆瀬川町二百九十八番邸に於て八百屋を営み、且南(今出在家町や和田崎町等の兵庫の港側の町々の呼)にも得意があつたので、よく干物の行商に廻つて居た。然るに此年(明治十一年)六月、三歳になる子息廣吉氏の脚の太股の根付(又の所)に、腫物が出来、痛んで悲鳴をあけるので、醫者に見て貰つた。すると「切開せねばならぬが、切開すれば一命にかゝはる」と云ふた。北條氏夫妻は、はたと愛兒の難疾から行詰つたのである。

そこで北條氏は前年から、南へ行商に行つて、天理王命様の噂を聞いてゐるので、その神様におすがりする事より外はないと決心して、當時今出在家町の方は萎微して居たので、和田崎町の前記した人々の許へ(事は不明)頼みに行き、初めて神様の御話を聞き、お願いをして貰つ

たのであつた。

然るに妻とよ女は「神様ばかり頼んで居つても、どうなるか分らん。」と考へて、「朝顔の葉を揉んで腫物につけたら、直きに口がつく。」と云ふ俗説を聞いて、そのやうにして、その腫物に貼つて居た。

處が他から歸つてきた北條氏は、之を見付けて、

「神様の御話を、どこへ聞いて居るのや。風呂へ行つて来い。」

と叱りつけ、妻女の出で行つた後で、氏はその朝顔の葉を取り捨て、一心に神様にお願をされたのであつた。

間もなく妻女が風呂から歸つて見ると、息廣吉氏は座敷中を走り廻つて居た。見ると腫物は見事につぶれてゐた。それを眺めた妻とよ女は、

「如何にも不思議やなあ。」

と感心してしまつた。神様は確固たる北條氏の信仰を愛で、忽ちにして御利益を下されて居

たのであつた。

然るに其夜又俄に、廣吉氏の翠丸が腫れてきた。そこで北條氏は妻とよ女に、

「お前神様の話を聞いて、どういふ様に思案をしてゐる？」

と聞いて見た。然しとよ女には一向思案がつかなくつた。と言つて子供の容體が心配になつて寝られなかつた。ひそかに起きて子供の翠丸に手を當て、見たが、少しも腫は引いて居なかつた。そこでとよ女は考へた。

「私は平常夫に隠して金をためて居る。それで隠さんならん所の翠丸が腫れてくるのではなからうか。」

と、そこで夫を起して、此の由を懺悔したら、氏は只一言、

「さうや。」

と言つた。氏は薄々妻のその行爲を知つて居たやうでもある。

そこでとよ女は、深くこの事を懺悔して、一寝入りして目が覺めてから、息廣吉氏の翠丸を

見たら、その腫れはすっかり引いて居た。

それより北條氏夫妻は、心を揃へて熱心に信仰する様になつた。時に明治十五年舊六月二十七日、當時北條氏は四十三歳であつた。神様はかくして子供の身上より、この良材をも引き寄せられたのであつた。

四、赤松平四郎氏の入信

兵庫三川口町に東隣する永澤町一丁目の南から二軒目に、赤松平四郎といふ人が住んで居た。ヒンガラ眼(のこぎ)で、別に商賣とてはせず。按摩でもして居たかと云はれてゐる。さう言ふ身分であるから、資産とてはなく、又文字の書けるやうな人でもなかつたが、然しきかぬ氣の一風變つた人であつた。

明治十五年の三月頃と思はれる。氏の母親が腹痛三日に及んで止らなかつた。そこで、ある占師に見て貰つたら、

「家の闕を直したから、金神様が崇つて居る。」

と云つた。

當時三川口町や永澤町方面を、長曾と稱して居た。その同じ長曾在の前述べた谷勝鹿藏氏が難治の眼病を、天理王命と言ふ神様に不思議に助けられたと言ふ噂を聞いたものであらうか。赤松氏は和田崎町の唄こふじ女の許へお助けを頼みに来た。

こふじ女が早速行つて神様の御話を取次ぎ、お願ひをした處、即座にお陰をうけて助けられた。

それから幾何もなくして、又赤松氏は「子供が十日間何も喰べない。」と言つて唄こふじ女を頼みにきた。再度同女は行つてお願ひをなし、又も珍らしいお助けを頂いたのであつた。それから赤松氏は入信したのであつた。

然るに其後又も氏の妻女が産後の病氣から眼を病み、遂に底翳となつた。元來氏は妻との間に子供が澤山出来た。それで所謂まびきを行つた事がある。そこで此度は夫妻共々に深く此の理を懺悔して、三度その妻の眼の難症をも、助けて頂いたのであつた。

かく重ねく不思議な御利益を頂いて、赤松氏夫妻は神様の結構さ有難さが、眞に骨身にしてみても有難く感謝された。それより大いに匂ひ掛けやお助けにと、専心布教宣布に努め、その性格のその如く、一風變つた道をつけるに至つたのであつた。因に當時氏は六十近い人であつたと云ふ。

五、富田傳次郎氏の入僧

富田傳次郎氏は、元播州三木町、藤村家の出である。天保の昔、藤村家の當主善右衛門氏(又片谷佐兵衛)は將に四十に近からんとし、妻じゆん女も亦三十と言ふに、未だ子實がなかつた。逝く年と共に、子なき淋しさがひし／＼と身に迫り、殊に妻じゆん女に於てさうであつた。そこで彼女は、他から子を貰はうとした。時に夫善右衛門氏は曰く、

「世には子供を貰ふと、よくせり子と言ふて實子が生れてくるものである。我家に於ても子を貰つた後で、たとへ實子が生れてきて、必ずその貰ひ子に相續させて、實子は他へ出すだけの決心があるかどうか。その決心がつくまでは、決して子を貰ふてはならぬ。」

と戒められて居たが、じゆん女も「よくそれは覺悟をして居ます。」と言ふので、遂に天保六年四月十八日生れの喜代松といふ子供を、他から貰つて我子として育てられる事となつた。然るに理といふものは恐ろしいもので、天保十一年二月三日、善右衛門氏四十才、じゆん女三十四才にして、初めて實子が生れて來たのであつた。それが今茲に記さんとする後の兵神二代會長となられた富田傳次郎氏其人である。次で翌天保十二年九月十八日、更に一男を擧げられた。それが後の兵神分教會役員且兵庫出張所長となられた平川伊兵衛氏である。

さりながら、藤村善右衛門氏夫妻の最初の誓ひは見事に守られた。まづ末子伊兵衛氏は幼にして兵庫東出町三丁目二十三番邸の魚平事、平川平八氏の養子として遣はされた。

次で嘉永三四年の頃、傳次郎氏も亦弟伊兵衛氏の養家を頼つて、兵庫に出で來つて身を立てんとし、右平川家に於て十一二才の幼少の頃より天秤棒を肩にして、よりもん賣(小さい小魚)といふ、はしたない賤業から、つぶさに辛苦を嘗められたのであつた。然して文久年間、兵庫富屋町三十九番屋敷の菟藪屋(菟藪屋)ばつたり屋事、富田傳兵衛方の養女たき

女(弘化二年四月十一日生)の婿養子として入籍せられたのであつた。

富田家の人となられた後も、氏は毎日車に菟藪を一杯積んで、灘の方面までも卸しに行かれ、當時その界限で評判のゑらい言はれた養家に於て、よくその養子の身分として萬事に忍ばれ、又よくその辛勞に堪えられたのであつた。氏の後年その濃厚にして忍耐強き性格は、實に此の青少年時代からの、忍苦勤勉から齎(もたら)されたものであつた。

やがて明治十年西郷戰爭後、氏の多年の忍苦勤勉は、漸く報(むか)りられて來て、尠(すく)からざる利殖をなされたのであつた。

然るに明治十四年の頃、氏の末子は急にチフテリア(當時梅毒)で死亡され、それがやがて氏の本教入信への導きとなるのであつた。

其頃富田氏方から四五軒濱側の通り筋で、萬山福松と云ふ人が穴子屋をして居た。其父親は萬山伊兵衛と云つて、和田崎町の人で、彼の唄こふじ女の宅から、一軒置いて隣りの人であつた。そこで伊兵衛氏は早くから天理王命様の信心をして居た。

その伊兵衛氏が、よく子息福松氏の宅へ来た。その来る度に、又富田家へも遊びに来て、天理王様の噂をして居た。或日も伊兵衛氏が来て、富田傳次郎氏の妻たき女に向つて、

「天理王さんと云ふ有難い神様を信仰したお蔭で、私は梅風(チフテリア)がよくなつた。」と語つた。その話を聞いたたき女は、

「私の末の子も、その梅風で死にました。そんな有難い神様があるなら、我子を死なさず済んだらうに。」

と、悲しい追憶を重ねられた。その話のあつた矢先き、即ち明治十五年の舊二月に、三川口町に於て、谷勝鹿藏氏が、眼の御利益を頂いたといふので、お講勤めをした。その時たき女は初めて、萬山伊兵衛氏に連れられて、其所へお参りした。歸つて来たたき女は、夫を初め家族の人達に、

「天理王さんと云ふのは踊るのやで。」

と、珍らしげに噂し、而も餘程その踊りに感銘を引かれたと見えて、萬山伊兵衛氏に、特に

その御神樂本を買うて来て貰ひ度いと頼まれたものである。現今富田家に残る大阪天恵組發行(明治十四年五月發行)の、而もその初版「拾貳下り御勤之歌」と云ふのは、實に此の時に求められた御神樂本と思ふのである。かくて富田家は、漸次本教へと導かれたが、未だ信仰する迄には及ばれなかつた。

然るにそれから約二ヶ月後の同年夏のかゝり、即ち舊五月頃であつた。富田傳次郎氏の長男米太郎氏(明治元年三月十八日生當時十五才)が、相當重い胃病となつた。然し幾何もなくして、醫療の力などで回復した。

其頃同家の裏に酒藏があつた。其所へ同町の青年連中が、其の夏中集まつて相撲の稽古をした。米太郎氏も亦行つて、その稽古をした處、病氣上りの身體には、その運動が過激であつたのか、秋立ち初むる同年舊八月初め(新曆九月中旬)俄に胃病が再發し來つて、之を診察した醫師が、

「私一人ではいかん。もう一人醫者に見せてくれ。」

と言ふ程に大層になつた。

そこで母おたき女を始め、内々は大いに心配して、兼ねてありがたいと聞いて居た天理王命様、即ち

「あの神様に頼んだら、」

と言ふので、早速萬山伊兵衛氏にまで頼みに行つた。それから和田崎町の先輩の方々（人名）がお助けに來られて、僅かに三日間のお願ひで不思議に御利益を受けられたのであつた。それより富田傳次郎氏一家は、入信するに至られたのである。

六、山田眞明組の濫觴

尙此時代に、和田崎町の道は、更に神戸區外の郡部にまで傳播の手を擴げて、兵神の道の最初の傍系、後の明石郡山田眞明組、現舞子支教會の濫觴をもなした事に就て、次に記して置かう。

明治十五年の晩春である。兵庫縣明石郡垂水村の内山田村に、北川重吉と云ふ人があつた。家は貧しいので、其頃イカナゴの古春を漁つて、兵庫和田崎町の橋本茂助氏方へ、穴子の餌料

として毎日賣りに來て居た。

然るにどうしたものか、四五日北川氏は賣りに來なかつた。それで橋本氏がわざ／＼山田村まで買ひに行つた。すると北川氏は

「皮膚病？が出て來たので、兵庫へイカナゴ賣りに行けない。」と言ふのであつた。

然るに橋本氏は其頃、唄こぶじ女から道を聞いて、熱心なる天理王の信者であつた。そこで北川氏に神様の御話をしてその信心を勧め、

「どんな病氣でも助かる。わしが拜んでやる。」と云つて、お助けをして歸つてきた。

然し北川氏の病氣は、餘程の難症で、容易に助からなかつた。かくて橋本氏が屢々山田村へ運んで居る間に、更に同村の湯葉屋、佐藤甚藏氏が約一年前から、カク病（胃癌）で臥てゐるのにも匂ひが掛り、更に同氏をもお助けしてゐた。

然るに佐藤氏は旬日にして助かつたが、北川氏は中々助からなかつた。そこで同年舊九月に橋本氏は北川氏を連れて、御地場へ参詣した。時に御教祖が折柄奈良警察署からの召喚により、今しも奈良へお越しにならうとする際であつた。

さり乍ら御教祖は、親しくお會ひ下されて、

「遠い處、御苦勞やつた。病氣は治るさかいに、歸んどり。私がまた拜んで置いてやるで。」と親切に仰せ下さつた。

二人は其の御言葉を頂いて、何よりも嬉しく、喜んで歸り、それから後も北川重吉氏は、橋本氏の指導の許に、自宅で信心して居たが、その中に御教祖の御言葉通りに、その病氣は治つてしまつたのであつた。

これが後の山田眞明組、現舞子支教會の道のついた發端であり、又兵神の道の最初の傍系の起りでもある。

かくの如くにして、和田崎町の道は、郡部にまでもその結講前、既に發展の手を伸べて居た

のであつた。

以上唄小富士女によりて導かれたる最初期の主要なる人々に就て、その入信の事情を略述したが、かくの如くにして和田崎町に發した道の流れは、未だ何等社會の表面に現はれなかつたが、徐々として兵庫の北部に、否その全町に押し擴がつて行つた。

然るに前述した富田傳次郎氏の入信を轉機として、急に結講へと急ぐのである。

第三節 眞明及神明の正閏二講の結成

一、結講の動機

明治十四年舊九月三日、改造後の初期兵庫眞明組は、翌十五年を迎へて益々萎微して行つた。之に對する大阪眞明組にありては、殆んど手の下し様がないとしてか、自然の成行きに放置されて居た様である。かくて同講は約一年の命脈も保ち得ずして潰滅の一路を辿つた。

かゝる同講の頽勢の中にあつて、唄こふじ女に端を發する和田崎町よりの道のみは、不思議

にも前述した様に、それ自らの感激によりて、独自の發展をなし、一步は一步とその流れを大きくしながら、發展と活動を續けて居た。

たとへその歩みは鈍くとも、絶えず其の成長が續けられてあれば、やがて花咲く春にも會ふ。明治十五年の舊八月上旬(新曆九月月中旬)兵庫富屋町の富田傳次郎氏は、長男米太郎氏の胃病の難かしかつたのを、僅か三日の間に不思議に助けられた御禮の故を以て、折柄病氣見舞に來て居られた三木町の藤村家の實母じゆん女を伴つて、初めて御地場へ參詣せられた。やがて取次ぎの先生に導かれて、氏は御教祖に御目に掛られた。その時御教祖は、氏に向つて、

「あんたは、どこからお参りなはつた。」

「私は兵庫から参りました。」

「さよか、兵庫なら遠い處、ようお参りなまつたなあ。あんたは家業は何をなさるな。」

「ハイ、私は蒔蕪屋をして居ります。」

「蒔蕪屋さんなら商賣人やな。商賣人なら高う買うて、安う賣りなはれや。」

と、品物を仕入れる際には、問屋を倒さぬやう、泣かさぬやう。又品物を賣る場合にはお客の得のゆくやう、喜ぶ様。高う買うて安う賣る。その理によつて、自分も亦反りを喰つたりなどして、損する事のない商法の天理をお説き下された。

又、

「神さんの信心はな、神様を、産んで呉れた親とおんなじ様に、思ひなはれや。そしたら、ほんまの信心が出来ますで。」

と、神様を眞實元の親様として、絶対の人格的信頼をさ、ける事が、本教信仰の要義である事をも、いとも平易に説いてお聞かせ下されたのであつた。

尙、辭するに當りては、尊いお息の紙とおりきもつをも下され、氏は溢れる悦びに満たされて歸つて來たのであつた。

善き理から、善き理が生れ、喜びから、喜びが生れる。富田氏は、歸來右のお息の紙と、お

りきもつを生母、藤村じゆん女に頂かせて、播州三木町へ歸されたる處、計らずもその二品から珍らしい靈救を受ける人が相次ぎ、遂に同三木町を根源として、播州の野にお道の大發展を來たしたのであつた。

又、此の氏の御地場參詣が、和田崎町よりの信徒の一集團にも、講の結成への轉機を與へる動因となつたのであつた。

即ち氏の歸來と入れ代つて、和田崎町の先輩片岡吉五郎氏が、御地場へ參詣せられた處、詰合の高井翁吉先生より、

『兵庫もゑい信者が出來たから、講を組んだらどうや。』
と、お話があつた。

それは多分前日參詣した富田傳次郎氏の印象が、もう結講への準備の整ふてゐるかの様な感じを、高井先生等に與へたのであらう。

片岡氏が歸つて來て、此の高井先生の進言を傳へてから、和田崎町よりの道は、急速に結講

へと、其議を進めて行つた。

二、結 講 の 波 瀾

元來彼の初期兵庫眞明組の廢墟にも等しき中から、咲き出でた和田崎町よりの道は、その最初のかゝりを唄こふじ女の眞實と奇蹟から發して居る。それで「講元とは、かゝりもと、云ふ。」と云ふ神様のお言葉からすれば、この新たに結ばれんとする講社の講元は、當然唄こふじ女の夫、唄徳松氏が成るべきであつた。

然るに唄徳松氏は、自分は文盲でその器でない。又家は貧しく其日の渡世にさへ追はれてゐる身分では、其勤めが出來ない。又自分の家は狭くて多くの人々に集まつて貰ふ事が出來ない。又和田崎町はあまりに兵庫の南に偏し過ぎてゐる。それでは講社の集まりにも不便である等の理由を擧げて、固辭して受けられなかつた。

そこで當時講社の中央に位し、その家も廣く、生活にも左程の屈託のない、而ら實際の廣い等と云ふ諸條件を具備した北逆瀬川町の端田久吉氏に、人々は囑望せざるを得なかつた。そこ

で人々は、

「端田さんに講元になつて貰ふのが、何より便利で良からう。端田はん講元になりんか。」とすゝめる。遂に端田氏は衆の懇請を否む譯にもゆかずして、推されて講元となつたのであつた。

然るに何處でもよくある事で、中に之れに對して不満を抱く人々があつた。それは彼の兵庫の長會の本陣跡に居住する赤松平四郎氏及びその一派であつた。

當時赤松氏は講社の内の最年長者で、もう六十にも近いと言はれた人であつた。然し年はとつても、その覇氣は斷じて人に譲らなかつた。且つ前述した様に、三度のお手入れから、熱心に信仰して、相當の匂ひがけやお助けをもち、その助けた人も二三に止まらなかつたらしい。そこで「元々助けて貰つた唄氏が講元となるならば、喜んで其許に馳せ参するが、同輩の端田久吉氏が、講社の中央に位するなどの便宜上の理由で講元となるのでは、自分は其許に参する事は出来ない。自分は獨立して別に講を結ぶ」と云つて遂に一同の結盟から脱して、自ら講

元となつて、その一派を以て自立するに至つたのであつた。

かくの如くにして、結講に際して、はしなくも和田崎町よりの道は端田方と、赤松方との正閥二系に分れたのであつた。

三、正閥二講の結成

かくて出来たる端田方の正講は、之を「眞明講社兵庫一號」と自ら稱した。又赤松方の閥講は「神明講社第二組」と自ら稱した。端田方の兵庫一號とは、赤松方に對しての稱呼で、同様に赤松方の第二組とは、端田方に對する言ひ方であつた。

【正系の結講】正系である端田方が講を組んだのは、明治十五年舊八月十五日新曆九月二十六日の初秋月明の夜であつた。それは前日和田崎町の先輩鹽崎新助氏が、富田傳次郎氏息米太郎氏を伴ふて、御地場へ参詣し、その御地場から歸つて來られた日であつたといふ。その最初の講員は次の十八氏であつた。(巻頭の唐櫃の寫眞参照)

講 元 端 田 久 吉 兵 庫 北 逆 瀬 川 町

講頭	北野熊次郎	兵庫和田崎町
同	富田傳次郎	兵庫富屋町
周旋方	北條仁兵衛	兵庫南逆瀬川町
眞明講社	萬山福松	兵庫富屋町
同	川口晋次郎	兵庫東出町
同	原田龜次郎	兵庫
同	橋本茂祐	兵庫和田崎町
同	橋本(吉原)庄吉	兵庫和田崎町
同	本田せい	兵庫和田崎町
同	荒川福松	兵庫
同	片岡吉五郎	兵庫和田崎町
同	萬山伊兵衛	兵庫和田崎町

同	唄 徳松	兵庫和田崎町
同	鹽崎新祐	兵庫和田崎町
同	鹽谷政平	兵庫和田崎町
同	樽谷清八	兵庫
同	佐伯甚太郎	兵庫東出町

次に講として太鼓・拍子木、水玉、(大教會) 燈灯、赤衣の箱、(大教會) 大唐櫃(大教會) 等を設備したが、その費用は富田傳次郎氏が金十五圓を寄進して大半まかなはれたと云ふ事である。かくて結講の直後、講のめどうとして、御教祖様の御赤衣を頂戴せんものと、講元以下講員多數御地場へ参詣した。其節、立講を記念して、長楕圓形の眞鍮金具附の美しい大燈灯を奉獻したが、翌舊九月十六日、奈良警察署よりの警官のために、尙其他の講社からも奉納してゐた多數の燈灯と共に、取拂はれてしまつた。

然し其際御教祖様から頂いた御赤衣(眞鍮箱の)は、用意された右の檜の白木の箱に收められて

歸來、端田講元宅の二階の祭壇に祭られたのであつた。さうして其後はいざお助けだと言へばその御赤衣を箱に入れたまゝ、黄金の布呂敷に包み、端田講元自ら之を捧持して、神戸區内ならば何處までも持つて行かれ、それを以て病人の身體を三度撫でるが様に振つて願はれた。するとどんな難病人でも、忽ち願ひ通りの珍らしい御利益があつたといふ事である。以後兵神分教會の創立前まで、兵庫神戸間に於て、どれだけ多数の人々が、此の御赤衣によつて親しく助けられて居る事か。その御赤衣は今や當大教會の莊嚴なる御教祖殿に、御教祖様の御神體として齋き祀られてあるが、此の昔の有難い事實を思ふと、一しほ尊く感ぜられるのである。尙其頃御赤衣の收められた箱には、その裏に「明治十五午歳舊八月眞明講社兵庫一號」と記されて、我兵神最古の記録として、今に残されてあるのである。又前記の大唐櫃の内側にも、上記の講員名が列記されて、これ亦今に尊き記念として當大教會に残されてあるのである。

【閩系の結講】 次ぎに、閩系である赤松方の結講月日は、確かな處がわからないが、多分同月内稍おくれで結ばれたものと思はれる。且又當時の講員名も不明であるが、然し講元は赤松

平四郎氏で、同じく同講社のめどうとして、御教祖様の御赤衣を頂かれた。(此赤衣は、唐地の襦袢で袖口が絞つてある。) 同講の二代目の講元たりし阪倉家には今も尙、其御赤衣が、それを收めた檜の白木の箱と共に、蓋の表には「御守」、蓋の裏面には「神明講社第二組講仲」と記されて、残されてあるのである。かくの如くにして、明治十五年舊八月を以て、和田崎町より發した道は、眞明講社兵庫一號と、神明講社第二組との正閩二講に結ばれて行つたのであつた。それと共に、それ迄の道の中心であつた唄こぶじ女より、その中心は正系の講元端田久吉氏、閩系の講元赤松平四郎の兩氏にと移つて行つたのであつた。

第四節 正閩二講の消長 その一

一、神明派の赤松講元の奮闘

和田崎町よりの道は、結講に際してはからずも眞明、神明の正閩二講に分れ、それと共に道の中心も亦唄氏から端田、赤松兩講元に移つて行つたが、さてその兩講元に於ては、さきの上

田講元の事情にかんがみて、「講元は理の臺である。」と言ふ自覺が相當深くなされた様である。さうして端田、赤松兩氏とも、何れに勝り劣りのない責任ある活動がなされた。その點に於ては、初期の兵庫眞明組の上田講元の、遠く及ばざる所であつた。殊に閭系である神明派の講元に於ては、所謂講員が、眞明派に對して新らしく少なかつただけ、赤松講元の奮闘は一通りでなかつたらしい。

即ち赤松氏は其位置が端田方の東北を扼する地位にあつたので、まづ本據の長曾（現永澤町及三川口町方面）を中心として、門口町、宮内町方面に充實した教線を張つた。それが又端田方の東方進出を封じた形となつて居た。

その内の重なる新講社は、宮内町の阪倉佐助氏と、門口町の木谷嘉右衛門氏とであつた。阪倉佐助氏は、もと河内國古市郡大黒の人で、若き頃兵庫に來り、攝津國八部郡小部村の川

上儀三郎氏の姉とみ女を娶り、其頃兵庫宮内町五十二番邸、七宮神社の表筋の家屋敷及び川崎町に納屋を買収して俵屋をしてゐられた。夫妻の間に三男一女を産まれたのであるが、後悉く

その子供達に先だ、れたといふ、いと不幸せな人であつたから、多分その子供の病氣から入信せられたものと思はれる。確かな事情は不明であるが、明治十五年末頃の入信らしい。すると氏は天保五年正月十五日生れであるから、當時四十九歳であつた。赤松方第一の人物で、後赤松氏の後を受けて、同講二代目の講元となつた人である。

次に木谷嘉右衛門氏（弘化三年四月十五日生）は、當時門口町二百二十六番邸に住んで居て、蒸芋賣りをして歩き廻つて居たと言ふので、身分は良い方ではなかつた。明治十六年妻はる女の産後右の手の自由が利かなくなつたのを助けて貰つて入信したので、當時三十八歳であつた。

其他に門口町の眞鍋卯吉氏も亦、この赤松方の有力なる講社であつた。

かく赤松方は、その本據を固めると共に、一方東北方の神戸方面へ、大いに布教の手を伸べた様である。

明治十五年末と云へば、まだ端田方は、神戸方面へ一指も染める事の出来なかつた際、後日端田方の講社となつたが、當時まだ本教を知らなかつた神戸花隈町の松田常藏氏妻くに女が、

常住頭痛を病んで居たのを、同町の國本源助氏妻ゆき女(前名森木あい)が、訪ねてきて、「天輪さんを信心せんか。あらたかな神様やで。神様の前に鏡があつて、その前の鏡に心が映るのやで。さいせんいらんのや。いづと参らうなく。」と誘ひ寄り、遂に翌十六年舊正月元日、長曾の本陣跡の赤松方にお講勤めがあると云ふて、連れ出して参拜に行つた事があつた。

又神戸市の北方奥平野から、天王谷を越えて美濃郡有馬へ通ずる有馬道がある。それを行く事約二里にして、道の西側の部落——當時八部郡小部村の内西小部村に、南川多三郎といふ人があつた。その妻こそせん女が、兩眼共マルトが出来て悪かつた。そのために京都の十二坊の醫者にかゝり、三度京都へ通つたが、少しも良くならなかつた。明治十五年の暮であつた。その三度目に行つての歸り道、天王谷の高座の茶屋で休んで居たら、そこで、

「兵庫の長曾に平四郎と云つて、どんな病氣でも助ける人がある。」と聞いて、南川氏は後、平四郎氏を訪ねて、爾後平四郎の導きで入信し、御地場へも連れて参

つて貰つて、遂に御利益を頂いたのであつた。その平四郎とは、とりもなほさず、赤松平四郎氏の事である。【小部講社の發端】

又同じ明治十五年の暮、武庫郡鳴尾村鳴尾に岩佐伊兵衛と云ふ人があつた。その母とら女が病氣で百方手を盡されたが、良くならなかつた。時に同村の丹波屋定吉といふ人が、兵庫へ來てゐたが、此人から初めて天理王命といふ不思議な神様がある事を聞いて兵庫からお助けに來て貰つて助けて頂いた事があつた。それも亦赤松方の導きであつたのである。【鳴尾講社の發端】

右の三つの例が示すやうに、明治十五年末既に赤松方は、神戸地方に天理王命の名を傳へ、お助け人としての赤松平四郎氏の名聲は、神戸區は勿論、遠く市外の小部村や鳴尾村にまで及ぶの勢であつたのである。

二、眞明派の活動

然るに之に對する端田方は、翌明治十六年の舊二月頃迄、主として兵庫方面の布教に限られ

一步も神戸方面に、其教線は及ばなかつた。それは全く赤松方に、その東北を扼せられた形であつた。

然し乍ら其間兵庫方面に約三十戸餘の新信者を得て、講社總數は約五十戸程になつて居た。今その新加入者の内、有力なる人々を擧げてみると、中村勝次郎氏、藤崎タケ女、麻川與市氏の諸氏である。

中村勝次郎氏(天保七年六月廿一日生、當時四十七歳)は元山城國田邊在の出生で、當時兵庫切戸町(能福寺前東へ入る突當りの南角の家此の附近を通稱田淵と呼ぶ)で漬物屋を営んでゐた。主としてラツキヨの卸賣をなして、「ラツキヨ屋の勝たん」で通つてゐた。

明治十五年舊十月十一日妻うめ女のヒゼンから入信したもので、別に大した病氣からの入信ではなかつたが、大いに助一條につくした人であつた。

次に藤崎タケ女は、播州加古郡二見村在(?)の出身で、二男乙松氏が十二歳位の時、夫與三郎氏(明治三十八年七月十三日出、直し、享年六十五六歳位)と共に兵庫へ一家族引越して來て、最初切戸町(新地石橋、能福

寺の方へ寄る四五軒目位)に居を構えて居た。

同女はほつてりと肥えた體格で、男まさりの性格であり、一家にありても、何かにつけてその采配を振つて居たと云はれてゐる。その入信の動機は不明であるが、前記中村氏と同時頃の入信であつたらしく、當時は四十歳位の働き盛りであつたといふ事である。

入信後のタケ女は兵庫尻池方面を主として、神戸方面へも所々方々へとお助けに廻られたもので、明治十七年舊十二月十七日、播州加古郡母里村ノ内蛸草新村、後の加古分教會長松尾唯之助氏宅へも、初めて中村勝次郎氏と共に助けに行つた人であつて、(第三章第五節第一項にて詳述)かの唄小富士、本田せい兩女の後の、兵庫側での御助けにつとめた女の第一人者であつた。

然るに明治十九年舊六月、阪倉佐助氏の三男伊之助氏のコレラのお助けに行き、不幸自らも感染して同十九年七月二十四日、兵神の道の未だ表にあらはれない草創の間に、死亡せられたのは誠に惜しい限りであつた。

次に麻川與市氏(嘉永四年生、人)は、當時兵庫西出町で、玉子や干物の商賣をして居た芋源と呼ぶ麻川源助氏の養女とく女の齋養子に入つた人で明治十五年末頃、同氏の脚氣病から、北條仁兵衛氏の匂ひ掛けて入信したのであつた。

氏は元京都市下加茂村の社家筋神川家の生れであつたので、神道の諸式に通じ且文筆にも長じて居た。それで氏の入信後は大いに同講社内に重寶がられ、爾後端田講元の秘書役となつて大いに劃策する處尠くなかつた。兵庫方出身隨一の教養ある良材であつたのに、明治二十一年十一月一日舊九月二十八日享年三十八歳で氏も亦早折せられたのは悼惜の至りであつた。以上叙する處、之を要するに、赤松方の目覺ましい活躍に對して、結講直後の端田方は隠忍して、徐ろに其の充實したる力を養つて居たと云ふべきであつた。

第五節 正閏兩講の消長 その二

一、神明派赤松講元の失脚

然るに明治十六年を迎へると共に、前記の形勢は俄然として變つて來た。まづ赤松方の形勢は日に悪くなつて來たのであつた。

それは何であるかと言ふに、唄小富士女の談として、

「赤松氏が、後日高慢からして、産屋の御供を出したから……云々。」

と言はれて居るが、一時そのどんな病氣でも助ける平四郎さんとして、早くから神戸全市に贏ち得たる氏の名聲が、遂に氏をしてあやまらしめたものではなからうか。

それには又次の様な説も傳えられて居る。赤松氏はその結講前後からして、よく大和のお地場へ參詣して、御教祖にお目に掛けて居た。其の頃の御教祖は、先きに富田傳次部氏の御地場參詣の記事にも記した様に、參詣して來る信者達に、お息の紙や、おりきもつ(巻粉に太白を)を下されてゐた。人々はそれを持ち歸つて、病人があると、それを頂かせた。するとどんな大病人でも不思議に助かつて行つた。思ふに御教祖の長年の御苦勞の理、お徳の理が、その物に働いて斯様な珍らしい御利益となつたものであらう。赤松氏も亦當時の信者の一人として、地地場に

屢々參詣する毎に、その御息の紙や、おりきもつを頂いて歸つて居た。さうしてそれによつて多くの人々の難病を助かつて貰つて居たのであつた。赤松氏が早く其結講當初に、どんな病氣でもなほす人として、全神戸區から評判されたのも、畢竟その御教祖の御徳の理によつてであつたのである。

然るにさうした事に、充分の理解のなかつた彼れ赤松氏は、助かつた人々の神様への御禮の金品を、屢々御地場へお届けして居たが、何日も御教祖が其の氏の勞をねぎらはれて、「これは當座の路銀やで。」

と言つて下さる分量が、その氏の持參する金品の多寡によらず、いつも同じであつた處から、ふと不満を感じ出した赤松氏は、其後はまづ持參するに先だつて、我が欲するだけを着服し、其餘をお届けする様になつた。然るにそれより後は、先きの日の珍らしい靈驗は漸次薄らぎ初めて、やがてそのお息の紙や、おりきもつが、その働きをなさぬ様になつて行つた。そのため、自ら恥かしいといふ自責の念で、お地場へ歸つて御教祖にお眼に掛れぬ様になつて來た。

然しながら氏が一度得たる評判は、尙多數の人々をして、そのおりきもつなどを頂きに來らしめた。その一方には氏の豊かならぬ家計の逼迫の事情もあつて、遂に自らおりきもつ等をこしらへて配らねばならぬ様になつた。その結果が、全く靈驗その跡を斷つて、反つて同志の惡評を買ひ、にちもさつちも、行かなくなつて、前記唄小富士女の語の如く「本部へ願ひ出て、赤衣を取拂つて、阪倉（佐助）氏へ納付せしめ、赤松氏はそれつきり信仰を止めてしまつた。」と言ふ結末となつたのであつた。

明治十六年の九月であつた。赤松方の講社であつた、八部郡小部村の谷口源左門衛氏等が、御地場へ歸り、御教祖様から御赤衣の前掛けと、日月の印入りの陶器の御盃とを頂戴した。その際、同氏等は「小部村で講を組みたい。」と直接お地場へ願ひ出た處、「手續きしてこい。」との事で、一先づ歸村し、此由を兵庫へ願ひ出た。然るに兵庫で有耶無耶となつてしまつて、そのために其後同氏等の折角の信仰さへも、中斷してしまつたのであつた。思ふに此の時は、赤松平四郎氏失脚の折柄に際し、かく要領を得ずに終つたものであらうと考へられる。

かくて赤松氏は、自らを知らざる欲と高慢のために、明治十五年舊八月立講してから、約一年半程にして失脚し、後事を同講の飯倉佐助氏に托するの止むなきに至つたのであつた。それが同講々勢に、どれだけの打撃を與へた事であらうか。折角郡部にまでも伸びた同系の小部、鳴尾の兩講社が、以後中斷するに至つた事から、推しても知る事が出来るであらう。

二、端田方眞明講社の活躍

(1) 神戸部への進出

然るに之に反して端田方は、その講勢益々充實し、新に竹村長兵衛(兵庫 常時四十三歳)、吉川卯兵衛(兵庫相生町 明治十六年 常時三十九歳)等の良材を得たるのみならず、同十六年舊二月(新暦三月)頃より、赤松方の東北への封鎖を破つて、決河の勢ひで神戸部地方へ進出し、一舉にその教線を殆んど全區に擴けてしまつた。然してそれは二方面から、即一は海岸通りから、一は山手通りからなされたのであつた。

【海岸通りよりの神戸部進出】 その海岸通りより神戸部に教線を押し擴けて行つた第一人者

は、彼の講頭の一人富田傳次郎氏であつた。

其頃も富田氏は、毎日灘方面まで、元町通りを車を引いて菟藪の卸賣りに行つて居られたが、明治十六年舊三月の頃であつた。元町二丁目出口と稱する處に、同じ菟藪屋仲間、富田氏と知り合ひの平野治助と云ふ人が、氏から匂ひが掛つて入信したのを發端として、すぐ引續いてその平野氏から、同町の某氏に匂ひが掛り、それから二丁目、更に東方の三宮町二丁目、船乗りをしてゐた西村三造と云ふ人の妻おなか女が、夫の梅毒から長らくの血塊で困りぬいて居たのに匂ひが掛り、彼女はすぐに助けられてその一家が入信した。

其西村三造氏より同年舊四月下旬新五月下旬頃、三宮町三丁目五十番屋敷の當時空瓶問屋をして居られた、後の兵神初代會長清水與之助氏に、其頃同氏方滞在中の氏の兄、清水伊三郎氏の疝氣から匂ひが掛り、同氏の入信となつたのであつた。(第四章に詳述すべし)

次で同年舊七月八日、三宮町二丁目の吉田孝女(小山彌子 吉田氏妻)も亦同人の喘息より、同じく同家のすぐ西隣の前記西村三造氏より匂ひが掛り、助けられて入信。それより更に翌明治十七年

二月十五日(舊正月十九日)右吉田家より當時元町三丁目六十二番邸の増野正兵衛氏(嘉永二年元月一日生)の内室糸女の底醫に匂ひが掛つて、助けられて同氏の入信となつたのであつた。其他外人居留地方面にも、尙それからそれへと諸氏が入信されて行つたのであつた。

【山手通りよりの神戸部進出】以上が海岸通り方面よりの教線の進出状態の大要であるが更に一方の山手方面の進出を見るに、此の方面は今一つ明確に分らないが、まづ海岸通りと同様に、明治十六年の舊二月頃(確認)と思はれるが、當時神戸熊内村小川谷、即ち再度山の麓の谷合で、水車營業をしてゐた末村喜助氏(當時三十七歳)の妻きぬ女(當時三十七歳)が眼を病んで、殆んど失明同様になつて居た。處が誰からか不明であるが、兵庫から匂ひが掛り、きぬ女は肩にすがつてお地場参りをして、不思議に助けられて入信したのを第一として、續いて翌舊三月頃(確認)神戸北野町の上田與惣兵衛氏及山内市兵衛氏(同年舊三月十日入信)等が入信し、續いて同舊四月頃(確認)當時葺合村熊内の中西太助氏が、前記末村喜助氏と友人である處から、同氏の匂ひ掛けで入信し、次で翌舊五月三日同村の松本忠七、同國松父子が、國松氏の妻なを女の産後足の

立たなかつたのを、右中西太助氏から匂ひが掛つてお助けを受けて入信。更に同年舊十二月、神戸花隈町の中井のぶ女(天保元年七月八日生、當時五十四歳)が持病の瘰癧を、前記末村喜助氏妻きぬ女の匂ひ掛けで入信され、同時に同居中の養子中井宗七氏(天保十四年八月四日生、當時四十一歳)も亦入信せられた。右は主要なる人々のみを掲げたが、尙其他にもそれからそれへと、同地方に入信者があつたのである。

(ロ) 地方郡部への進出

彼様にして明治十六年舊歲末頃迄に、當時の神戸地方への端田方の躍進は、目覚ましいものがあつたが、更に他の一方郡部への進出にも見るべきものがあつた。

【明石郡山田眞明組の結講】端田方眞明講社の結講前から伸びて居た、明石郡垂水村ノ内山田村では、明治十五年舊十二月十五日、郡部に於ける支系として、最先きに山田眞明組といふ講社を組んだ。講元は佐藤甚藏氏であつた。これが現舞子支教會の前身である。

【美養郡三木眞明講社の濫觴】次ぎには、明治十五年舊八月、兵庫富屋町の富田傳次郎氏一家の入信より、同氏の出里である美養郡三木町の内福井町藤村喜代松氏(天保六年四月十八日生、當時四十八歳)が、

その養母じゆん女(文化四年三月十日)と共に、夙に入信されて居たが、唯神様の御札を祭つてゐるといふ程度の信心で、眞の積極的な信仰に、まだ至られて居なかつた。

然るに翌明治十六年末、藤村氏の三男、林之助(明治十二年十月)が竹馬に乗つて居て、倒れて足が立たん様になり、夜晝泣きつめた。近所の人達もその聲を聞いて、可愛相にと噂した位であつたが、色々と手を盡してもよくならなかつた。その時前年富田傳次郎氏から聞いて居た神様即天理王命様の事を、本當に考へ出して、藤村夫妻は、

「林之助が足を傷めて難儀しとるのやから、先年聞いた有難い神様に助けて貰ひ度い。」と、手紙を以て富田氏に頼んでやられたのであつた。

そこで同十六年五月に入信されてゐた清水與之助氏と、藤村氏の義弟平川伊兵衛氏の兩氏が藤村家へ出張されて、夜に一座宛十二下りのてをどりを上げて、三日三夜の御願ひを爲し下された處、忽ちに痛みは治り、歩きかける様になつたといふ、見事な御守護を頂いたのであつた。

それより藤村氏夫妻は、母じゆん女と共に、深く心肝に銘じ、積極的に大いにお助けに努められる様になつたのであつた。三木眞明講の驚異すべき發展は、これより初まつたのであつた。

【加古郡二子眞明講社の濫觴】 次ぎには、明治十六年舊六月、加古郡阿閉村ノ内二子村の百姓 兼米穀仲買商をしてゐた小南卯助氏(文化四年十二月二十六)が、當時三歳(?)になる二男種吉が、氣狂ひになつて、譯の分らん事を云ひ出して、小南夫妻を困らしてゐたのを、同氏妻まさの伯父で、當時兵庫の端田方の講社であつた西村重兵衛氏から匂ひ掛けられ、端田講元の運びを受けて助けられ、同月十日入信した。これが後の二子眞明講の發端をなしたものであるが未だ大いに發展せしむるまでの信仰が無かつた。

處が、同年舊十一月一日、同村野添村の藤原丑松氏(天保十二年八月二日)が、妻りよ女(弘化元年十一月二十一日)の兩三年前からの血の道から、妙見様を熱心したる處、反つて逆上し、附き物でもしてゐる様に、變な事ばかり云ふ様になつて、大變困つてゐた處、同村の梅澤良助氏の匂ひ掛けに

より、同女の兄佐伯政治郎氏に勧められて、右梅澤氏のお助けを受けた處、忽ち一夜の内に御利益を頂いた。

そこで右藤原丑松氏は、直に入信し、深くその靈驗に感激してゐたが、更に翌年正月、兵庫の端田講元宅に參詣して、その指導を受くるに及び、

「この天理王命様ほど、結構な神様はない。これは、どうしても、生涯未代忘れるに、忘れられぬものである。」

と更に深く信心の心を發して、報恩の道に努め出したので、小南氏に端を發する同地の講社は漸次發展して、遂に現眞加支教會の基を爲したのであつた。

x x x x x

彼様にして端田方は市部に於ても、將た郡部に於ても、着々として其教線を開拓して行つた。然して赤松方の、講元独自の奮闘の觀あるに比して、端田方は、さすがに和田崎町よりの道以來の訓練の深みがあつたか、講元以下講員相一致して活躍したので、時到来や、如上の如

く自づと充實した目覺ましい成績振りを、僅かに組講以來一年有半にして收めたのであつた。

第六節 正閏兩講の刷新

一、端田方眞明講社の大刷新

【講社役員の編成換へ】和田崎町よりの道は、明治十五年舊八月その結講するに當つて、はしなくも端田方、赤松方の二講に分れたが、その後初めの程は、赤松方の異常なる名聲と共に、その大發展とならんとしたが、中頃より俄然として、その形勢は逆轉し、赤松平四郎氏は、後圖を阪倉佐助氏に托して失脚の止むなきに至り、之に反して、端田方は旭日昇天の勢で、神戸全區及縣下明石、美嚢、加古の各郡部にまでも、その驥足を伸ばし初めたのであつた。然して今や一年有半、その教線の擴大と講員の増加は、必然的に端田方の内容の一新を爲さねばならぬ様になつたのであつた。

それはやがて、明治十七年の舊正月（新曆二月）を迎へると共になされた。その内容は、同年舊二

月に出来たと思はれる銅地に錫の鍍金された大水玉の周圍に、次の如く列記されてある。
(列記役付姓名は刻記順序、住所は刻されてる
 ないが便宜のため茲に記せり巻裏の裏表参照)

まづ講名として「天輪王命眞明講」と記されてある。次にその講員を示すと

講元	端田久吉	兵庫北逆瀬川町
後見	富田傳次郎	兵庫富屋町
同	北野熊次郎	兵庫和田崎町
同	鹽崎新助	兵庫和田崎町
周旋方	北條仁兵衛	兵庫南逆瀬川町
同	橋本茂助	兵庫和田崎町
同	吉川嘉助	兵庫相生町
同	麻川與市	兵庫西出町
同	清水與之助	神戸三宮町

同	中村勝次郎	兵庫切戸町
同	片岡吉五郎	兵庫和田崎町
同	竹村長兵衛	兵庫切戸町
同	唄徳松	兵庫和田崎町
同	本田太兵衛	兵庫和田崎町
同	小山庄吉	兵庫和田崎町(吉原庄吉氏前名)
同	萬山福松	兵庫富屋町
同	吉田孝	神戸三宮町
同	平川伊兵衛	兵庫東出町
同	上田與惣兵衛	神戸北野町
同	吉川卯兵衛	兵庫相生町
同	平野政治郎	兵庫

同 川口晋治郎 兵庫東出町
同 高嶋長之助 神戸

其他平講社 増田儀三郎氏以下計八十一名

その平講員の中に、末尾に近く増野正兵衛氏の名も記されてある。

而してこの講員八十一名中、結講當時の講員は僅に三名（佐伯甚太郎、鹽谷政平、高山伊兵衛）で、他の七十八名は悉く新講員である。周旋方十九名中、新人大多数で、殊に神戸側より清水與之助氏を筆頭に、吉田孝（吉田榮助）女、上田與惣兵衛氏、高嶋長之助氏等の加はつてゐるのが眼に付く。又富田、北野、鹽崎の三氏は講の元老として、増田講元の次に位し、全講員百四名に増加して居る事は、何としても盛観である。

尙傳へらるゝ所によれば、講員は續々として増加し、お助けがせはしく、一つの御赤衣だけでは間に合はぬといふので、此時同形の繪の白木の箱を今一個作り、その蓋の表には「御神守」同箱の裏には「明治十五壬午歲舊八月眞明講社兵庫一號」と同じ様に書かれて、これに「御

幣」を収めて、二つが、りで以後お助けに運ばれたといふ。然して其箱は、さきの大水玉と共に、此の際の改造を物語るものとして、今に當大教會に残されてあるのである。

又此の時、神戸三宮組の清水與之助氏や吉田孝女、西村三造氏外參名計六名の名を書き添へて、日月の印し入りの赤の縮緬の幕が、金箔付きの房と共に奉納せられてゐる。此幕を吉田蝶女（吉田榮助氏）が縫ふて居た際に、増野糸女が尋ねて来て、初めて増野家に匂ひが掛り、遂に増野正兵衛氏が入信するに至られたと言ふ挿話を持つもので、これ亦當大教會に今に残されてあるのである。

【端田方眞明講社規則の創定】かく端田方の天輪王命眞明講が、内容の大刷新をはかつて、幾何もなき同年三月二十四日（舊二月二十七日）より、御地場に於ては、又も御教祖は鴻田忠三郎氏と共に、奈良監獄に收監され給ふたが、翌四月上旬御歸邸しましてより、神様の御指圖「細い道、苗代道をつけよ」との御言葉あり、次で大阪明心組講元梅谷四郎兵衛氏によりて、同年五月（舊四月）大阪南區順慶町一丁目九番地に於て「心學道話講究所、天輪王社」といふ

心學道話を標榜する本教教會が設立された。それが直に一新後の我が端田方講社にも影響した
ものか、同月(新五月 舊四月)端田方の講社は、更に次の如き講社規則を初めて作つたのであつた。(卷
頭の寫眞参照)

天輪王眞明講社規則

第一條 一、天地人間世界萬物の成立を悟り、神恩の厚き須臾も忘却する最も不能。故に
是に眞明講社を設立し、遍く敬神々教の道を尊らとし、就中我等兄弟親愛懇和協力の本
意を不失を以て本講の趣意とす。依而同盟講社中常に眞明信心を惰らざるを肝要とすべ
き事。

第二條 一、社中互に懇情誠實を篤し、假にも諸人に對し、詐欺の行ひ、且虚言を稱はず。
品行方正にしてよく其身を慎しむ、只管深切の情をつくし、常に戮力の道を忘れず、親
交すべきは勿論、兇暴の舉動決而不相成、神教の道に相背ざる事。

第三條 一、大和御本社より諸通達の件々、講社の輩ら勸而遵奉すべき事。

第四條 一、本講社中講長一名を置き、講務諸般を總理し、其他金錢の會計出納の事を司
掌し、並に講社中の進退をも決行すべき事。

第五條 一、講社取締一名を置き、講長不在の時は代理す。並に講社諸般の心得方を常に
監査し、若不法の輩ある時は、逐一講長周旋方等の諸員に通知協議し、或は直ちに説諭
を加へ、若くは御本社へ通告等の事をも爲す可事。

第六條 一、周旋方拾貳名乃至拾五名を置き、講務講長等に同じ守らし、周旋の事盡し、
部下の信心動作監督し、若し放蕩淫逸心得違の輩あらば、百方説諭に従事し、尙變心せ
ざれば、審密講長等に協議し、違則者處分の事をも可爲す事。

第七條 一、御本社より使節並に従隨者來講之節者、講長等の家宅に詔講し、又は宿泊を
與ふ事も有べし。説話講議等ある時は、無遺漏講社中一般に通報し、一同迅速來會し、
聽承席に於ては雜話雜談を禁じて神教聽、誤解せざる様銘々注意すべき事。

第八條 一、使節費來講社並に會費御本社へ献送物、定規臨時共一切日の寄進より仕拂べ

く、其他別段集金等爲すべき時、協議の上施行すべき事。

第九條 一、講社中兼而通報者一名を置、時々相當の雇賃を出し、諸般通報の便役を爲さしむべき事。

第十條 一、講社勤は壹ヶ月乃至貳ヶ月内に不必一度づ、各自宅に置いて施行すべく、其節神前供物之外、參集者へ食物等の類一切與る事禁す。但シ家屋間狹ニ而不都合なる事は講長以下二三名を招じ施行するも防なし。

第十一條 一、本講豫備金として各身壹ヶ月金 鑄宛を出し、是を御本社或は講長等の手元に預置事。

第十二條 一、講社中非常の災害に罹る者あらば、臨時熟議の上、相當の救助料を惠與す事。

第十三條 一、講社相互近火の節は、各自迅速駆ケ付、消防諸般深切に助力すべき事。

第十四條 一、若講社内に救取者有時は、講長等を不論總而野葬に出立すべき事。但其際茶菓子及び膳部等決而請間數事。

第十五條 一、救取者大小人を不論、金を香花料として送與すべき事。

第十六條 一、前條の方より手傳を乞ふ時は、講中幾名にても出頭すべし。最謝金等は不申及、總而第十七條但シ書之通可心得事。但シ第十七條之場合に於ては、該家に行、萬事叮嚀に手傳べき事。

第十七條 一、連名帳會計帳等を製し置、萬事明細に書記し、講社中何人に不限披見を乞ふ時は、無故障見せしむ可事。

第十八條 一、諸帳簿並金錢等總而講長の家宅に備ひ置可事。

第十九條 一、講社勤等の往復中、兒童にかゝわらず、互に不作法の行ひ嚴禁の事。

第二十條 一、講社同盟の規則を犯す者は、犯後犯を不論除講すべき事。
右之條々平素互に賢く可相守者也

明治拾七年五月

(以上原文の儘)

今此の規則を見るに、第三條大和御本社より云々、第七條御本社より使節云々、第八條……

本社献送云々等に於て、御本社と稱する所、天輪王社の影響の様には思はれる。

又その講名が天輪王眞明講社となつてゐるのも、その事を豫想せしむる。

其他日の寄進、或は講社勤等の本教獨特の言葉、又救取者といふ文字によりて死者を意味して居る事、及び講内に講長、取締、周旋方、通報者等の特種任務者を定めて居る事等に注意して置くべきである。この内取締制度などは、後、最初の天理教會規約中にまで取入れられたものである。

此の規則の制定に當つては、麻川與市氏が重に立案し、清水與之助氏などが、可成助言せられて出来たものと考へられる。それほどこの兩氏は、當時周旋中の教養ある人であつた。

又本規則は端田方眞明講社獨創のもので、決して他の模寫ではない。然して本規則によりて再度役員の改造が行はれたか、何うかは不明である。

二、神明派の追隨刷新

かくの如く端田方眞明講社が、その實質内容共に堂々たるものに一新されたるの時、一方赤

松方其後の二代講元阪倉佐助氏に率ひらるゝ神明講社第二組に於ては、何うであつたかと云ふに、赤松氏の不始末の結果失脚して以來、又昔日の元氣なく、一方端田方の堂々たる刷新振りに只々刺激されて、同十七年舊四月、上掲端田方の規則を全文たどしき假名で書き寫し、又同月付きで次ぎの如き講員名簿が記されて残されてある。(住所は編者起入せり)

眞明講社

講元	阪倉佐介	兵庫宮内町
取締	眞鍋卯吉	兵庫門口町
會計係	松田源兵衛	
周旋方	榎谷卯吉	
同	中村治介	
同	淺田卯兵衛	
同	福井友三郎	

同	三田音吉	兵庫門口町
同	木谷嘉右衛門	兵庫門口町
同	堀口竹造	
平講社	細川彌三郎以下計十六名	

以上總數二十六名。然してその端田方に比して、根が淺く微力である事は、一見してわかるのである。かくて立講當初の指導者、赤松平四郎氏を失つた同講では、前記の如き充實せる端田方に對して、之に對立して獨自の講勢の進展をはかるだけの氣魄も亦無かつた。僅に端田方の模倣と追隨がなされた。然しその追隨が又何時まで續かうぞ。遂に幾何もなくして同講は解講して、端田方に合流するに至るのであるが。(それは次章に述べる) かくて元初に元の理に逆つた赤松方の開講の久しく續かず。又赤松其人の慾と高慢との爲めに、當時尙本教の施設の混沌たる時代なるにも拘らず、遂に解消の止むなきに至つた事は、本教の教義的意義の現はれとして、又注意すべきではなからうか。

第三章 兵庫眞明組第二番への伸張

第一節 伸張の基を築きし人々

明治十四年舊七月、兵庫和田崎町百四十五番屋敷の唄小富士女の靈救と感激に端を發した和田崎町よりの道は、その翌明治十五年舊八月十五日、兵庫北逆瀬川町三番屋敷の端田久吉氏を講元として、講員僅に十八戸を以て、其名の漠然たる只單なる眞明請社なる講を組んだが、その後の一年有半の同講員の活動は兵庫神戸の當時神戸區と稱した全市に及び、更に明石、美嚢加古等の隣郡に擴大して行つて、その内面の必要上大刷新をせなければならぬ様に迫られた。それが明治十七年舊正月の講の更新、及び同五月の天輪王眞明講社の呼稱と、當講最初の内規二十條の起草となつたのであつた。然してこれが兵神の道の鞏固なる講の結成となり得た最初

のものであつた。

節から芽が出る。この節はやがて以下述べむとする第二、三節の、より強大なる發展となるのであるが、それを記す前に、まづその根本動因を爲した主要なる大先輩の努力と苦心を掲げて置かう。

一、其後の本田せい女

明治十五年(初日)本田せい女は、二度目の御地場参りをした。其頃又もせい女の腹は持病の脹満で大きくなりかけて居た。之れを御覽になつた御教祖は、

「おせいさんく、あんたその腹抱えて居るのは、つらからうな。けど此世の埃やないで。前々生から負ふとるで。私がきつと利益あけまつせ。心變へなはんえ。なんでもと思ふて、この紐放しなはんえ。あんた前々生の事は、何にも知らんのやから、許して下さいと御願ひし、神様に御禮しとりなはつたら良い。」
と、御言葉を下されたのであつた。

人間力で何うする事も出来ない執拗なる持病の難症に常住苦しめられてゐるせい女には、この御教祖の御言葉一つが頼りであつた。なんでこの命の紐を放し得よう。前々生から三代積み重ねた罪を思ひ、その救ひを思ふと、歸來一日もじつとして居れなかつた。彼女は毎日晝から御助けに出た。

其頃湊川附近に「犬殺しの鳥」といふ乞食が住んで居た。その弟が頼瀧で難儀してゐると聞いたせい女は、相手がどんな賤しい乞食であらうと願ひる處ではなかつた。只自己三代の負恩を果たさんがため、毎日その乞食小屋へ通うて、遂に助けあけられたといふ。この一例が、如何にせい女の敬虔かな、然も火のやうな奉仕に燃えて居られたかが解る。

次にせい女の當時の御助け振りとして、傳へられて居るのに、彼女は御助けには、どんな寒中でも常に水行して御願ひしてゐた。さうしてまづ神様を御祭りし、天の月日様を目どうとして禮拜し、神様の貸物借物の理の話を土臺として取り次ぐ。それより御願ひにかゝるのであるがその御願ひといふのが、三序歌の御勤めのみならず、「よろづよ」まで座つたまゝ、手踊りし、

それから「なむてんりおうのみこと」といふて撫でるだけであつたといふ。然し人々は不思議に助かつて行つた。

それで彼女の和田崎町の宅では、毎晩大勢人々が参つて来る様になつた。其頃神前には酒の銚子みたいな御神酒徳利に御水を入れて御供へして居た。眼病の人などは、その御水を眼に頂いて入れた。染んで痛かつたが、翌日になると必ず御利益があつたといふ。何病にもかうして御利益が驗者にあつたので、毎日その徳利に二本位空になつたといふ。

これが後日結講後の端田方にも受けつがれ、初めは五合程入る錫の水玉(兵神大教)に御水を入れて神前に御供へして居たが、後講社が殖えて参詣者が多くなり、それでは足りない處から、彼の明治十七年正月講員の名を周圍に刻した經一尺にも及ぶ銅地鍍金の大水玉(兵神大教)を設ける様になつたのである。神前の中央に彼の大水玉を安置した状景を想ひ浮べると、今も尙當時の有様が彷彿する。

彼様にせい女方に大勢人々が参つてくるものから、又反對する速中も出来てきて、狐や狸や

と言ひふらしたり、晩になると石を投げ込んだりせられたものである。後(明治十九年)には又巡查が屢々取調べに来て、そのために神様の前に、天照皇太神宮様の御札を並べて誤魔化した事もあつたといふ。

講社を結んでからは、せい女は和田崎町の大先聲として、兵庫神戸は愚か、明石郡の垂水地方や武庫郡の鳴尾村迄も、あの太つ腹を抱へて、日々御助けに運ばれた。彼の三宮元町組の傑物、清水與之助、増野正兵衛の兩氏も、入信當時は一方ならずせい女の指導を受けられたものである。その故に其後も兩氏はせい女には、長く姉事せられたといふ。

かくてせい女は入信後兵神草創の間にありて足掛け六ヶ年間、女流屈指の御助け人衆として一日として變る事なき誠を、神と人との上に捧げられた。それがやがて世にも珍らしき、生きて生れ代りの奇蹟を享けらるゝ事となつたのであつた。

明治十九年の秋、せい女は又も持病の脹滿で重態となつた。せい女は身の苦しい處から、或は起こせやの、或は臥させやのと云つて、悶え苦しんだ。講員は交々熱誠以て平癒を神様に祈

願したが、何等の効験が無かつた。益々重態となつて行つた。それがために講元端田久吉氏は周旋方片岡吉五郎、吉原庄吉の兩氏を伴つて、兵庫から夜通しに御地場へ伺ひに参られた。やがて仲田佐衛門先生の御取次ぎで、御教祖に御目にかゝり、右の次第を申上げて御伺ひ申し上げると、御教祖は、

「ねさせおこせは聞きちがひやで。講社から起こせといふ事やで。死ぬのやない。早う歸んでしつかりとおつとめしなはれ。」と仰せ下された。

そこで三氏は急ぎ歸つて講社の人々と共に、本田邸に集まり、夜壹六座三日三夜の最も重い御かぐら立勤めの御願ひがなされた。三日は過ぎたが、少しも御利益は無がつた。反つてどつと床に就いてしまつた。それでもう一度と、三日三夜の御願勤めが爲されたが、益々悪く、その六日目からは、齒を喰ひしばつてしまつて、物も言はず。何も食はず。それから廿八日間死人同様になつて、寢通してしまつた。

其間家の人達は、僅に金米糖の御供三粒を毎日雪平に入れて焚き、それを機織る時に用ふる竹の管で、丁度上齒が二枚抜けて居たので、そこから辛うじて日に三度宛喰べさして居ただけであつた。

其際先年御世話になつた縣立病院の河本醫師に、又も診察を乞ふたが、同醫師は、

「診察せいでも解つとる。薬盛るにも及ばん。今度は死ぬから、死んでも心配しいな。死んだら死亡診断書は書いてやるで。」

と、前回同様、今度こそは死ぬと、匙を投げて診察しにも来て呉れないのであつた。

然るにその廿八日間、毎日く小便が出てく仕方がない。日に廿幾度といふて出るのであつた。それ故に何度となく布切れを取換へ綿を布いて居た。かくして廿八日目の朝、妹灘谷する女が、自然と着物も汚れて居るだらうと思つて、今日はその着物を着換へさせようとした處、豈はからんや、彼の脹滿の太鼓腹がすつかり引込んでゐたのであつた。

「るい！」

と、すゑ女は驚きの聲をあけた。その聲でせい女は初めて眼を見開いた。さうして周囲を見廻して居る。それをすゑ女が見て、

「おぼん聞えるか。」

といふと、

「勿體ないく。」

と、初めてせい女は物言ふたのであつた。今にして思ふに、毎日く取換へくした襦袢をすゑ女が洗濯して居ると、以前病院で醫療器具で取つて居た水と、同じ茶色の奇麗な水が出て居た。それは實に不思議な神様の御力で、さしもの頑固な持病の脹満を、せい女が前回助けられて以來、御教祖の御言葉一つを頼りとして六年間、一日として變る事なく助一條に盡し運んだ積年の功に愛で、人事不省の廿八日間、日々の夥たしき小便として、出し切つて下され、助けられて居たのであつた。

すゑ女は早速此の由をせい女の實弟北野熊次郎氏に知らして來て貰ひ、次で講社一同の人々

にも御知らせして、神様に御禮の御勤めが爲された。

其日本田家では、病人の着物から布圍から一切を仕換へた。さうして廿八日間神様の御水だけで、せい女は命をつないで來て居たのだから、「腹が減つて居るだらう。」といふので、御粥の薄いのを焚いて喰べさせた。すると二口喰べて、

「あゝおいしいよ。勿體ないよ。」

と云ひ、次で梅干で二膳程喰べた。その後「とろゝ」を三四膳も食べる様になり、日一日と力づいてきた。

然るに其頃同家は果物店を出して居たので、その果物や御粥を食べさせて居たが、どうした事か、出流れになつた。又物忘れして仕方が無かつた。一寸も覚えて居れぬ。忘れてく仕方がない。丁度子供の様なものであつた。そこで約一ヶ月後再び周旋方の片岡吉五郎氏が代參で御地場へ伺ひに出た。

事情を御聞き下された御教祖は、

「むりないく、一つやで。これが生きて、出直しやで。まだ年は若い。一つやで。なにもわからん。二つ三つにならな、ほんまの事わからんで。」

と、仰せ下さつた。せい女は生きながらに、出直させて頂いて居るのであつた。

實に此の御言葉の如く、せい女は二年三年と年が経つにつれて、次第にものが解り出してきた。それまでといふものは、まるで子供のやうで、着物縫ふたら寸法が違ふ。三味線が上手であつたが、それも忘れて一寸も弾けんといふ工合であつた。

然し年限が経つに應じて、だんく解る様になり、四年目位から従前の通りになつて、物差持つても、寸法違はず。着物のふくろも當り前に縫へる様になつたのであつた。

かくて脹滿の腹の引いた跡は、恰も松の樹の皮の様に、皮膚が厚くて、ぶかんくして居たが、それつきり持病の脹滿は、見事に助けられてしまつた。

當時四十九歳であつた同女は、爾來三十年、醫者にかゝる様な大病も起らず。引きつゝき熱心に御道の上に力を盡されて居たが、明治三十六年家事の都合で、妹灘谷すゑ女の一家に身を

寄せ、その一家と共に大阪へ移住した。

大正五年十二月六日、同家の若嫁が、先頃産んだ男の兒の卅日の宮参りの祝ひがなされた。

せい女はその祝ひの赤飯に焼物附きで頂いて、

「おいしいよ。」

と云つて、横になつたが、それからすやくと三日の間寝込んでしまつた。

其間さすつてくれとも、起こしてくれとも云はず。三日目に寢息きが出んと思ふて、家族の人達が、側へ寄つて見ると、彼女は枕して兩手を合し、合掌の姿でいと安らかに神に召されて居た。時に大正五年十二月八日、享年七十九歳、生きて出直してより正に三十年、その一命無しと初め云はれた入信時の靈救を受けてより卅有六年、不治の大難症を持ちながらも、遂に助けられて此の長壽を保つたのは、誠二代に亘る壽を得た事に譎はなかつたのであつた。かくて兵神の道の基を築いた最大の女人の一人本田せい女は、數々の尊き雛形の理を残して逝いたのであつた。

二、其後の端田久吉氏

次ぎには結講其後の一講の責任者、講元端田久吉氏に就て、その並ならぬ苦勞を叙さう。由來講元は理の臺であると云はれてゐる。即ち講社の信仰の目どろである御教祖の御赤衣を奉持すると共に、身自ら又講社信仰の蕊である。その故に講元は卒先して教理を實行して、講社に範を示し、講のために活動せねばならぬ。端田氏はよくその責任を盡されたのであつた。即ち氏はまづ同氏宅の二階に祭場を設けて御赤衣を御祭りし、同二階全部を講社の參拜場とした。そのために同家二階の料理業は、全く廢止せねばならなかつた。

次で御助けには、眞先かけて行かねばならなかつた。その御助振りを聞くに、神戸區(當時神戸區と云ふ)内であるならば、どこまでも氏は御赤衣を箱に收めたるまゝ、黄金の風呂敷に包んで肩に背負ひ、自ら奉持して出掛けて行つた。

やがて先方に到着すれば、まづ神様の御話を取次ぎ、次に水行して、一同と共に御願ひ動にかゝられたが、氏は先達として、座してまづ次の如く獨唱される。

「願ひ奉る國常立命様、面足命様、國狹土命、月讀命、雲讀命、惶根命、大食天命、大斗邊命、伊弉那岐命、伊弉那美命、各々御總名——。」

その「各々御總名」の聲を合圖に、一同聲を揃へて、
「南無天理王命、く、く、く——。」

と、三度唱和して禮拜祈願する。

次に、一同と共に、
「あしきはらひたすけたまへ天理王命。……。」
の御勤めを七遍して、その七遍目毎にその手を押戴いて禮拜、かくする事三度。次で同じく、

「ちよとはなし、かみのいふこときいてくれ。あしきことはゆはんでな。このよふのぢいとてんとをかたどりて、ふうふをこしらへきたるでな。これはこのよのはじめだし。なむてんりおうのみこと。ようしよし。」

と一遍。最後の「ようしよし」の言葉と共に、静に手を擦り合せつゝ、禮拜。次に同じく、

「あしきはらうて、たすけせきこむ。いちれつすましてかんろうだい。」を三遍して禮拜。その各遍毎に甘露臺の形を成して押し戴く。かくする事三度。次で尙も同じく「よろづよ」を座つたま、御手振りして、最後に「ようしよし」は、同じく両手を静かにすり合せつゝ、禮拜、而して祈願することに依つて、神前の御勤めを終るのであつた。之を「座り勤め」云つた。

それより氏は起つて病人の側に至り、御赤衣を、白木の檜のかぶせ箱に入りたる儘捧けまつつて、

「南無天理王命、く、く、く。」

と、三度唱名しながら、病人の病んでゐる身體の上を三度、撫ぜるがやうに振つて祈願され、以てその御願ひ勤めの一連が終るのであつた。

さりながら特に重態の病人に對しては、講元端田久吉氏は、多くの講員を語らうて、病家に出張し、「あしきはらひたすけたまへ天理王命」の御勤めより、十二下り手踊りの最後迄、本式に立ちてなす「御かぐら立ち勤めの願ひ」を爲された。

而も以上二種の御願ひ勤めが、病人の容態に依つて、一日一座の願ひより、一日晝一座夜一座の願、一日三座の願、一日晝三座夜三座の願に及び、更に右一日四種の御願態様が、夫々三日三夜にも及ぶ御願勤めがあつて、其數拾六種となる勘定で、尙その他もあつてか、種々その事情に應じて、それ／＼運ばれたものであつた。然しその何れの御願勤めによらず、如何なる病人でも、その生死に拘らず、必らず御願中には何等かの御利益があつたと云はれてゐる。

その故に日毎に御助けを願ひ出づる人續出して、その範圍が遂に神戸區内に止まらず、廣く播播の野に及んだのであつた。その結果講元端田氏の席は、誠に文字通りに、温まる餘暇とて無かつた。されば神戸區内は勿論播播の重なる教徒達にして、氏の御助けと指導を受けないものは殆んど無いと云つても、過言でないまでに盡し運ばれたのであつた。

さういふ譯であつたから、その一面の氏の私生活に於ては、尙一つ残された氏の家業穴子屋を、長男熊吉氏に委せ切りであつた。然るにこの端田氏の殆んど家を願みぬ布教振りには、忽ち家計に及ぼして、支出を激増し、収入を激減せしめて行つた。そのために息熊吉氏は尠ならず、心良からず思ひ、遂に焼を起して放蕩をさへしたので、氏は一段の窮地に陥り、明治十七年七月九日、第一回の氏の居宅（兵庫北道瀬川）の敷地建物を質入するの止むなきに至られたのであつた。その後も再三の質入され、遂に五拾圓の質金が支拂へず、同敷地建物を人手に渡すの止むなきに至られたのであつた。されば氏の子等も幼少の頃より何れも他にそれくと丁稚奉公に出すの苦楚を嘗められたのであつた。

子芋の成長するためには、親芋は空しく潰れる。この隠れたる苦しみを講元端田久吉氏が嘗められたればこそ、その初め僅に十八戸で結講したのが、明治廿一年末、兵神分教會設立直前には、兵神眞明講一千三百餘戸の大講社と成つたのであつた。此の講の伸張のもと、以上の如き講元端田久吉氏一家の犠牲の存した事は、兵神の道として忘るべからざる事では無からう

か。

次に、其頃の氏を偲ぶ當時の氏の御話の一篇を掲げて置かう。

「内々で親にすれ合ひ、兄弟にすれ合ひ、女房にすれ合ひ、親類にすれ合ひ、近所隣にすれ合ひする。

成り物でも、日々ぬくみ水氣そよく風があれば、誠に結構なれど、大風となれば、成り物がすれる。すれば落ちもする。踏みつぶしもする。

なすびでも、良きなすびと、すれたなすびと、手に持て人がどちらがすく。よき方が皆好く。よきなすび壹錢十を、わるいなすび三十と、どちらを人がすくやろ。

こゝに大木が二本ある。風が吹くで、すれ合ふ。すれ合ふから皮がむける。甘肌へかゝるから、甘肌むくれる。蕊にさはるから、大風が吹けば裂けもする。倒れもする。すればよき處につかふ事がでけん。その木でも根から切れば、一つの用にも立つ。つかへもでける。親に横たけになつた事はないか。思案せねば身が倒れならん。

神様の話むつかしといふけれど、なにもむつかしやないで。善と悪との道や。手のひらかへす様なものや。善の道行たらよい。むつかしといふは、學書物を知りた者が、小理屈をいふ事で、それが人を困らすといふのや。

人間のからだは、立てながしのやかた、造作してない。家にしても同じ事、戸棚もふき、箆もふき、掃除して塵を入れて住めば氣も良い。人間のからだも同じことや。八つの埃はらへば、身の内入り込んで晝夜共に御働き下さる。家でも同じことや。疊の上に水をこぼし、子に小便をさしてみよ。遂にくさりもする。蟲も湧く。身の内も埃つもれば、さなだ蟲、これら蟲も湧く。くさりもする。たんも出る。かん

(氣狂など)、かく(胃がん)、ろうがい(肺病)ともなる。』(明治十八年舊六月廿八日)

言ふ所至つて平凡、決して學者の如くあらず。而もその權威ある迫眞力、誠の教家の風格が、溢れてゐるではないか。

三、その餘の人々

かくの如き努力と苦心は、又嘗に本田、端田の兩氏に止まらなかつた。前々より特述したる和田崎町の道以來の先輩、殊に兵庫側の先輩の等しく嘗められたる處であつた。

その内兵庫南逆瀬川町の北條仁兵衛氏、兵庫和田崎町の吉原庄吉氏、兵庫切戸町の中村勝次郎氏、兵庫切戸町の藤崎おたけ女、神戸側では熊内村小川谷の末村喜助氏等の諸氏が、殊に傑出したる當時の布教線上の第一人者であつた。(後併合されるが、赤松方神明講社第二組の二代目の講元、兵庫宮内町の阪倉佐助氏の變らざる盡し運びも、其頃の上記の端田方の諸氏と共に忘るべからざるものであつた。)さりながら茲にそれらの人々に就て一々詳述するの餘白を持たぬ事を憾みとする。

由來兵庫出身の先輩は、何れも匂ひがけに御助けに、布教線上の活らきに於て、拔群のものがあつた。蓋しそれはその旺盛なる布教精神に基くものであつて、長く我が兵神の道の龜鑑であらう。

其後に出でたる神戸側の先輩の充實したる盡し運びの道も、實に是等兵庫方先輩の努められ

たる基礎の上に爲されたもので、兵神の道がその潑刺たる布教の實際を思ふの時、常に是等兵庫方先輩の雛型の道に鑑みる所がある可きでは無からうか。

第二節 神戸の花隈、宇治野組講社の入信

大きい道には大きい働きを爲す者が要る。御地場を中心とする道は、其頃益々大きい道具を所要されて居た。兵庫方の人々に依つて開かれた端田方眞明講社は、その純一にして熱烈なる信仰によつて、大きい道になる素質が十分出来てゐた。それがやがて大きい道具を呼び入れる事となつた。その第一は、神戸側の三宮、元町組の講社の人々の入信であるが、次章に詳述するから茲では略する。

次には神戸の花隈と宇治野兩町の入信講社であつた。こゝにはその代表として、花隈町の中井のぶ、松田くに、岩崎新兵衛の三氏及び宇治野町の磯村卯之助氏の入信事情を述べて置かうと思ふ。

一、中井のぶ女の入信

明治十六年舊十二月に入信された中井のぶ女(天保元年七月八日生 入信當時五十四歳)は、其頃神戸花隈町二百五十番邸で質屋をして居た中井宗助氏(後隠居して宗)の妻であつた。夫宗助氏は元播州加西郡九會村綱引で生れた人であつた。若年にして神戸に出て来り、兵庫の「いづや」の酒屋の男衆から身を起して、後花隈町に一戸を立て、素麵屋を爲した。又のぶ女は元神戸二ツ茶屋(理元町三)の平松家に生れ、橋本家に養女に貰はれ、その橋本家より宗助氏の素麵屋時代に氏に嫁して來たのであつた。

その後夫宗助氏は屢々素麵屋では失敗したので、遂に質屋を始めた。然るにそれが當を得て居たか、以後大いに産を成して行つたのであつた。

然しながら二人の間には子が無かつたので、夫宗助氏の一番弟であつた宗七氏(天保十四年八月四日生 入信當時四十一歳)を養子とした。然るに其後宗助氏は、近所の某家の女中某と關係して、廣太郎といふ實子が生れたので、養子宗七氏は明治十七年四月神戸元町一丁目六十六番地(次門の)に別家する事と

なつた。然し入信當時はまだ同居して居た。

其頃のぶ女は、六年前から、ゑらい癩氣持で、時々きつい腹痛を起し、男三人がかりで抑へつけても尙はねあるく位であつた。それでのぶ女は阿彌陀様を熱心に信仰した。養子の宗七氏も母と信仰を同じうして、信濃の善光寺へも参り、歸來友人某と共に、善光寺講を組んだ程に熱心して居た。然し夫の宗助氏のみは大の法華凝りで、その妻子と信仰を異にして居た。然るにのぶ女の癩氣は、阿彌陀様でも治らなかつた。又夫の法華宗の珠數で撫せても治らなかつた。勿論醫藥でも治らず、困りぬいて居た。

時に同町の舊家村上五郎兵衛氏方へ、前記した神戸熊内村小川谷の末村喜助氏の妻おきぬ女が女中に来て居た。中井家はその村上家と心安かつた。さういふ處からのぶ女は、そのおきぬ女より本教の結構な教である事を遂に聞く様になつた。かくて

「これこそ助けて貰ふ御道や。」
と、深く感じて入信されたのであつた。それが前記した如く、明治十六年の舊十二月、のぶ女

五十四歳の時であつたのである。

明けて明治十七年のかゝりであつた。のぶ女は突然相續人廣太郎氏の若嫁、當時まだ十四歳になつたばかりの千代女一人を連れて、急に大和の御地場へ参詣すると云ひ出した。

然しながらあのきつい持病の癩氣持を、知つてゐる家族の人達は、

「若しも道で悪ふなつたら、どうするか。」

と云つて心配し、宗七氏は「ついて行く。」と主張された。然しのぶ女は、

「いや、お千代一人でよい。はたに一人居たら、道でどないなつても結構や。」

と云つて、斷乎として餘人の同行を拒まれた。「それでは、」といふので「ザグ」に懷爐と有難い法華宗の珠數とを入れて、せめては、

「これを持つて行きなさい」

とすゝめた。それは一は御腹を温めるため、一は癩氣の治まりに、不思議な御利益があるといふので、それまでは何處へ行くにも、のぶ女はこの二品を持参したものであつた。

然るに此度は、どうした事か。

「そんなものは、要らんねや〜。」

といふて、のぶ女はそれさへも、持参する事を拒まれた。さうしてまだ子供あがりの可弱い若嫁千代女一人を連れて、御地場へと歸つて行かれたのであつた。そこには既に確固たる親神様に對する深い信頼の念があつたのである。幸に道中何の恙もなく、二人は御地場へと着く事が出来た。さうして初めて御教祖様に親しく御目にかゝり、ありがたい御言葉を受けた(その内容傳はらす)のぶ女は、これこそ

「眞實神様に違ひない。」

と、心から深く御教祖の御靈徳に感激したのであつた。

然るにその夜御屋敷前の豆腐屋で一泊してゐた處、何とした事か、その夜更けてから、のぶ女の御腹がしく〜と痛み出してきたのであつた。正に持病の癩氣が起きてきたのであつた。のぶ女は一心に親神様に祈念した。暫く辛棒してゐると、急に便意を催してきた。が又さて因

つた事には、今夜初めて泊つた宿の事とて、何處に便所があるのやら分らなかつた。こんな事なら晝間見て置いたら良かったと思ふても、もう追つつかかなかつた。ともかく痛む御腹を抑へながら、裏口へと出てみた。

するとそこにタンゴ(大小便を汲みかへる桶のこみ)様の桶が置いてあつた。

「これがタンゴかいな。さうでもなささうだが。」

と思つたが、何分勝手がわからぬ上に、厳しく便意がつのつてくるので、止むなく其處へ便をした。然るに驚いた事には、出るは〜、實にとつさりと大量の便が出て、一時に御腹がすうつと軽くなつたのであつた。

「まあ結構にして頂いた。」

と、そのまゝ元の座敷へ歸つて、寝ませて頂いたのぶ女は、それから朝までぐつすと、御腹の痛みも忘れて、誠に心よく熟睡させて頂いた。

翌朝起きて裏へ出て見ると昨夜の桶はタンゴでなくてそれはニナヒ(湯水を汲み入れて運ぶ桶のこみ)であつた。

「あゝ、濟まん事をした。」

と、のぶ女は一方ならず恐縮して、深く店の方に御詫びをした。然し店の人達が、

「へい、よろしく。」

と、何の氣にも止めず、快くいふて下されたので、「やれく。」と安心すると共に、又一しほありがたく感謝されるのであつた。

それ以來のぶ女の癪氣は、すっかりと起らなくなつた。一意まかせ切つたる神様への眞實信頼は、見事に受け取つて頂いて、七年越の癪氣病を、一夜の間に御救ひ下されたのであつた。かくて更に多大の感激を與へられた彼女は、爾來兵神の道の婦人界の明星として、輝く盡し運びの道に入られたのであつた。それと共に、別家せる養子中井宗七氏も、母のぶ女の信仰を受けて共に深く熱心し、母子相携へて兵神草創の際、多大の功猷を道に致されたのであつた。今も尙中井兩家に残る二つの御赤衣を始め、數々の御本席様方などの拜領品は、ありし其日の深き結縁を物語つてゐるのである。

二、松田くに女の入信

中井のぶ女の入信に數月を遅れて、明治十七年舊四月、兵神の道は今又一人の有爲の女性を入信せしめた。それが當時神戸花隈町百十三番邸の松田くに女(私花四年五月十日)である。

くに女の夫、松田常藏氏は、元播州龍野在崎崎の生れで、井内といふ姓であつた。青年の頃神戸へ素麵屋働きに來て、後花隈町で一戸を構へて八百屋をして居た人であつた。初めその花隈町で八百屋をしようとした時、同町の庄屋から、

「花隈の住人になつて貰はにや、此處に居つて貰ふ事は出來ん。」

と云ふて來た。それで花隈の住人になる事を誓つた。すると又

「處で花隈の住人になるに就ては、この御寺(花隈町の福徳寺)に信仰して貰はにやいかん。」と云はれた。それで又その御寺の檀家となつた。すると又、

「花隈には松田の姓が死に絶えてゐるから、その松田の姓を起して貰ひたい。」

と又云はれて、これまた元の井内姓を捨て、松田姓を名乗つたといふ勤勉で忍従強き人であつ

た。妻のくに女も又、元播州網干町の網野吉五郎氏の二女であつたが、常藏氏が花隈町で八百屋を始めた頃、嫁いで来たのであつた。

其頃は家屋敷も無く、田圃も無く、ほんの借屋住居をして居たが、その後夫婦共稼ぎで、稍財産を拵らへ、入信當時は漸くその八百屋をして居た家屋敷を我が物として居た。その後間もなく又同町で約百三十坪の地所(これが明治廿二年兵衛分會設置に付、松田氏夫妻が欲購)を買ひ、そこに借家を建てた。二人の間には源藏(明治二年三月生)と清藏(明治十年二月生)の二人の子供が出来た。

入信の動機は、さきに明治十五年末、赤松方講社の國本のゆき女から匂ひかけられて居たが、赤松講元の失脚から、信仰するに至らずして止んで居た。

然るに元來くに女には頭痛の持病があつた。明治十七年の舊四月である。くに女は又何日も頭痛で、しんどうて寝て居た。すると松田家は前述した様に、八百屋をして居たので、當時青物行商をして居た前記和田崎町の吉原庄吉氏が青物の卸に来て、くに女の臥て居るのを見て「神さん信心しなはれよ。」

「何神さんやいな。」

「天りんさんや。」

「そんなら去年(明治十年)の元旦の晩に、本陣(兵庫の長)に講社勤めがあるといふので参つたが、無かつて歸つて来た事がある。」

といふと、吉原氏は、

「兵庫能福寺前の穴子屋(編田久吉)へ参りなはれよ。ありがたうおますで。」
と、匂ひかけられたのが、愈々入信の初めとなつたのであつた。

丁度その日の晩、山手再度筋で水車屋をして居た末村喜助氏宅で、講社勤めがあつた。それで、右吉原氏より、

「参りなさらんか。」

とすゝめられ連れられてまづ夫常藏氏がその講社勤めに御参りした。然るに其席上常藏氏が、「妻おおくが、頭痛で困つとる。」

と、話をしたら、そこへ参り合せて居た神戸北野町の上田與惣兵衛氏が、
「内には御地場から貰ふてきた甘露水があるから、餘計もないが、盃に一杯位はやらう。明日
取りに御出で。」
と云ふてくれた。

やがて御勤めが済んで、歸つて来た常藏氏は、

「御勤めやといふて、手を妙な格好に振つて居た。」

と、妻くに女に話し、翌日上田氏からその甘露水を貰ふて来てくれた。くに女はそれを痛む頭
につけた處、不思議に助かつたので、遂に松田一家は入信する事となつたのであつた。

その後、吉原庄吉氏が又来て、

「これ見たら、どんな事でも解るのや。」

と云つて、御かぐら歌の本を貸してくれられた。夫妻はそれを讀んで、「成程」と思ひ、次で
同十七年舊七月十日、松田夫妻は二男清藏を連れ、同町の野本七兵衛夫妻及其息七之助、その

ほか藤田和吉、土屋の長七、及び宇治野の磯村卯之助氏妻おさき女及び其息政吉の諸氏等と共
に十人連れて、御教祖様の奈良監獄から放還せられまして、御歸りになるのを、奈良迄御迎へ
に行つたのであつた。さうして親しく御教祖の御偉大に接して感激してより、より一層その信
念を堅めて居た。然るに同年末よりくに女は嚴しき御手入れを受けたのであつた。

明治十七年の暮近き或日であつた。くに女は便所へ行つて、歸りにすい込みの處で倒れて俄
かに足が起たんやうになり、手も足も動かん様になつてしまつた。即ち溢血したのであつた。

俄に醫者よ薬よと騒いで見たが、溢血してしまつた後は容易に如何とも仕様がなかつた。や
がてくに女の急を聞いた講社の先輩達も亦、兵庫からも神戸からも訪ねて來られて、色々御
話もし、御願もして下さつたが、これ又少しも御利益が見えないのであつた。

そこで講元端田久吉氏は色々心配して下されて、重なる周旋方とも談合の上、御地場へ歸つ
て神様のさしづを伺つて下さる事になり、兵庫の中村勝次郎氏が代表で御願ひに行つて下さる
事になつた。然るにその神様のおさしづに、

「さあ、前々生此世三代の恩が重なつた處、一時にあらはれた。もう本人は無いのやで。なれども……。」

それは前々生より此世にかけて、三代恩が重なつて、それが一時にあらはれ、もう本人くに女の命は無いと、仰せ下さる絶望の御言葉であつた。さりながらそこに、「なれども」と仰せ下さる御言葉に、一縷の望みが囁かれたので、伺ひの榊井伊三郎先生より、

「なれどもと仰せ下さる處は、どういふ處でありますか。」と、押して御伺ひ下さつた。すると、

「この願ひ、御かぐら立ち願ひ、よるひる六座、三日三夜してやつてくれ。それで利益が無かつたら、そのあとは、あしきはらひの願ひ(前記座り)を、日に三度つ、三日してやつてくれ。これで利益が無かつたら、本人の眞實次第や。」

かく仰せ下さるのであつた。御かぐら立ち願ひ、夜晝六座三日三夜の願ひとは、本教最重の御願勤めで、「あしきはらひ」の御勤めより、十二下りの終りまで、多数人数を揃へて、本式に

立つてお勤めをなして御願ひする事である。而もそれが、晝三座夜三座の三日三夜するのであるから、殆んど三日の間、之に勤むる講員は不眠不休であらねばならぬ。次ぎに「あしきはらひ」の願ひにしても、日に三度宛三日すれば、殆んど之れに掛り切らねばならぬのであつた。然して尙ほこれにても利益なき時は、本人の眞實次第やと、その最悪の場合をも御指示下されたのであつた。

代表中村氏は、御地場から歸つて来るなり、早速松田宅を訪れて、病めるくに女に、直下にこの神様の御話をしてしまつた。そこへ端田講元や、その他清水與之助氏等も來られて、

「そんな話を病人にぢかに話してしまふものがあるか。病人が勢を落してしまふやないか。」と、中村氏に話された。すると中村氏は、

「丁度神様の御指圖を頂いた晩、豆腐屋で寝て居たら。夢に大きな河があつた。その河に大きな岩が突き出て居た。その下は深いく淵となつて居て、そこへ大きな鯉が入つて來た。中村氏は、魚ぐしで其の鯉めがけて突きさしたら、見事に鯉の横腹へ、グサツとさせたと思

つたら眼が覺めた。」

かういふ夢物語りをしながら、氏は更に語をついで、

その御指圖を頂いた翌朝、御地場の某先生に、

「よんべ先生、ゑらい夢を見ました。」

と、以上の夢の話をした。するとその先生は、

「それは早う歸んで、此度の神様の御指圖を本人に直下に聞かすがよい。きつと病人に鯉の横腹に差し込むやうに、こたへるから。」

と、御聞かせ下された。

かういふ事情から、かく御指圖の旨を、くに女に直下に話をしてしまつた理由を物語られたのであつた。

そこで端田講元は、志ある熱心な講社周旋の衆を誘ひ合せて、再び松田家に至り、神様の御指圖通り、まづ夜晝六座三日三夜立ち勤めの願ひがなされたのであつた。然しながら少しも御

利益が見えなかつた。

そこで第二のあしきはらひの座り勤めの願ひが、更に日に三度宛三日に亘りて、御指圖通り爲された。然るに又も御利益は少しも見えなかつた。

そこで端田講元は、講員を代表して、臥てる病人くに女に向つて、

「この通り神様の御指圖通り願はしてもろても、御利益が無いのやから、あとはもう本人の眞實次第やと仰しやる。これからはあんたの眞實で御利益もろて下され。講社は何もほつとくのやない。さあと云ふ時には、何時でも來るけれども、今は御指圖通り一まづ引かして貰ひますから、どうぞあんたの眞實で助かつて下され。」

と云ひ置いて、講員一同を連れて歸つて行かうとせられた。くに女は一時に荒野に一人残される様な悲しい思ひがした。

時に其場に兵庫の先輩麻川與市氏が居られたが、氏も亦前年脚氣の大患の際、神様に伺つてくに女と同様、「前々生此世三代の因縁である。」と御諭し頂いて、その中から助かつた人であ

つた。そこで今は本人の眞實次第と云はれて居るくに女は、麻川氏に、

「どういふ精神を定めたら、助けて頂けますか。」

と、氏の體験を尋ねてみた。然し氏は之に明確なる解答を與へて呉れなかつた。

やがて講元以下は歸つてしまはれた。かくて全身の自由を奪はれ、只臥て居るより外に仕様の無いくに女は、どう自ら眞實の心を定めてよいのか、正に途方に暮れたのであつた。

それを見兼ねた夫常藏氏は、

「それでは今一度、私が大和の御地場へ負ふて參つて、願ふてやる。」

と、さすが夫なればこそ、交通不便の當時常藏氏は、身體の自由を全く失つたに女を背負ふて二十幾里、その大阪まで汽車があつたが、それからさきは二人乗の俵で御地場へと連れて參られたのであつた。

やがて豆腐屋へ着き、それから直ぐに御屋敷へ參らせて貰つた。門長屋を入ると、小さい厨(盛所の)があり、次にかんろうだいがあつた。そのかんろうだいを伏し拜んでから、御教祖の御

座す御座敷(明治十六年に建てられた休息所のこと)へと、常藏氏はくに女を背負ふて行つた。

御教祖の御座す御座敷、そこには狭い椽があつた。そこでくに女は夫の背から降して貰つてゐると、早くも見られた御教祖は、

「おう／＼よう御歸りなさいましたなあ。あんた身に障りがあんなはらこそ、御歸りなしたのやろ。」

「左様で御座ります。」

「よう御歸りなさいましたなあ。神様は身に障りをつけて引き寄せると仰しやる。こゝはあんなの親里だつせ。」

と、いとつくしみ深く仰せ下されて、くに女の身體を抱へるやうにして、疊の上へ御降ろし下さつた。さうして懇ろに御いたわり下されたのであつた。

やがてくに女夫婦が退り出てから、御教祖は御側の方に、

「今晚私が入りました風呂の湯を、豆腐屋へ持つて行つて、あの病人さんに入れてやつておく

れ。」

と仰せ下され、尙も後程御教祖様の御喰べになつた御夕飯の御残りも、

「これも豆腐屋の病人に喰べさしておくれ。」

と仰せ下されて、御側の某婦人から、

「神様の御下げやさかいに、頂きなはれよ。」

と云つて、持つて御よこし下された。

それは「おぢや」と云つて、御粥の堅い中へ、「おかず」の這入つたやうなもので、一名雑水といふものであつた。その外に尙團子と、以上二品持つて来て下された。くに女はそれを有難く頂戴したのであつた。

次で御教祖の御召しになつた風呂の湯を、豆腐屋の若主人村田長平氏が、替へ出して、同家へ持ち帰り、くに女はそのありがたい御湯にも、入れて頂いたのであつた。

然るに、それほどまでに手厚い運びをして頂いたのにも拘らず、くに女の身上は些かの御利

役も見えないのであつた。のみならず其夜巡査が臨検に来て、

「此の病人は何しに連れて来たのだ。」

と詰つた。壯健な者なら、「大和めぐりに來てゐるのだ。」と言譯も立つが、身動きも出來ぬ重病人、その言譯も出來ず、すると巡査は、

「おみき婆さんにだまされて來たんやろ。今から出て歸ね。」

と、嚴しく叱つた。然し日は既に暮れて、四邊は眞暗になつて居た。それで夫常藏氏は、

「この通りの重病人、どうぞ今夜だけは御免るし下され。」

と漸く頼んで、其夜だけ宿めて貰ふ事になつたが、

「明日は早う歸ね。」

との嚴命を残して、巡査は歸つて行つた。

その後へ仲田佐衛門先生が來られた。さうして扇の伺ひをして下されて申さるゝには、

「神様の御召しになつた御湯を頂いて、入れて貰つたら大概足が立ちよつたのに、あんたにそ

の御利益がないといふのは、あんた家を出しなに、なんと心得違ひがおますやろが。」と御諭し下さつた。

そこで思案さして貰つたのに、

『私はこれだけ悪うて勤けんのに、なんほ御地場へ連れて歸つて貰ふても、所詮助かる事はむつかしからう。そんなに助かるか、どうかわからんものを、この勤けんのに連れて行つて貰つてもなあ。』

と、出しなに思つた。それが心得違ひであつたかと、くに女は深くざんげした。然し身上は遂に何等の御蔭をも見る事が出来なかつた。そこで

『せめてもう一日御地場に置いて頂いたら。』

と、切に名残が惜しまれたが、先刻あゝまで厳しう云ふて歸つた巡査の事を思へば、それもならず。どこまで我身は不幸せなものかと悲嘆に暮れつゝ、翌朝まだ白みかけもせぬ午前三時頃の夜の内から、豆腐屋の主人に俵に乗せて貰つて御地場を後にして歸つて行つたのであつた。

丁度龍田まで來たら、漸やく東の空が白み初めて來た。それは寒前であつたので、大和の冬の夜の大氣は殊の外冷たかつた。そこで俵を乗り換へて、逃ぐるが様に大阪を経て、神戸の自宅へと歸つて來たのであつた。

さてかうして歸つてきてからは、くに女はこれではとても助からん。醫者で助からず。信心でも、どんなにして頼みすがつても、自らのしんじつの心定めならぬ他力では、どうしても助けて頂く事が出来ない。「此上は本人の眞實次第や。」との神様の御言葉のみが、ひとり救ひの鍵を持つ事を知つた。

然らばどういふ眞實の心の價を持つつたら、助けて下さるのであらうか。常々聞かして頂いて居るのに、「病の元は心から、その心は八つの埃の心からである。」と、それではその埃の心を一つでも取つて、

『これから生涯さういふ埃の心づかひはしまへん。』

といふ心の價を以て、神様に御願ひしようと思案した。

ではその八つの埃の心の内、どれを止めようかと考へてみた處、「はらだち」一つを止めようとしても、腹の立つのも、にくいやうらみからでもあり、我身や我子かはいからでもあり、又ほしい、おいしいからでもあり、よくとかうまんからでもあつた。その一つを取らうとすれば、その凡てを取らねばならなかつた。それは到底くに女には、出来さうではなかつた。

かう考へてくると、くに女は自らその眞實を定めようとして、遂に定めるよすがもなかつた。所詮私は助けて頂く事が出来ないのか。三代恩が重なつて、かうした病氣で果てたなら、來世は牛馬の道に落ちると聞かして頂いたが、さても残念至極よと、くに女は我家の神棚の方を向いて、

「神様、私はとても人間界は通れんと思ひます。此度このまゝ迎へ取られたら、さきは牛馬へ行かうより外は御座いませうまいがな。それではあんまり酷う御座います。どないぞ助けて頂きたう御座います。」

手を合して拜む自由さへ奪はれた身には、只うらみつらみの言葉を並べながらも、尙救ひを神

に願ふて居た。他力でもならず、自力も亦能はず。かくて空しく蓄生道に只轉落し行かむとする、それは餘りにも弱き人の叫びであつた。

さりながらかうした絶望の境地にありて、尙神様にすがり得るは幸である。なぜなればその願ひの一すぢ心なる限り、必らず聞かれるべきであるからである。即ち此の時ふと、くに女は次の事を想起した。

「三代の因縁ようこ、まで踏ん張つて下された。もう子供も膝の上の子はなし。」

と、時に彼女の長男源藏は十六歳、次男の清藏は八歳、然してこの感謝の心こそ、まづ救はれゆく心そのものではなからうか。やがて喜びの心には喜びの理がまはる。くに女は更に其晩、又ひよつと、毎日かどへ来る澤山の乞食の姿を思ひ浮べた。さうして思ふには、

「私はこない手足の自由が叶はん様になつて臥て居つて、三度の御飯だけは、たつしやな時と同じやう、三膳喰べるは過ぎる。二膳宛にして、一膳はかどへ来る乞食に喰べて貰はう。それでこれから、三度々々私の喰べる御飯の御初穂を、一膳どけて置いて、それをかどへ来る

「乞食に喰べて貰はう。」

と、そこで長男源藏を呼んで、この話をした。すると、

「お母さん、それは生涯定まりますか。」

「私は生涯はよう定めんが、臥とる間だけは二膳で結構や。どうぞ明日からさうして乞食に喰べて貰ふておくれ。」

その定める處は、甚だ卑近であつた。然しそれは身に直接した點に於て、正直と切實さがあつた。やがてその翌朝から、その心定めは實行された。

それから二日目である。くに女は何氣なく御腹へすつと動いて行つた我右手に驚いた。「あつ、これは不思議や。」と思つて、その手で御腹をさすつてみた。すると腹のしびれもすつきりと助けて頂いて居た。

「まあ一べん来ておくれ。」

くに女は喜びの聲を擧げた。飛んで来た息源藏に、

「私の御腹を見たら、こつかりしびれが、御蔭もろとる。」

「まあ感心だすなあ。然しお母さん、あんた乞食へやつたから、助かつたと思ふては違ひまつせ。喰べて貰ふて結構やといふて、二膳でたんのうして、人の腹を助かつて貰ふたから、

あんたの腹が助かつたのです。」

源藏は年に似氣ない聰明な子であつた。低いやさしいたんのうと、人を助ける心の實が、やがて我身をも助けるに至る本教を理の核心を、短言以てよく指摘して諭したのであつた。

くに女は理の鮮やかなる現はれの一端を、初めて體驗して、

「なるほどこれは恩が重なつて居るのや。」

と、深く我身の重積した惡因縁の理に想到した。そこでより以上の助けを願ふには、より以上の恩報をさせて頂かねばならぬと氣づいた。

それは丁度寒に入る前であつたが、

「この寒の内三十日の間、毎日米二升宛御粥に焚いて、かどへ來る乞食さんに喰べて貰ふてお

くれ。」

くに女が第二の心定めはこれであつた。家人もよく此のくに女の願ひを聞き容れて、その通り施與を實行した。然るに此度は何等の御利益も見えなかつた。

然しくに女は決して失望せなかつた。彼女は更により以上の出来るだけの恩報じを考へた。それは、

「引きつゝいて三十日の間、米屋から毎日米一斗宛取りよせて、それを店の上り口に置いて、かどへくる乞食達に米のま、貰ふてもらひ、しまひにならにや、その日くくの店をしまはんやうにと、これが一ヶ條。次ぎには、くに女の物としてある着物や布圍に至るまで、悉く難儀な人に着て貰ふておくれと、これが一ヶ條」

やがて又三十日日毎の施與は怠りなくなされ、初願以來六十日、くに女の簞笥は遂に空になつてしまつた。

六十日目の朝であつた。くに女は腕や腰や脛に何となう力付いた様に思はれるので、起つて

見ようと思つた。それでまづ簞笥のある處まで這ひ出して見たが這へた。次に震へる手に簞笥の環を握つて、震へる足腰をふん張つて起つてみたら起つた。次で歩いて見ようと思つて、それから中戸を傳うて兩椽に出で、その樟子八枚つたうて店の間へ出る事が出来た。その店の間の奥に三疊の居室があつた。丁度朝なので、家族の人達は、今そこで朝御飯を喰べて居た。くに女は更にその三疊の間へも傳ふて行つて、樟子を開けるなり、「バア」と云ふも涙に曇つた。みんなは振り向いて

「あつ、足が立つたんかいなあ。」

と、驚喜して、その有難い神様の御蔭に感激したのであつた。

然しまだ手はふるひ、足はよろつき、物を持たねば立ち上る事も、歩く事も出来なかつた。そこでくに女は更に次の心定めを重ねた。

「表へ出さして貰ひましたら冬は綿入れ一枚、春は御み拾一枚、夏は御ひとよ一枚で、日々先生方の御供して御助けに出さして頂きます。さうしてこの花隈町は一軒も残らず匂ひかけ

さして貰ひます。又二十里離れた兄弟(播州御千可の兄弟)にも、必らず匂ひかけさせて貰ひます。」それは相變らず切實な心定めであつた。それから「明日は庭へ出よう。」と思へば出られる様になり、「翌くる日は前裁へ出たい。」と思へば出られる様になり、その次の日は「かどへ出たい。」と思へば出られる様になり、一日と御利益を受けて行つた。

そこで愈々表へ出られる様になつてからは、くに女は端田講元や、その他の先輩達に、御助の途上松田家へ立ち寄つて貰ひ、初めは足に草履をく、りつけ、手に兩杖ついてまで御伴して行つた。一度行けば片方の杖が取れる。二度行けば杖要らん様になる。三度目には、草履を足にく、りつけずとも行ける様になる。その又翌くる日行けば、下駄ばきで行ける様になる。その又翌くる日行けば、傘さして行ける様になる。かうして奇蹟は日毎に續けられて行つた。かく御蔭を頂くにつけ、くに女の感激も亦日毎に深くなつて行つた。更に次の心定めを重ねた。

「暑い寒いは厭ひません。人が六時に起きるなら、私は四時に起きさせて頂きます。人が十時

に寝るならば、私は十二時に寝させて頂きます。さうして仕事を仕越して置いて、毎日御助けに出さして貰ひます。」

何等の卑近にして切實なる心定めぞ。正に本教が眞俗不二の眞實道を、最も至順に實踐的に極めてゆくものではなからうか。

それからは毎日此方から、兵庫龍福寺前の端田講元宅へと出掛けて行つて、

「講元はん、御助けおまへんか。御伴させて頂きます。」と、何と朗らかな心境ぞ。かくして御助けに御伴して出るのが、甦生のくに女が唯一の楽しみとなつたのであつた。

その後も不思議な事には、くに女が二三日も家に居らうものなら、足の裏がかゆくなつてくる。かゆいと思ふて搔くと、足の裏に白まめが出来て歩けんやうになる。さんけして御助けに出さして貰ふと、すぐによくなつた。

若しも御助けに十日も行かぬものなら、自分がわるいか、子供がわるいか。反つて講元さん

の處へ、御助けを頼みに行かねばならぬ様になつた。

そこでくに女は、深く自己三代の悪因縁を自覺して、爾後遍へにたんこの理をおさめ、神一條にすがつて、定めた心に狂ひなく、助一條にと努めて行つた。

その甲斐ありて、花隈町六十軒、遂に残らず匂ひをかけ、その大半を講社にする事が出来た。然もその中には有爲なる人材尠ならず、後兵神眞明講乃至兵神分教會の中心勢力となつたのであつた。又その出生地播州網干町の、くに女の兄弟達も、程なく本教に導き入れたが、それが又はしなくも、飾磨講社(現西中教)を兵神に歸屬せしむる一つの機縁となつたのであつた。のみならず、身自らも、その後の兵神の道の婦人界の重鎮として、永年盡す所尠なくはなかつた。

くに女、それは誠に中村氏の夢に現はれた大きな鯉そのものであつた。而も以上の大患とその救ひへの、くに女の心事の動きと奇蹟とは、兵神の道の芽吹く頃の人達の、信仰の一面の眞髓を傳へて、稀れなる雛形の理を示してゐるのである。

彼の天輪王眞明講社の興起が、唄小富士、本田せい、兩女により深い感激とその活動が、その土臺となつた如く、今又その後の兵庫眞明組第二番乃至兵神眞明講の興隆が、その根基に、かく中井のぶ女や、松田くに女等によりて代表せらるゝ幾多の婦人の、より深き天の理への感激を藏し、然してその婦人等の活動が、その新興隆の重大なる因となつてゐる事は、兵神の道と婦人の力に就て重大なる結縁の存するを、深く考へさせられるのである。

三、磯村卯之助氏の入信

次ぎには我が兵神の生んだ最大の御助け人、當時神戸宇治野、後の下山手通七丁目二百九番屋敷の磯村卯之助氏(天保十四年十月七日生、生人信當時四十二歳)の入信事情を略述する。

氏はもと播州明石町の人で、十六歳にして父を失はれたらしい。その後何日の程にか氏は博徒の群に投じ、然して「くらさい」(博徒のサイコロの一面に鉛を入れて或日のみが出るといふ様)が上手になつて居た。又氏の堂々たる體軀と、その氣前の好きが女に好かれ、金と女には随分色々な道があつたらしい。そのために明治の初年遂に明石に居れなくなつて、神戸へ出て來た人であると